

向山戦争遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ)

2012.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

向山戦争遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ)

2012.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成16年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局の業務委託を受けた一般国道55号自動車専用道路(高知東部自動車道)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業は、高知南国道路と南国安芸道路に分かれますが、今回報告する向山戦争遺跡は前者の計画路線上に位置するものです。高知南国道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は南国市大堀に所在する西野々遺跡や関遺跡などで実施されております。西野々遺跡では弥生時代から中世に至る集落が検出されるなど貴重な成果を納めており、既に報告書も『西野々遺跡Ⅰ』・『西野々遺跡Ⅱ』・『西野々遺跡Ⅲ』として刊行されております。

今回報告する向山戦争遺跡は、これまで私どもが調査して参りました遺跡とは趣を異にしており、第二次世界大戦末期に旧日本軍によって作られたいわゆる「本土決戦」の陣地跡です。戦争遺跡の調査は、これまでも山城などの調査に便乗する形で行ったことはありますが、今回のように最初から戦争遺跡を対象に、しかも広い面積を調査するのは初めてのことです。

第二次世界大戦が終結してから66年が過ぎ、戦争体験者が少なくなっていく中で、戦争の実相や悲惨さを次世代に伝えて行く手段として戦争遺跡が注目されるようになりました。そして戦争遺跡を考古学の方法論でもって調査・記録して行くことの有効性とその意義は広く浸透しつつあるのではないのでしょうか。行政におきましても広島原爆ドームの世界遺産登録を契機に、戦争遺跡の調査や保存の重要性が認識されるようになりました。戦争遺跡は「負の遺産」と言われていますが、大地に刻まれた営為である以上、私たちは調査を通してその意味を追究し歴史構築に寄与しなければならないと思います。戦争遺跡は、戦後長きにわたってほとんど顧みられることはありませんでした。今次調査を通して、戦争末期の高知平野でどのような事態が進行していたのか、「本土決戦」の具体像の一端を明らかにすることができたと思います。地域と戦争とのかかわりについて新たな視点を提供することができたのではないのでしょうか。

本書が地域の歴史復元や歴史教育に役立つことを願っています。最後に、発掘調査に従事して下さった作業員の皆様、ご協力頂きました地元の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 森田尚宏

本文目次

第I章 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の概要.....	1
第II章 周辺の歴史地理的環境.....	2
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	3
第III章 遺構と遺物.....	8
1. 1群.....	8
2. 2群.....	16
3. 3群.....	31
4. 4群.....	37
5. 5群.....	41
6. 6群.....	45
7. 7群.....	48
8. 8群.....	51
9. 3号.....	56
10. 9号.....	58
11. 22号.....	60
12. 31号.....	60
13. 32号.....	63
14. 33号.....	64
第IV章 総括.....	68
1. 向山戦争遺跡の具体像.....	68
2. 「本土決戦」準備下における高知平野.....	73

表目次

表1 遺跡名一覧表.....	5
表2 横穴の法量及び特徴.....	66
表3 カスガイ観察表.....	67

挿 図 目 次

Fig. 1	向山戦争遺跡位置図	2
Fig. 2	周辺の遺跡分布図	4
Fig. 3	主要遺構分布図	9
Fig. 4	1群全体図	10
Fig. 5	1-1号平面・エレベーション	11
Fig. 6	1-2号平面・エレベーション	12
Fig. 7	1-3号平面・エレベーション	13
Fig. 8	1-4号平面・エレベーション	13
Fig. 9	1-5号平面・エレベーション	14
Fig.10	1-6・7号平面・エレベーション	15
Fig.11	1-8～10号平面・エレベーション	16
Fig.12	1-11号平面・エレベーション	17
Fig.13	1群交通壕エレベーション	18
Fig.14	1群出土遺物 1-6号脇:カスガイ(1～9) 釘(10～14) 交通壕:カスガイ(15) 1-11号脇:金具(16)	19
Fig.15	2-1号平面・エレベーション	20
Fig.16	坑道全体図	21
Fig.17	坑道A区平面・エレベーション	22
Fig.18	坑道B～D区平面・エレベーション位置及び遺物出土地点	23
Fig.19	坑道B～E区エレベーション①	24
Fig.20	坑道B～E区エレベーション②	25
Fig.21	坑道A～C区出土遺物 A区:カスガイ(17～19・31) 釘(20～29) センサン棒(30) B区:ブリキ板(32) C区:カスガイ(36) 釘(33・34) ガイシ(35)	26
Fig.22	坑道D～F区出土遺物 D区:カスガイ(37・38) チス(39) E区:釘抜槌(40) 釘と銅線(41) F区:釘(42・43) カスガイ(44～48)	27
Fig.23	2-2号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)	28
Fig.24	2-3号平面・エレベーション	29
Fig.25	2-4号平面・エレベーション	30
Fig.26	2-5号平面・エレベーション	31
Fig.27	6号平面・エレベーション	32
Fig.28	7号平面・エレベーション	33
Fig.29	8号平面・エレベーション	34
Fig.30	10号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)	35
Fig.31	5群19号平面・エレベーション	36
Fig.32	5群19号出土遺物(カスガイ)	37

Fig.33	5群20号平面・エレベーション	38
Fig.34	5群21号平面・エレベーション	39
Fig.35	6群14号平面・エレベーション	40
Fig.36	6群14号出土遺物(カスガイ)	41
Fig.37	6群15号平面・エレベーション	42
Fig.38	6群15号出土遺物(薬莖 59～101 ガイシ 102)	43
Fig.39	6群16号平面・エレベーション	44
Fig.40	6群16号出土遺物(カスガイ 103 クサビ 104)	45
Fig.41	6群17号平面・エレベーション	46
Fig.42	6群18号平面・エレベーション	47
Fig.43	7群23号平面・エレベーション	49
Fig.44	7群24号平面・エレベーション	50
Fig.45	7群25号平面・エレベーション	51
Fig.46	7群26号平面・エレベーション	52
Fig.47	7群37号平面・エレベーション	53
Fig.48	8群27号平面・エレベーション①	54
Fig.49	8群27号平面・エレベーション②	55
Fig.50	8群27号出土遺物(カスガイ)	56
Fig.51	8群28号平面・エレベーション	57
Fig.52	8群28・29号出土遺物 28号(カスガイ 118～124 釘 125 ガイシ 126～128) 29号(ガイシ 129)	58
Fig.53	30号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)	59
Fig.54	3号平面・エレベーション	60
Fig.55	9号平面・エレベーション及び出土遺物(アンプル)	61
Fig.56	22号平面・エレベーション	62
Fig.57	31号平面・エレベーション	63
Fig.58	32号平面・エレベーション及び出土遺物(十字鋏)	64
Fig.59	33号平面・エレベーション及び出土遺物(釘)	65
Fig.60	高知方面配備要図	72

写真図版目次

- PL. 1 向山戦争遺跡の遠景(北西方向から)、同上(西方向から)
- PL. 2 1-1号完掘状況、交通壕K1から1-1号を臨む
- PL. 3 1-2号調査前(北西から)、同上完掘状況
- PL. 4 1-6号完掘状況、1-7号完掘状況
- PL. 5 交通壕完掘状況(尾根側から)、同上(斜面下から)
- PL. 6 2-1号と坑道北側入口調査前風景、坑道南側入口の調査前風景
- PL. 7 2-2号完掘状況(北西から)、2-3号完掘状況(北西から)
- PL. 8 坑道C区調査前の状況、坑道A区調査前の状況(北側入口から)
- PL. 9 坑道A・B区完掘状況(北側入口から)、坑道C区完掘状況(東から)
- PL.10 坑道D区完掘状況(南から)、坑道E区完掘状況(D区から)
- PL.11 6号完掘状況(北から)、同上(南から)
- PL.12 8号調査前(南から)、同上完掘状況(南から)
- PL.13 9号調査前(南東から)、同上完掘状況(南東から)
- PL.14 10号完掘状況(北から)、14号完掘状況(北から)
- PL.15 15号調査前(北から)、同上完掘状況(北から)
- PL.16 16号完掘状況(北から)、同上(南から)
- PL.17 18号調査前(北から)、同上完掘状況(北から)
- PL.18 19号調査前(北から)、同上完掘状況(北から)
- PL.19 19号低床部、20号完掘状況(南から)
- PL.20 22号調査前(南東から)、同上完掘状況(南東から)
- PL.21 27号調査前(北から)、同上完掘状況(北から)
- PL.22 27号のカスガイと横木出土状況、同上入口付近の傾斜面と横木出土状況
- PL.23 28号完掘状況(北から)、同上入口付近の傾斜面と横木溝
- PL.24 32号完掘状況(東から)、33号完掘状況(南東から)
- PL.25 37号調査前(南から)、同上完掘状況(北から)
- PL.26 1-1号柱穴、交通壕K1セクション、坑道D区西壁の掘鑿痕、22号テラス、14号完掘状況、10号床面の横木、16号床面の横木、16号張り出し部分
- PL.27 1-6号脇・坑道A区・坑道C区・10号・交通壕K1・15号・19号・32号遺物出土状況
- PL.28 作業風景1～6、現地説明会1・2
- PL.29 1群出土のカスガイと釘、坑道出土のカスガイとセンサン棒
- PL.30 坑道出土のカスガイ、坑道出土の釘抜き槌とチス
- PL.31 坑道出土の銅線付釘と釘、横穴出土のカスガイ①
- PL.32 横穴出土のカスガイ②、同上出土のカスガイとクサビ
- PL.33 15・28号出土及び採集のガイシ、15号出土の薬莖
- PL.34 1群出土の金具、32号出土の十字鍬

第 I 章 調査の概要

1. 調査に至る経過

向山戦争遺跡は南国市の伊達野と稲生の間を東西に延びる通称向山と呼ばれている山塊に構築された旧日本軍の「本土決戦」陣地跡である。平成19年度に高知南国道路計画路線内について踏査を行ったところ尾根や北斜面を中心に横穴や竪坑、交通壕と見られる痕跡、山腹を貫通する坑道も確認された。これらの遺構の存在は全く認識されていなかったが、南国市教育委員会は、これらの諸遺構のもつ歴史的重要性に鑑み、向山戦争遺跡として埋蔵文化財包蔵地に登録したのである。向山戦争遺跡は高知南国道路建設に伴う踏査による新発見の遺跡であった。

その後、高知県教育委員会と国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所が協議し、事前の発掘調査を実施することとなった。そして高知県教育委員会からの委託を受けた(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成20年度事業として発掘調査を行うこととなり、対象地4,000㎡について平成20年9月7日から同21年2月末まで実施した。

2. 調査の概要

調査対象地はスギやヒノキ、雑木が密集しており、現場作業はこれらの伐採から始めた。遺構の発掘、測量、写真撮影等に支障のない最少の範囲について倒木の除去やチェーンソーなどを用いて立木の伐採を行った後、発掘にかかった。横穴の多くは、天井が崩落して窪地となっている例が多いが、崩落土を取り除くと床面から柱穴や坑木痕跡を確認することができた。遺構は立地や形態、構造などから大きく8群に分けて捉えることができるが、いずれの群にも属さないものもある。これらの中で1・2群は特に遺構の密集しているところから1-1号、1-2号のように枝番号を付けた。その他の遺構については、各遺構に一つの番号を付して遺物取り上げや記録を行った。

発掘作業はすべて手作業で行った。延長100m余に及ぶ坑道(2-1号)の調査は、発電機を常時廻して坑内の照明を確保し、天井や壁の崩落の危険を警戒しつつ調査を進めた。特に危険度の高い入口付近においては支柱を立てて仮天井を作り安全を確保しながら作業を行った。また坑道については、レーザー測量を用いて縦断や横断図を作成した。山裾から山腹、山頂に至っては幅2m程の小さな道があり、作業道として使うことができたが、この道も軍によって掘削された軍道の名残と考えられる。

第Ⅱ章 周辺の歴史地理的環境

1. 地理的環境

向山戦争遺跡のある南国市は、県都高知市の東隣に位置する。南北23km、東西12kmを測り人口は2011年10月現在で49,075人である。北部は四国山地の南端部を形成し、中央部以南の大半は平野部で県下最大規模の高知平野の東部を占め、南は黒潮の洗う太平洋に臨む地勢を有している。高知平野東部は、旧香美郡・長岡郡に股がる平野であることから特に香長平野と呼称されている。香長平野の大部分は物部川によって形成された扇状地である。北部には長岡台地と呼ばれる洪積層に属する古期扇状地が東西に走り、その南側に新規扇状地が広く展開し海岸部に及んでいるが、新規扇状地と浜堤の間には潟湖の名残(土佐潟)を留める低湿地が形成されている。

新旧の扇状地は、縄文時代以降、現代に至るまで人々に安定した生活と生産の場を提供してきた。県下でも有数の遺跡密集地帯を形成していることがそのことを如実に物語っており、この地が土佐における先史以来の歴史の中心舞台であったことを示している。その代表として後述するように田村遺跡を挙げることができる。また潟湖は太平洋に開けた津としての機能を果たしてきたところであり、黒潮沿岸地域との交流の要衝であったことが田村遺跡の調査から明らかとなった。『土佐日記』で有名な土佐の国司紀貫之が上洛の途上に立ち寄った大湊はこの地に比定されている。

香長平野は県下最大の穀倉地帯を誇っており、かつては近世中期以来の米の二期作地帯として全国的にも有名を馳せていた。今日はそれに代わって園芸作物の促成栽培が盛んで都市近郊型の農業地帯となっている。

向山戦争遺跡は高知市と境を接する南国市伊達野に所在している。高知市東部のシンボルである介良富士という別名を持った鉢伏山から東に派生した孤立丘陵である向山に立地している。向山を



Fig.1 向山戦争遺跡位置図

挟んで北側は伊達野、南側には稲生の集落が広がっており、向山の呼称は伊達野側からのものであり稲生側からは太子山と呼ばれている。この丘陵は212.9mを測る鉢伏山を頂点にして高度を減じながら東に向かい、ほぼ中央部が鞍部(65.0m)となっていて最も低く、そこを過ぎると再び上昇に転じる。尾根のラインは緩いV字状を呈している。向山戦争遺跡はこの鞍部と北斜面を中心に展開しており、鞍部に立つと海岸線や飛行場を見渡すことができる。ここから海岸線までの直線距離は3kmである。

南国市域西南部の高知市との境付近は鉢伏山や大畑山から派生する孤立丘陵が仏像構造線に沿って東西に走り海岸線に迫る複雑な地形も見せている。古生代末期に属するこれら丘陵には中世～戦国期の山城が点在しており、アジア・太平洋戦争末期には夥しい数の「本土決戦」陣地跡が残っている。

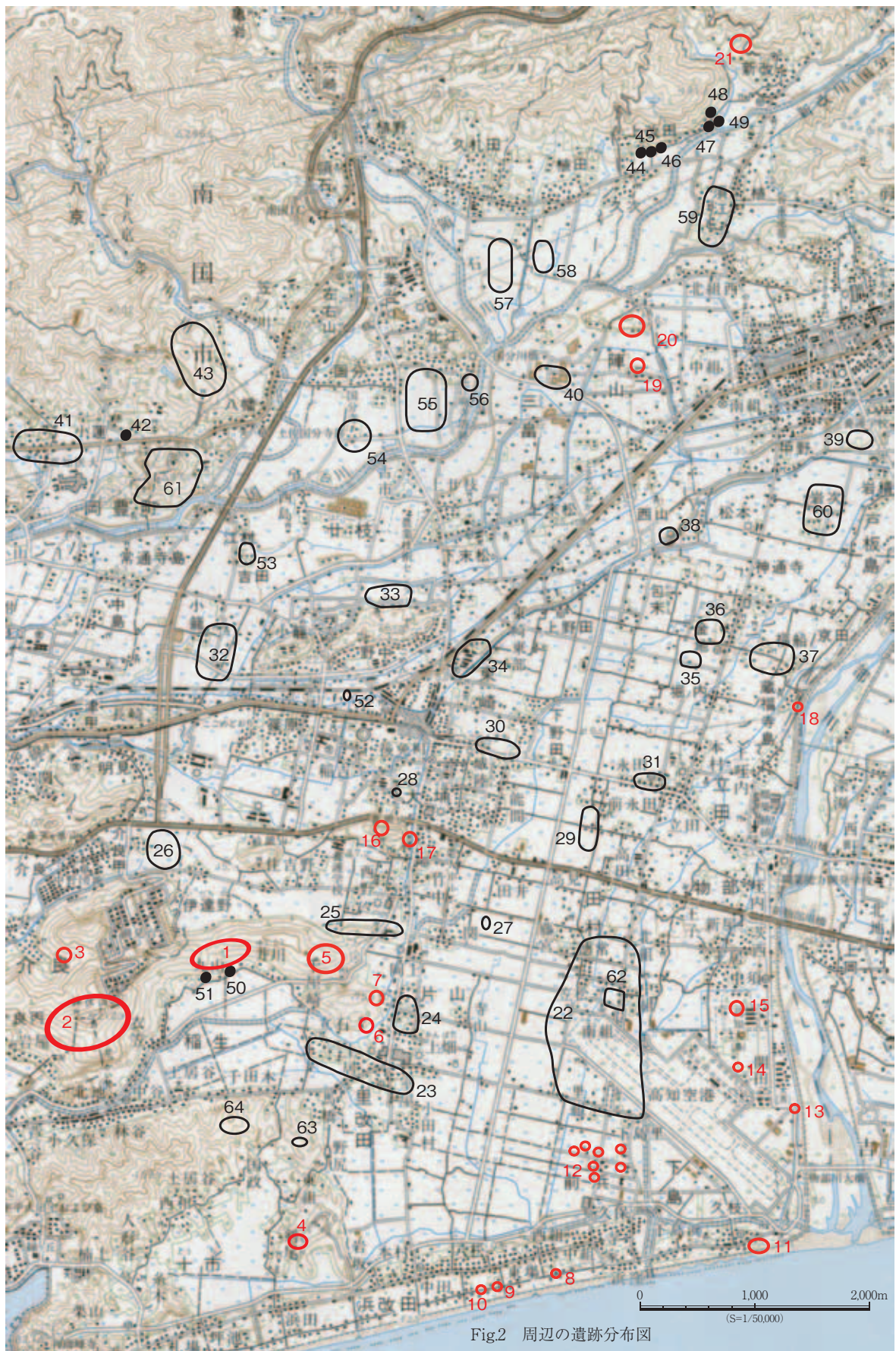
2. 歴史的環境

(1) 前近代

高知県下で最も広くかつ安定している香長平野は、先史時代から中世、戦国時代に至るまで土佐の歴史の中心舞台となってきたところでもある。そのことを最も良く示しているのが田村遺跡である。田村遺跡は縄文時代後期前葉からまとまった遺物の出土が見られることから、このころから本格的な集落の形成が開始されるものと考えられる。鐘崎式土器など九州系と瀬戸内系、在地系の片粕式土器などが見られる。次いで晩期を欠くものの弥生時代には、前期初頭に竪穴建物10棟、掘立柱建物15棟を中心とした集落が形成される。成立期の遠賀川式土器の出土をはじめ、大陸系磨製石器は最初から全て揃っているなど、全国に先駆けて弥生文化が成立している。さらに中期後半から後期前葉にかけては集落規模が拡大し、竪穴建物300棟以上を有するなど西日本外帯における屈指の大規模集落へと発展を遂げる。当該期は青銅器においても注目すべき分布が見られる。銅矛など九州系の武器形青銅器と近畿式銅鐸の分布が見られるようになり田村遺跡とその周辺部は両者の混在地帯を形成するようになる。他の地域では認められない現象であり、東西の交流の要衝として香長平野の果たしてきた歴史的役割、或は田村遺跡の持つ求心性を物語っていよう⁽¹⁾。

古墳時代に入ると状況は一変し前期初頭の一時期は田村遺跡の周辺部や内陸部に中小規模の集落遺跡が飛躍的に増加するようになる。それらの遺跡からはほとんど例外なく庄内式土器や東阿波型土器などの搬入品が見られるのが特徴である。しかしながらその時期を過ぎると中期を通して香長平野から遺跡が激減し前・中期に属する古墳も認められない。小籠遺跡から僅かに初期須恵器が出土している程度である。「前方後円墳体制」の埒外にあったことを意味しよう。後期になると北部山麓を中心に県下最大規模の古墳群である船岡古墳群や最も大きな横穴式石室を有する小蓮古墳などが登場し、北部の山麓は東隣の土佐山田町にかけて最も多くの古墳分布地域を形成するようになる。それと共に集落も営まれるようになり、長岡台地の祈年遺跡や小籠遺跡、国分川右岸の土佐国衙跡などからは後期の竪穴建物が検出されており集落の営みを認めることができる。

律令期に入ると土佐は南海道に属し国の等級では中国とされる。古代は古墳時代後期の集落遺跡と重なるように北部の国分川流域が中心舞台となり、土佐国衙跡や国分寺、国分尼寺の可能性の指摘もなされている比江廃寺などが見られる。背後の山麓には古窯址群が営まれ須恵器や瓦の生産を確認することができる。『土佐日記』など歌人として著名な紀貫之が国司として赴任したのは延長8年



(930年)のことである。平野部ではN12° Eの基軸を持つ香長条里が見られる⁽²⁾。香長条里の成立年代を明確にすることはできないが、田村遺跡では8世紀後半～9世紀を中心とする75棟の掘立柱建物跡が検出されており、これらの多くが条里に沿っていることから当該期には成立していたことが考えられよう。西野々遺跡や祈年遺跡では、香長条里に沿った古代の道跡も確認されており、当該期に属する方形の掘方を有する掘立柱建物跡も数多く検出されている。これらの古代の諸遺構は10世紀を過ぎると衰退に向かう。11世紀後半以降は土佐においても中央の社寺権門による荘園化が進み土地開発の振興が図られ、香長平野の特に南部については田村荘、物部荘、片山荘などが見られ、その密集度が高いとされている⁽³⁾が、遺跡や遺構からはこのような動向を読み取ることは現段階ではできない。

香長平野に大きな変化が見られるのは南北朝の動乱期を通してと考えられる。すなわち田村遺跡では先の弥生集落と重複して大溝によって方形に区画された屋敷群が登場し田村城館を中心に展開する。方形区画の屋敷跡は大きなものは長軸50m前後を測る例も見られる。大小31区画の屋敷跡が確認されており、成立年代は出土遺物から14世紀代と考えられており15世紀～16世紀に盛行期を迎え、一部17世紀初め頃まで存続している⁽⁴⁾。田村城館の成立年代の詳細を明らかにすることはできないが、足利幕府の守護細川氏の土佐進出と深く関わっていることは間違いあるまい。土佐はそれ以前から海上交通の要衝として重要視されており、鎌倉政権下においても有力御家人が相次いで守護に任命されていたが、足利政権においても三管領の筆頭細川氏を守護においたのは前政権同様に南海路を掌握する「海洋国土佐」⁽⁵⁾を重視していたからであろう。このことは戦国期に至って沿岸部に次々と山城が築かれることから肯定される。当該期、田村城館を中心に守護町が形成され海岸部の内海は湊としての機能を発揮し、浜堤には湊町が営まれていたのである。いわゆる守護領国体制下の当地は、土佐西部を支配する一条氏の中村と比肩する土佐東部の政治・文化の中心的な位置を占めていた。ともに海の領主としての側面を強く擁していた。

表1 遺跡名一覧表

NO.	遺跡名(時期)	NO.	遺跡名(時期)	NO.	遺跡名(時期)
1	向山戦争遺跡(近代)	2	鉢伏山陣地群跡(近代)	3	第11師団司令部跡(近代)
4	琴平山陣地群跡(近代)	5	高角砲陣地跡(近代)	6	片山観測所跡(近代)
7	高知海軍航空隊発電所跡(近代)	8	前浜トーチカ跡(近代)	9	浜改田1号トーチカ跡(近代)
10	浜改田2号トーチカ跡(近代)	11	高知海軍航空隊射撃跡(近代)	12	前浜掩体壕群(近代)
13	開田トーチカ跡(近代)	14	高知海軍航空隊指揮所跡(近代)	15	耐弾式通信所跡(近代)
16	高角砲弾薬庫跡(近代)	17	250キロ爆弾庫跡(近代)	18	藏福寺島トーチカ跡(近代)
19	陣山送信所跡(近代)	20	陣山地下送信所跡(近代)	21	第55軍司令部跡(近代)
22	田村遺跡群(縄文～近世)	23	里改田遺跡(弥生～中世)	24	中組遺跡(弥生～中世)
25	西野々遺跡(弥生～中世)	26	介良野遺跡(弥生)	27	関町田遺跡(銅鐸出土地)
28	大篠遺跡(弥生)	29	修理田遺跡(弥生～古代)	30	門田遺跡(古墳～中世)
31	寺ノ前遺跡(弥生～中世)	32	小籠遺跡(弥生～近世)	33	祈年遺跡(縄文～近世)
34	東崎遺跡(弥生～中世)	35	芝田遺跡(古墳～中世)	36	金地垣添遺跡(古墳～中世)
37	岩村土居城遺跡(弥生～近世)	38	金地遺跡(弥生～中世)	39	原遺跡(弥生～中世)
40	三島遺跡(弥生～古代)	41	栄エ田遺跡(縄文～中世)	42	小蓮古墳(古墳後期)
43	船岩古墳群(古墳後期)	44	次郎ヶ谷西古墳(古墳後期)	45	次郎ヶ谷東古墳(古墳後期)
46	田村氏古墳(古墳後期)	47	新改2号墳(古墳後期)	48	新改4号墳(古墳後期)
49	新改古墳(古墳後期)	50	丸山古墳(古墳後期)	51	坂ノ松古墳(古墳後期)
52	野中庵寺跡(古代)	53	吉田遺跡(古墳～中世)	54	国分寺遺跡群(古墳～近世)
55	土佐国府跡(弥生～中世)	56	比江庵寺跡(古代)	57	白猪田遺跡(古墳～古代)
58	泉ヶ内遺跡(古墳～古代)	59	須江上段遺跡(古墳～中世)	60	大領遺跡(古墳～中世)
61	岡豊城跡(中世～戦国)	62	田村城跡(中世)	63	三ツ城跡(中世～戦国)
64	蛸の森城跡				

戦国期後半に入るとかつて細川氏の被管であった長宗我部氏が次第に台頭する。天正三年(1575年)土佐を統一した長宗我部元親は北部の岡豊城を拠点とし、さらに天正十三年頃には大高坂(高知)に移るなかで、かつての守護町は水田となり周辺一帯は土佐最大の穀倉地帯へと変容を遂げる。元親は厳密な検地を行ったことでも有名であるが、山本大の分析によれば現南国市域の地高は約2,200町(約22,000石)、戸数1,900戸、1万人前後の人口を推定している⁽⁶⁾。土佐全体の総地高24,800余町⁽⁷⁾の約1割に該当する。元親の支配の特徴としては、南国市域が含まれる香美郡や長岡郡は土佐郡や吾川郡などの中央部を構成する地域とともに直轄量の占める割合が極めて低いことが挙げられる。旧臣の所領安堵に務めていたものと考えられようか。

関ヶ原の後、入国した山内氏は元親による検地の地高をそのまま踏襲して本田とした。近世の香長平野で先ず挙げなければならないことは17世紀中頃に行われた野中兼山による大規模な河川改修と用水路建設、その結果もたらされる新田開発である。工事は藩全域に及んだが香長平野もその恩恵に預かるところが大きい。物部川の流れを今日のように一本に固定し、物部川が山間部から香長平野に流れ出た土佐山田町神母木に山田堰を作り、そこから上井、中井、舟入川を通し香長平野の新田開発を進めたのである。兼山の改革から半世紀ほど後の元禄期の石高を見ると本田25,375石、新田5,519石となっている⁽⁸⁾。新たに開発された新田石高が本田の22%を占めるに至っており、まさに飛躍的な増産がなされている。舟入川は、灌漑の外に河川交通としても重要な役割を果たした。物部川上流域の木材や薪炭などを高知城下に運び、城下の商品を上流地域に運送したのである。その中継地として物資の集積される御免町が在郷町として発達する。御免町は承応元年(1652年)に稲吉村から新たに創設されたものであるが、城下に近い近郊都市として経済発展を進める為に課税・諸役免除の特典を与え住人を呼び込み育成が図られたのである。現在は後免町と呼ばれているが「諸役御免」がそのまま町名となったのである。この地域では水田を中心としながらも煙草・棉の栽培、海岸部の前浜や十市では製塩業が発達し特に製塩は県下の7割を占めている。市史によれば二期作は文化年間末から行われ、その背景には石灰肥料の普及があったとされている。『土佐州郡志』⁽⁹⁾によれば18世紀頃の市域は48村、1町、3郷からなっている。近世を通して次第に商品経済の発達、土地の集積が促進され幕末に至るのである。

(2) 近代以降

1899年の市制・町村制実施時の市域は香美郡五村、長岡郡十二町村により構成されている。以後幾多の変遷を経ながら1959年に南国市制が敷かれ現在に至っている。

本県における軍隊施設の本格的な登場は、1897年の歩兵第44連隊の高知市朝倉への兵営設置である。しかしながら明治維新期に近代軍制を進める上で高知は大きな役割を果たしている。周知のように1871年の「御親兵」の設置である。この年の正月、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、板垣退助ら維新の立役者が高知の開成館に集い、薩摩、長州、土佐から藩兵を出して直属軍隊の創設について会談している⁽¹⁰⁾。そして2月には1万余名の御親兵が創設された。この軍隊が後の近衛兵となりやがて帝国陸軍へと成長を遂げるのである。いわば高知は帝国陸軍の発祥に深くかかわった地として位置付けられる。その後、四国には大阪鎮台の分営が高松城内や松山城内などに置かれ、1875年には丸亀に歩兵第12連隊、1884年には松山に歩兵第22連隊が設置されている。この間、高知には西南戦争直後に歩兵第12連隊の第一大隊が派遣されている⁽¹¹⁾。

日清戦争後の6個師団増設によって第11師団の善通寺創設が決定されるとともに歩兵第44連隊が

松山で編成され1897年に高知市朝倉に移駐(現高知大学朝倉キャンパス)し、以後郷土部隊として定着していく。現在、歩兵第44連隊の名残を留めているものは、陸軍墓地跡と旧営庭内に残る弾薬庫、そして使用目的は明らかでないが建物が一棟残存しているのみである。弾薬庫は扉にアーチ状の特徴的な構造が見られることから連隊設置期のものと考えられる。南国市域において本格的な軍隊の施設が登場し始めるのは日中戦争末期からである。香長平野南部の三島村を中心に1941年1月から海軍の飛行場建設が開始される。当初は艦上戦闘機の訓練飛行場として着工されるが、同年12月アジア・太平洋戦争開始以後に幾つかの変遷を経て、1944年3月に偵察搭乗員養成の練習航空隊である高知海軍航空隊として開隊する。

航空隊用地として1943年8月までに2,124,298 m²が強制買収され、移転家屋数は315戸に及んでいる。三島村の7割に当たる面積でありこれによって三島村は消滅した。さらに誘導路や掩体壕建設のため前浜村の美田570,042 m²が買収されている。1945年3月には練習航空隊は解隊され高知海軍航空隊は特攻基地となり、それまでの練習機を使って特攻隊を編成し沖縄戦に参加し、その後は本土決戦に備えていた。敗戦後、航空隊用地の多くは高知龍馬空港や高知大学農学部、高知高専などに変貌を遂げたが、随所に戦争遺跡となってその痕跡を留めている。周辺部では前浜掩体壕群、指揮所、射朶、耐弾通信所などを挙げることができる。また、向山には高角砲陣地跡、北部には陣山送信所跡などが残っており関連施設は香長平野全域に及んでいたことがわかる。これらの中で前浜掩体壕群の7基のコンクリート製掩体壕は南国市史跡となっている¹²⁾。

香長平野を含めた南四国が、戦略上最も重要視されてくるのは、戦争末期の「本土決戦」、すなわち「決号作戦」準備体制下においてである。大本営は南九州や関東とともに南四国が米軍上陸の可能性の高い地域として重要視しており、後述するように南四国には4個師団が投入され、このうち3個師団が香長平野に展開し北部の土佐山田町新改には第55軍司令部が置かれる。当該期の陣地は、山丘陵に掘られた素掘りの横穴やタコ壺陣地が多いが、海岸部にはコンクリート製の陣地も作られている。多くは戦後破壊されているが、前浜トーチカ跡や浜改田トーチカ跡、琴平陣地群跡など残存する遺構も多い。これらの戦争遺跡は香長平野でどのような「本土決戦」が計画されていたのかを具体的に知り得る貴重な資料とすべきである。

参考文献

- (1) 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像』新泉社2009年
- (2) 大脇保彦「土佐の条里」『高知の研究2』清文堂1982年
- (3) 市村高男「武家政権の盛衰と土佐国」『高知県の歴史』山川出版2001年
- (4) 下村公彦「総括Ⅱ」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第10分冊 高知県教育委員会1986年
- (5) 前掲市村
- (6) 山本大『南国市史 上巻』南国市1979年
- (7) 荻慎一郎「土佐藩の成立と藩体制」『高知県の歴史』山川出版
- (8) 山本大「近世前期」『南国市史 下巻』南国市1982年
- (9) 土佐史談会『土佐州郡誌』1983年
- (10) 平尾道雄『無形板垣退助』高知新聞社1974年
- (11) 陸上自衛隊第13師団司令部『四国師団史』1972年
- (12) 出原恵三「高知海軍航空隊と関連遺跡」『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』リーブル出版2011年

第三章 遺構と遺物

1. 1群

向山の鞍部と直下の北側斜面部に展開する遺構群で40×20mの範囲内に竪坑状遺構4基、土坑状遺構7基とそれらをつなぐ8本の交通壕からなっている。ここに立てば、南方の海岸線や東南方向の飛行場(高知海軍航空隊)も一望できる。

① 1-1号(Fig.5)

1群の中では最も大きい遺構で竪坑状をなす。1群の南端に位置し標高も65.5mと最も高いところにある。上端は一辺3.5～4.0mの隅丸形状をなし、深さ3.1mを測る。壁は垂直に立ち上がるが、東と西の壁には上端から1m程下に幅1m前後の平場が作り出されており二段に掘削されている。やや風化の進行した岩盤を掘削している。床面は1.5×1.8mの長方形で、東側の南北隅には径20cm前後、深さ10cmの柱穴と考えられる小ピットが穿たれている。簡単な屋根が設けられていた可能性がある。北側は50～60cmの段差で交通壕K1に連結し、入り口となっている。周りには掘削土を盛り上げて掩体を巡らしている。幅は南側で2m、東西は3m、高さは1m前後を測り、断面は台形状を呈す。遺構発見時は、平場あたりまで土砂や腐食土の堆積が見られた。1群の中心的な遺構と考えられる。

② 1-2号(Fig.6)

1-1号の5m東に位置する竪坑状遺構である。上端の平面は長軸4.2m、短軸2.3mの隅丸長方形を呈し、深さ2.2mを測る。岩盤を掘削しており壁は垂直に立ち上がる。南壁側と東西壁には上端から60～70cm下に幅50cm前後の平場が作り出されている。床面は1.5×2.1mの楕円形状を呈し平坦面をなしている。掘削土を盛り上げ東・西・南に掩体を巡らしている。幅1～2m、高さ50cm前後を測り断面は台形状を呈する。北東隅に幅70cmの開口部があり交通壕K2と連結し、さらにK6を通じて1-1号ともつながっている。両者是一对の陣地を形成している可能性がある。本例も発見時は平場まで土砂や腐食土が溜まっていた。本例も1-1号と共に1群の主要遺構と考えられる。

③ 1-3号(Fig.7)

1-1号の北10mの斜面に立地し1-1号との比高差は5m前後である。長軸2.4m、短軸1.8mの長方形を呈し、深さは1～2mを測る。小型の土坑状遺構である。東側に開口部があり交通壕K3と繋がっている。退避壕的な性格を有する遺構であろう。

④ 1-4号(Fig.8)

1-3号の北5mのところであり比高差は2m前後を測る。径1.5mの円形または隅丸方形の平面形を呈し深さは2mを測る。小型の土坑状遺構である。南西に開口しており交通壕K4と繋がり連結部は階段状に掘られている。本例も待避壕的なものと考えられる。

⑤ 1-5号(Fig.9)

本例も北斜面にある小型の土坑状を呈する。1-2号の北10mにあり比高差は3m程である。上端の長軸2.2m、短軸1.7mの楕円形を呈し、深さは1.5mを呈する。西隅で交通壕K3と連結している。退避壕的な遺構であろう。

⑥ 1-6号(Fig.10・14)

1群の東部にあり尾根上に立地する。径2.0m程の円形を呈し深さは1.8～1.9mを測る。チャート

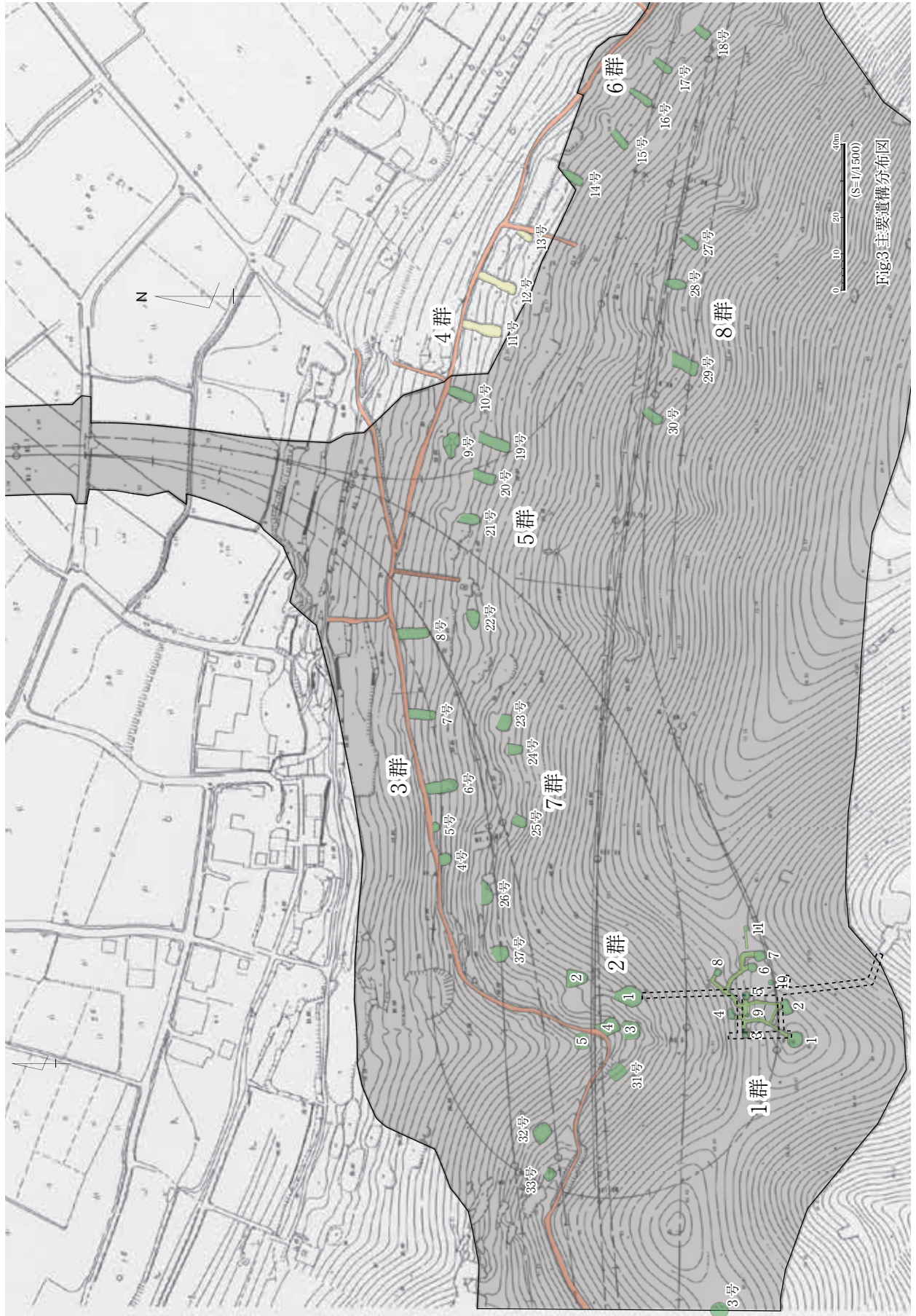


Fig.3 主要遺構分布図

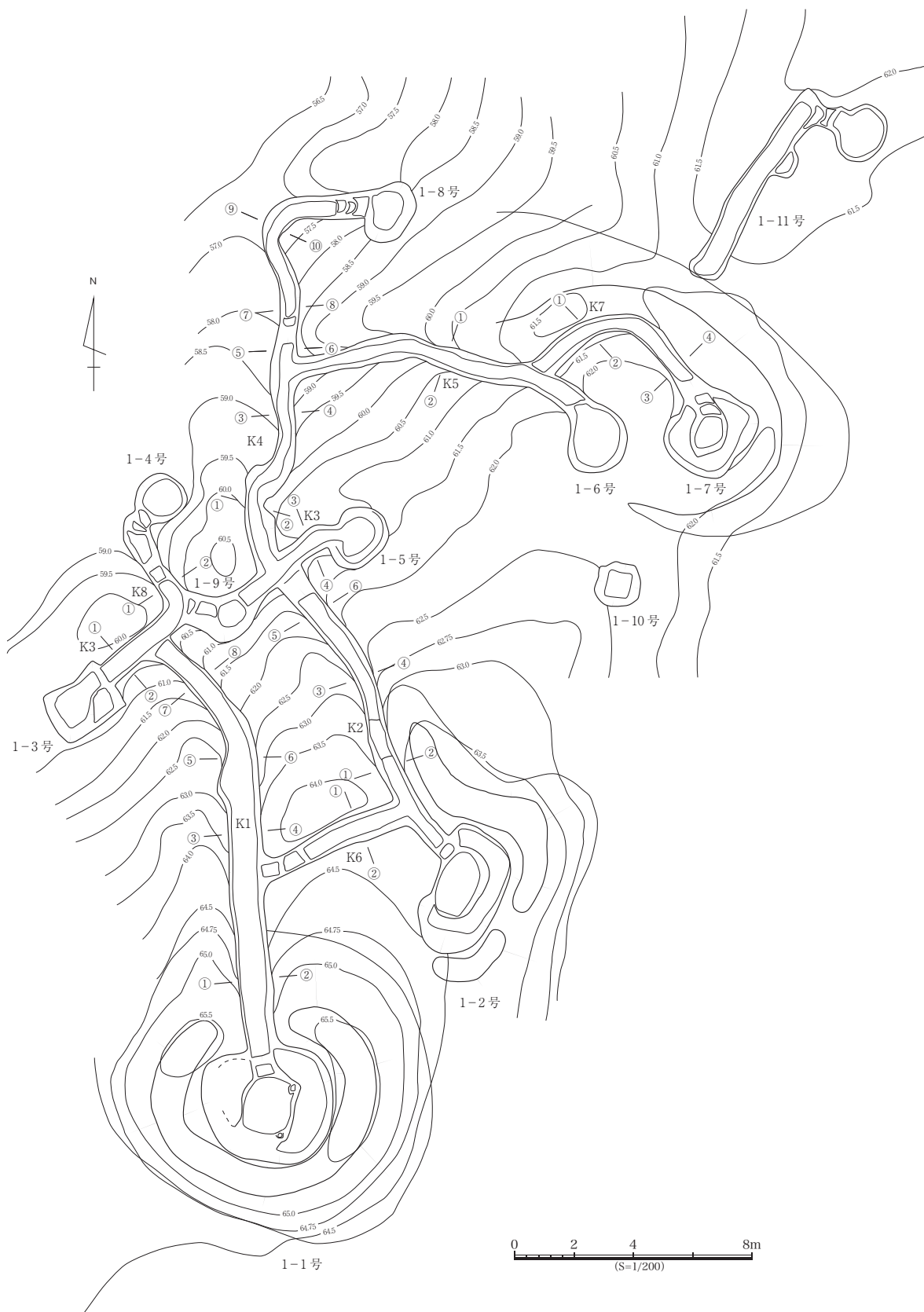


Fig.4 1群全体图

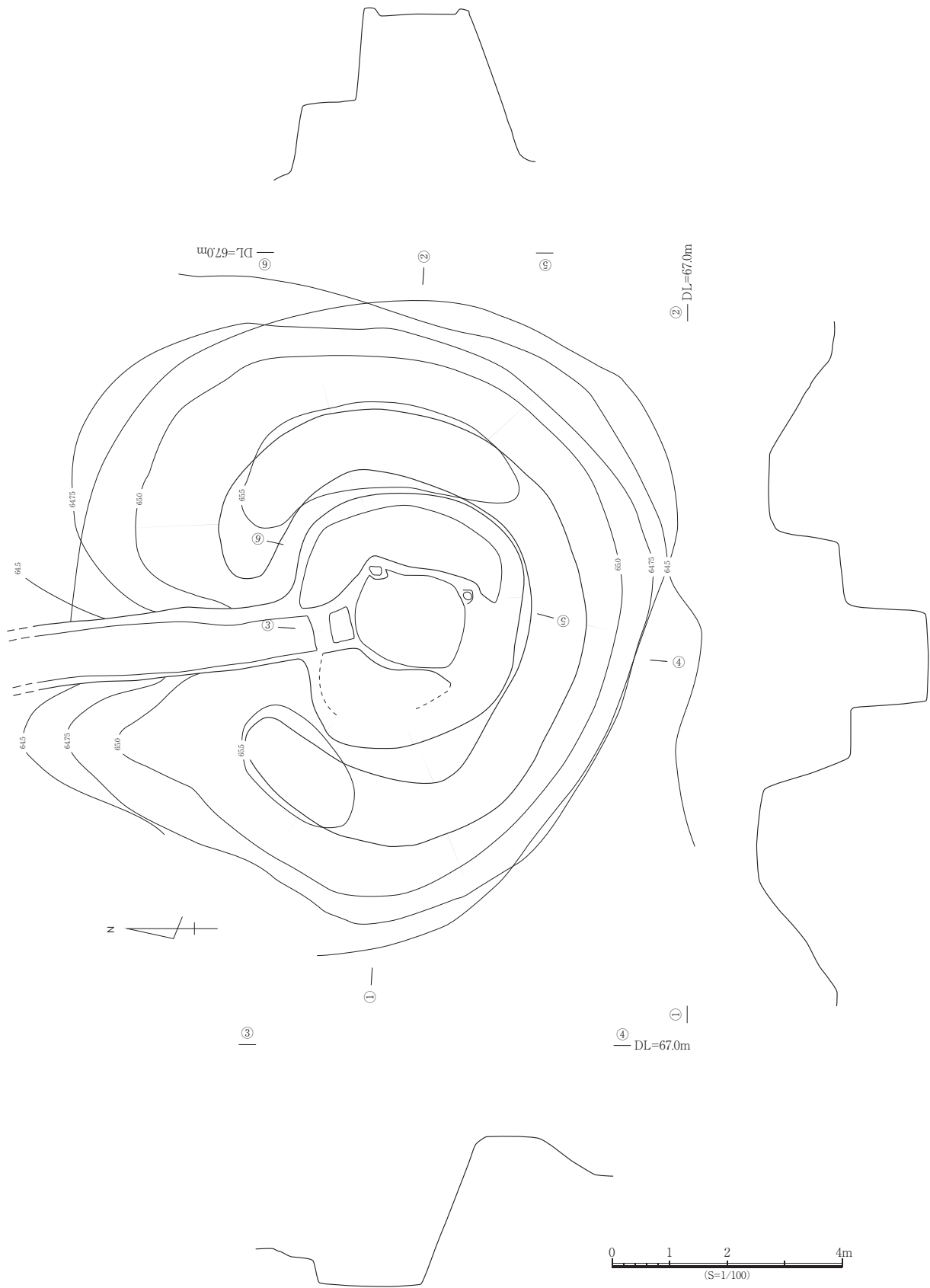


Fig5 1-1号平面・エレベーション



Fig.6 1-2号平面・エレベーション

の岩盤を掘削した竪坑状の遺構で、壁は垂直に近く立ち上がる。本例の周りには僅かながら掩体認められる。北隅に開口部があり交通壕K5と50cmの段差をもって繋がっている。本例は小型であるが深く、立地から見ても1群の主要遺構を構成しているものと考えられる。

1-6号と1-10号の間付近からカスガイ9点、釘5点が出土した。尾根上の遺構で使用したのと考えられる。

⑦ 1-7号(Fig.10)

1-6号の東隣にある。上端の平面は一辺2.5m前後の隅丸方形を呈し、深さは2.0mを測る。チャートの岩盤を掘削した竪坑状の遺構で、壁は垂直に近く立ち上がる。天場から80cm下がったところに幅40～60cmの平場が設けられ二段に掘削されている。床面は1.1×0.8mの不整形を呈する。北西隅に開口部があり交通壕K7と繋がっている。K7床面は1-7号の床面より1m程高いが、階段がつけられている。西側と北側には低い掩体が巡っている。K7はK5と連結し1-6号と繋がっており、1-6号と1-7号は独立した竪坑状遺構であるが、1-1号と1-2号のように関連し合っているものと考えられる。一対の陣地として捉えることができよう。

⑧ 1-8号(Fig.11)

1-6・7号の西下方の斜面にある土坑状の遺構である。上端は2.2×1.5mの楕円形を呈し深さ1.5m

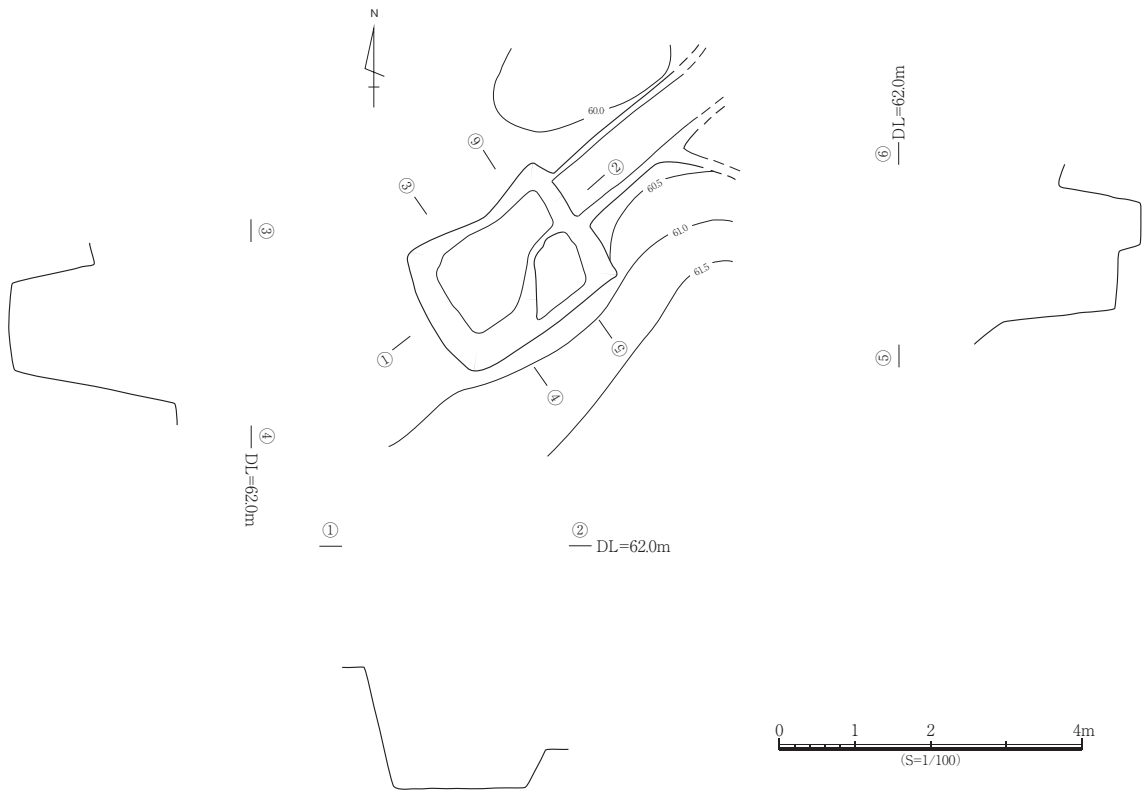


Fig.7 1-3号平面・エレベーション

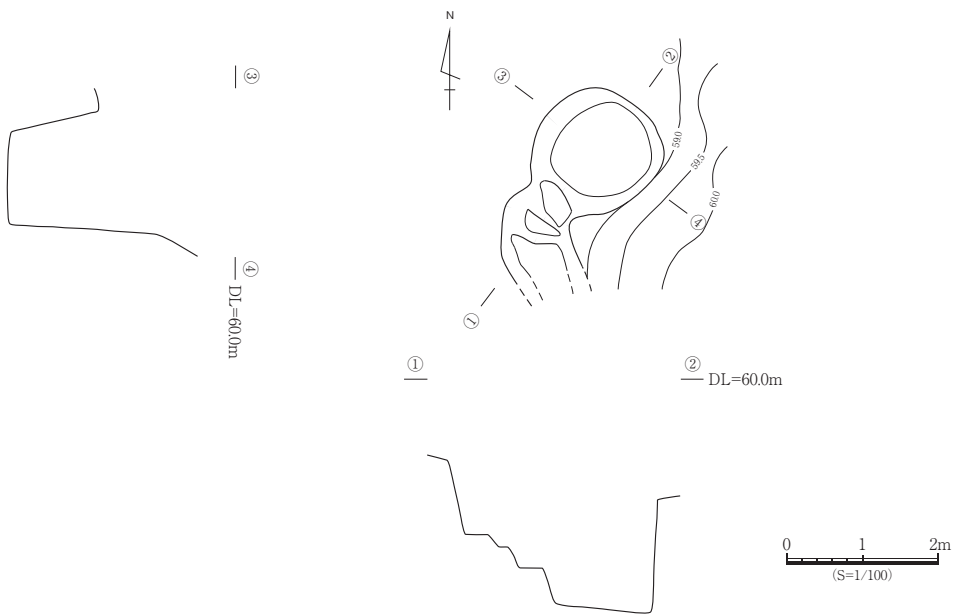


Fig.8 1-4号平面・エレベーション

を測る。床面は平坦で1.3×0.9mの不整形を呈する。壁は斜めに立ち上がり断面逆台形状を呈する。西壁側が開口しており交通壕K4に通じている。連結部は3つの階段が作られ1-8号の床面が高く

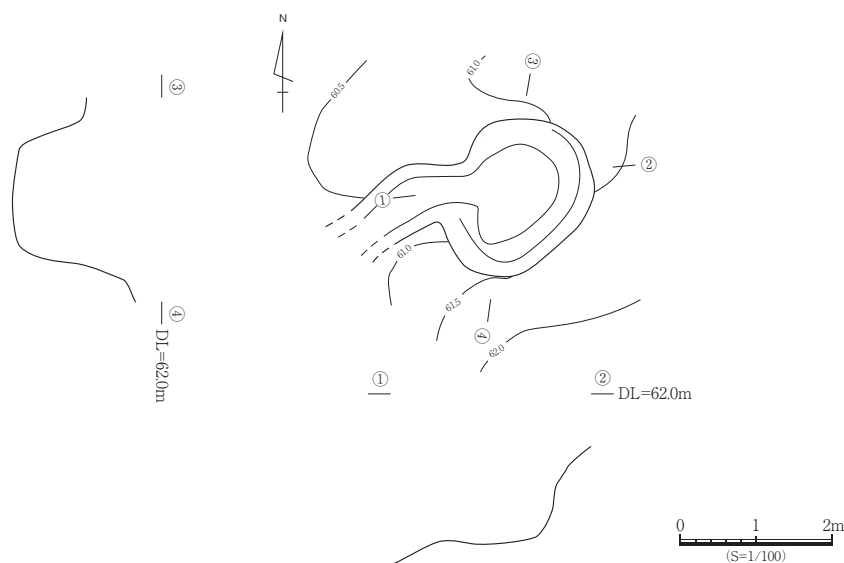


Fig.9 1-5号平面・エレベーション

なっている。位置関係から見て1-6・7号の退避壕的な性格を持った遺構と考えられる。

⑨ 1-9号 (Fig.11)

交通壕K3の中程に設けられておりK3の両肩部を僅かに広げて土坑状に作られている。床面にも段差が認められるところから遺構として捉えた。上端の南北幅は1.6mで、深さは1.5mで壁は僅かに斜めに立ち上がる。床面は0.9×0.8mの隅丸形状を呈し、K3の床より5～15cm深い。

⑩ 1-10号 (Fig.11)

1-6・7号の南3mの尾根上に位置する独立した小土坑である。上端は一辺1.5m、床面は0.8mの形状を呈する。深さは60cmを測り断面は逆台形を呈する。もとは掘削土を盛り上げて掩体を作っていたが流失したものと考えられる。

⑪ 1-11号 (Fig.12・14)

1群の最も北にあり通路状の遺構と連結した小土坑であるが1つの遺構として捉えた。土坑は1.96×1.5mの楕円形を呈し深さ0.5mを測る。西壁側は幅0.85m、長さ0.5mの凸状をなす連結部が作られて通路状遺構と繋がっている。連結部の中間には高さ20cm程の壁が立ち上がり土坑側と通路側との境になっている。通路状遺構は南北方向に長さ9.2m、幅は0.9m前後である。深さは北端の土坑連結部付近で最も深く70cmを測るが、南に行くにしたがい減じて南端では20cm程になり断面も皿状となる。南壁には幅1.1m、長さ0.5m、深さ50cmの突出部が設けられている。1-11号の小土坑は1-10号と同様の性格を有する遺構で通路状遺構は小土坑に行くための交通壕的な性格を有するものと考えられる。通路状遺構の西側からは鉄製金具(16)が出土している。

⑫ 交通壕 (Fig.4・13・14)

尾根上の竪坑状遺構(1-1・2・6・7号)と西北側斜面に設けられた土坑状遺構を繋いでいる。調査に入った時点では半ば土砂で埋没していたが、調査を進めると総延長は約37mの交通壕に復元することができた。便宜上K1～K8として捉えることにする。幅や深さは場所によって若干異なる。幅が広いところはK1①～②で1m前後、狭いところはK2①～②、K5、K7で60cm前後を測る。断面は

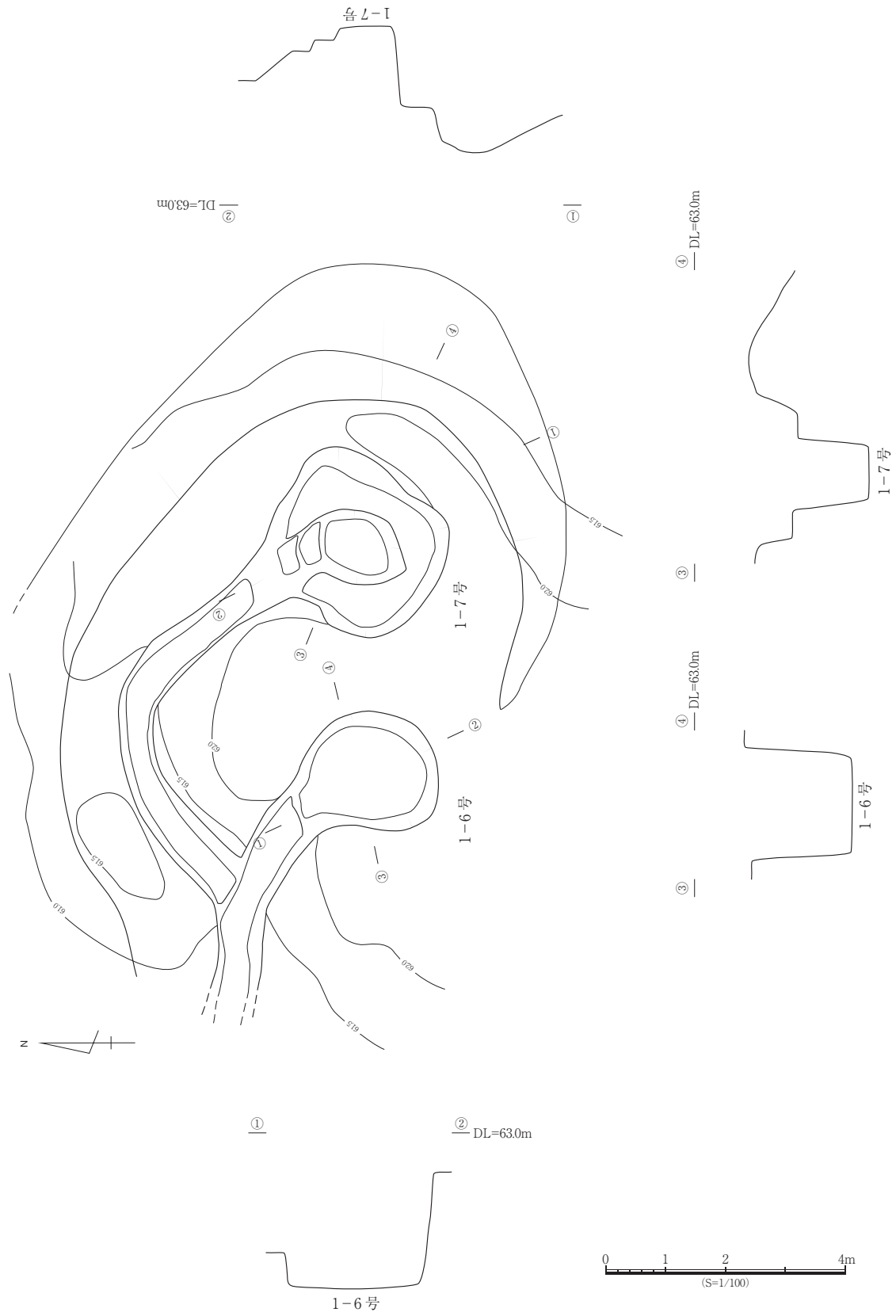


Fig.10 1-6・7号平面・エレベーション

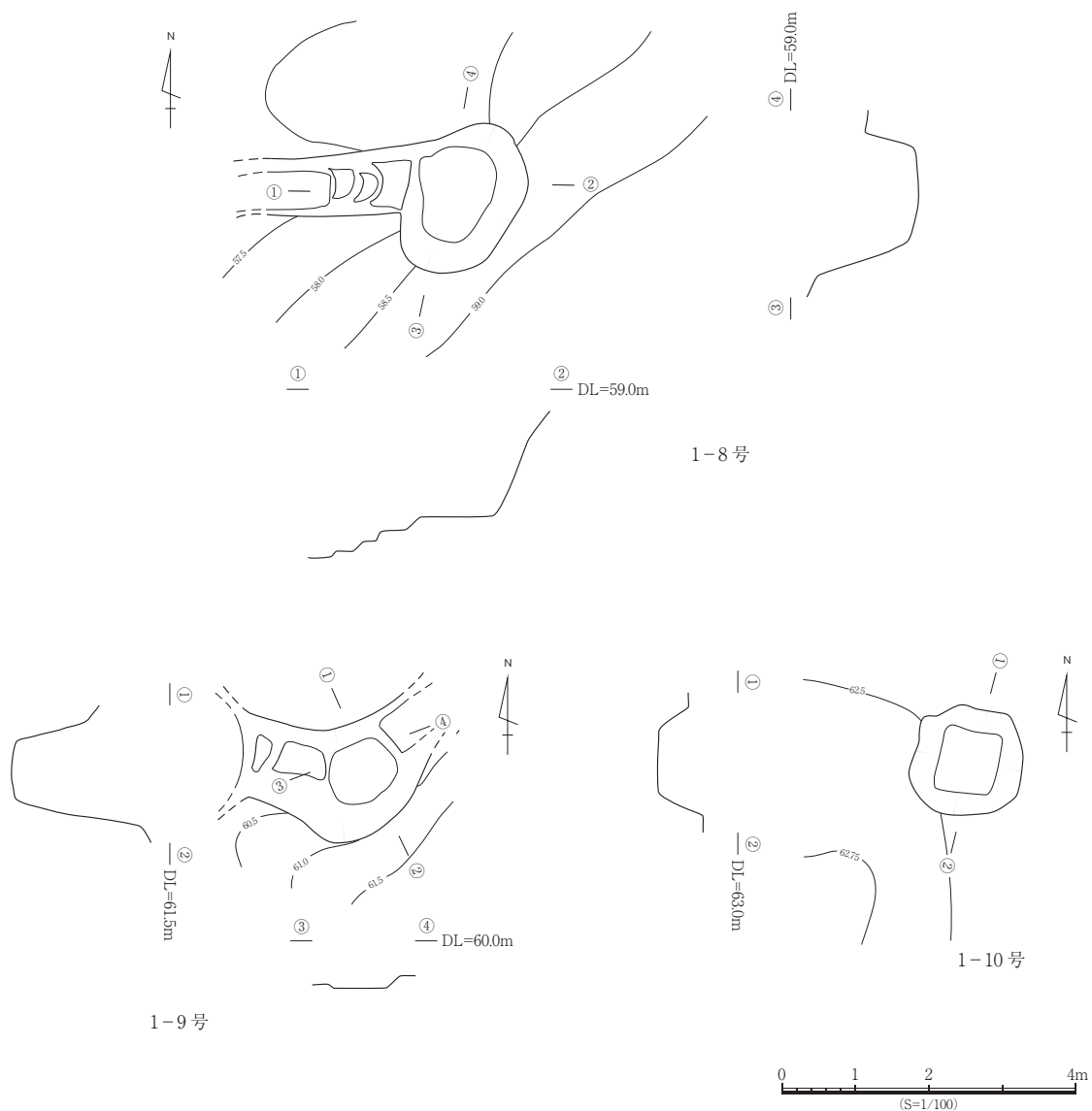


Fig.11 1-8～10号平面・エレベーション

ほとんど垂直に近く立ち上がり、深さはK1①の周辺が1.5mと最も深い。K1やK2の肩には掘削土を盛って掩体を作っており、その高さを加えると2mを超えるところもある。これらの交通壕は後述するように尾根上に設けられた観測所と考えられる4基(1-1・2・6・7号)の竪坑状遺構と斜面部に設けられた退避所を繋ぐものである。K1の床面からはカスガイ(15)が出土している。

2. 2群

1群の北下方にあり北斜面の中腹に立地する。一群尾根との比高差は25mを測る。山腹を貫通する坑道(2-1号)と北側入口の周りに集中する遺構を2群として捉えた。

(1) 坑道入口(2-1号) (Fig.15)

谷部の東側に北側の開口部を有する。開口部までは幅2m、長さ30m程の羨道状の通路が設けられているが、開口部付近の天井部や壁面の崩落が激しく正確な数値を求めることができない。調査前

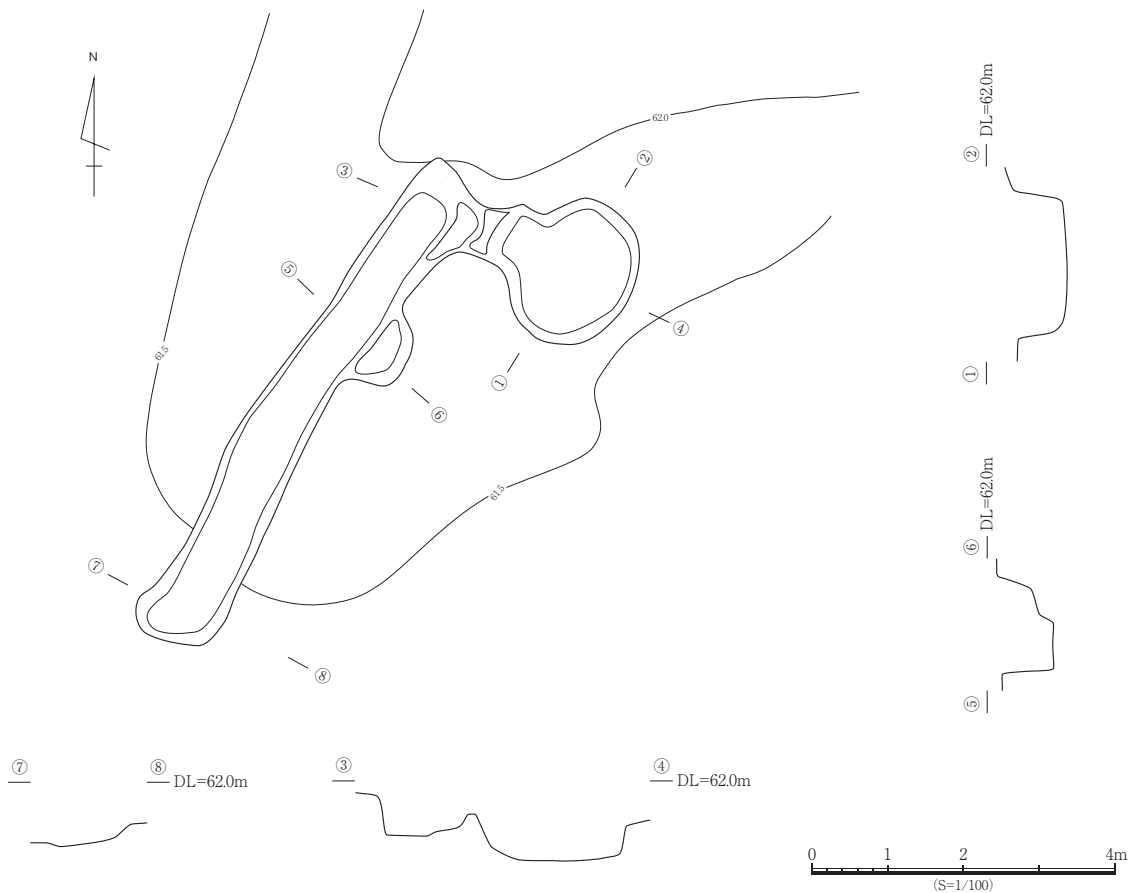


Fig.12 1-11号平面・エレベーション

は腹這いでやっと中に入れるぐらいにまで壁や天井が崩落していた。坑道の内部に入ると崩落は比較的少ない。坑道内部は直線的に延びる坑道本体(A・B・F区)とほぼ中間地点に設けられた部屋(D区)、それを繋ぐ2本の通路(C・E区)、さらに掩砲所と考えられる東に突出した小室から構成される。

① 貫通坑道(Fig.16～22)

斜面中腹に掘られた坑道で、北側の谷から南側の谷に抜けており、南北ともに開口部は標高42mで水平に掘られている。北開口部から南に向かって70m直線的に延び、そこから東へ屈曲し7mで南側の開口部にいたる。直線部分の長軸は北に対して45°西に振っている。便宜上北からA、B、Fに区分した。A区は北側開口部から北側通路(C区)までの30m、B区は通路間の14m、F区は南側開口部までの33mである。幅と高さはA・B区では2m、F区はやや幅を減じている。A区は開口部から南へ12m程の間は、岩盤の風化が進行しているためか天井や壁の崩落が激しく危険であったためにパイプサポートで仮天井を作って礫の落下防止を行いながら作業を実施した。開口部付近は壁面の崩落の危険性が特に高かった為に崩落土の除去を十分に行うことができなかった。開口部から12m以南についても小規模な天井の落下は見られたが残存状況は比較的良く坑木痕跡を確認することができた。A区では20個の坑木痕跡を確認できたが90cm間隔で整然と並んでおり、掘方の幅は30cm前後、深さは20cm前後を測る。床面と同様な痕跡が左右壁面にも認められる。遺物は床面からカスガイ(17～19・31)、釘(20～29)、センサン棒(30)が出土した。カスガイ(31)が開口部付近である以外は全て開口部から25m程奥の西壁際からの出土である。カスガイは長さ20cm前後で先に見た1群の

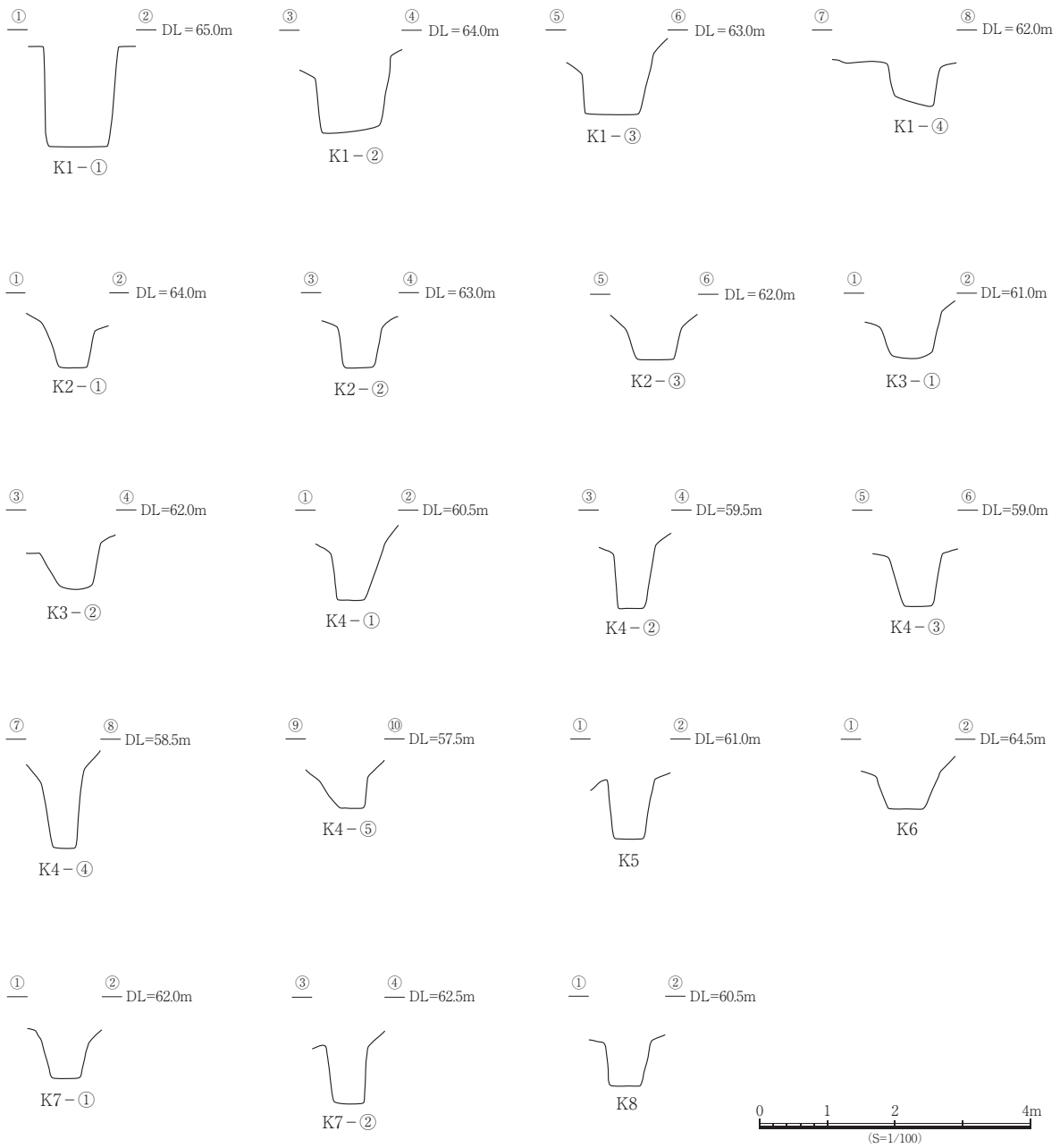


Fig.13 1群交通壕エレベーション

例よりも総じて大きい。センサ棒は長さ40.8cm、頭部の径2.3cm、軸部は八角形を呈し径1.9cmを測る。先端部は扁平で扇形を呈する。重さ856gである。岩を爆破する際に火薬を詰める坑を掘る為に用いる道具である。

B区は崩落の為に南端の床面を検出し得なかったが11本の坑木痕を確認した。遺物は床面からブリキ板(32)が出土している。南側3本の坑木溝には腐食した坑木が残っていた。

F区は南側の通路(E区)とB区の境界付近で、天井と東側壁の大規模崩落がある。この崩落礫はほとんど除去することができなかった。南開口部付近にも壁と天井の崩落が見られた。しかしそれ

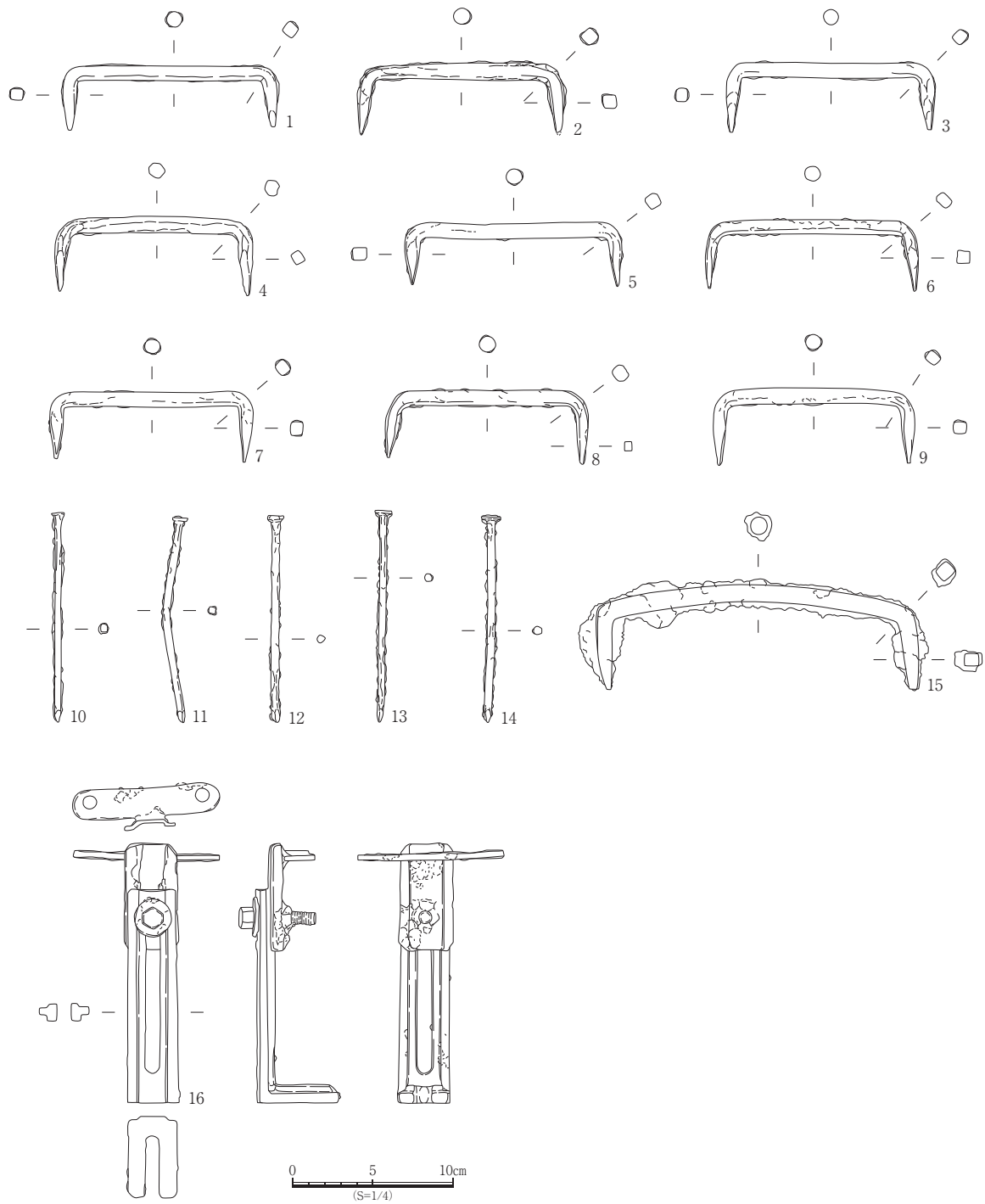


Fig.14 1群出土遺物

1-6号脇:カスガイ(1~9) 釘(10~14) 交通壕:カスガイ(15) 1-11号脇:金具(16)

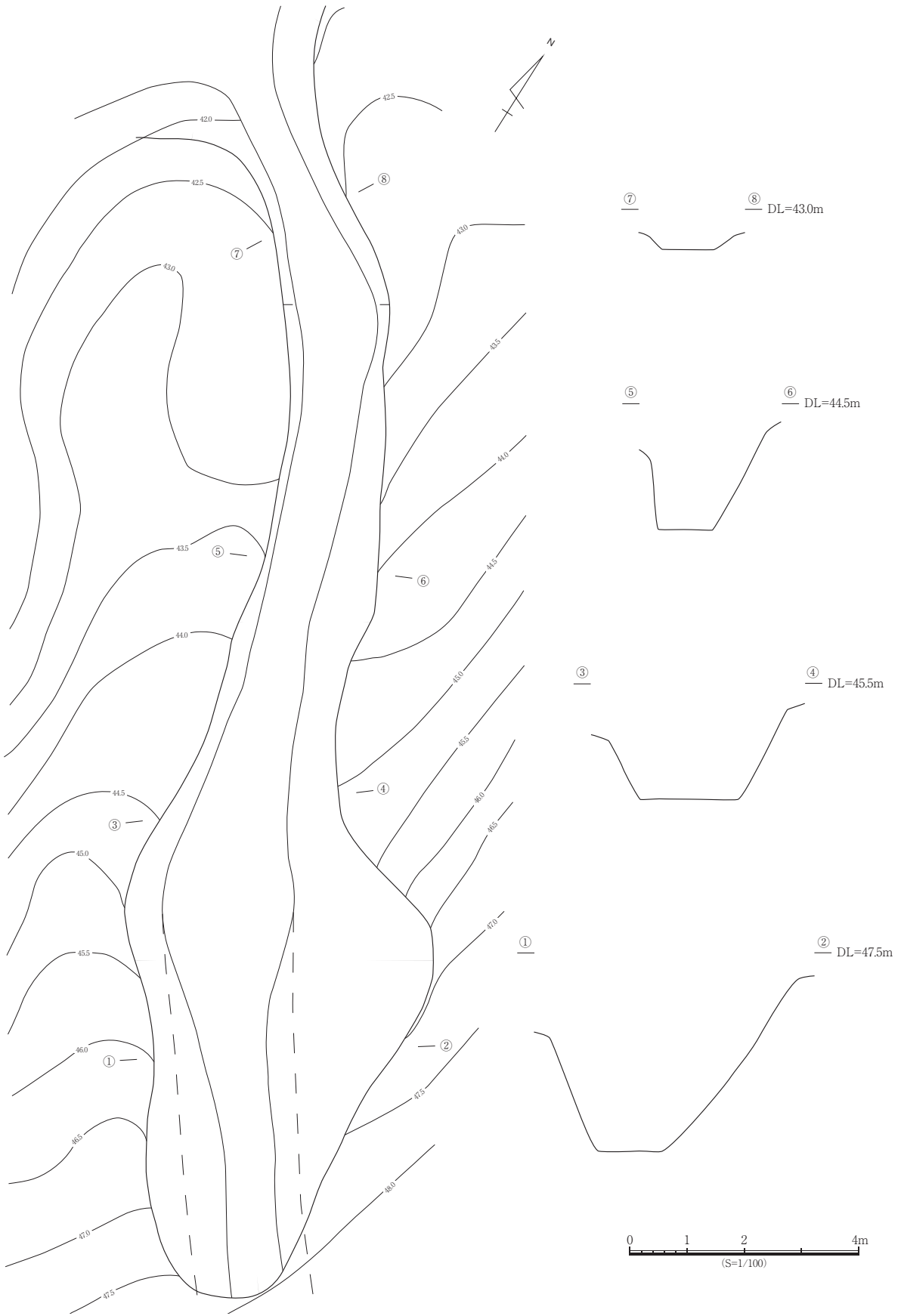


Fig.15 2-1号平面・エレベーション

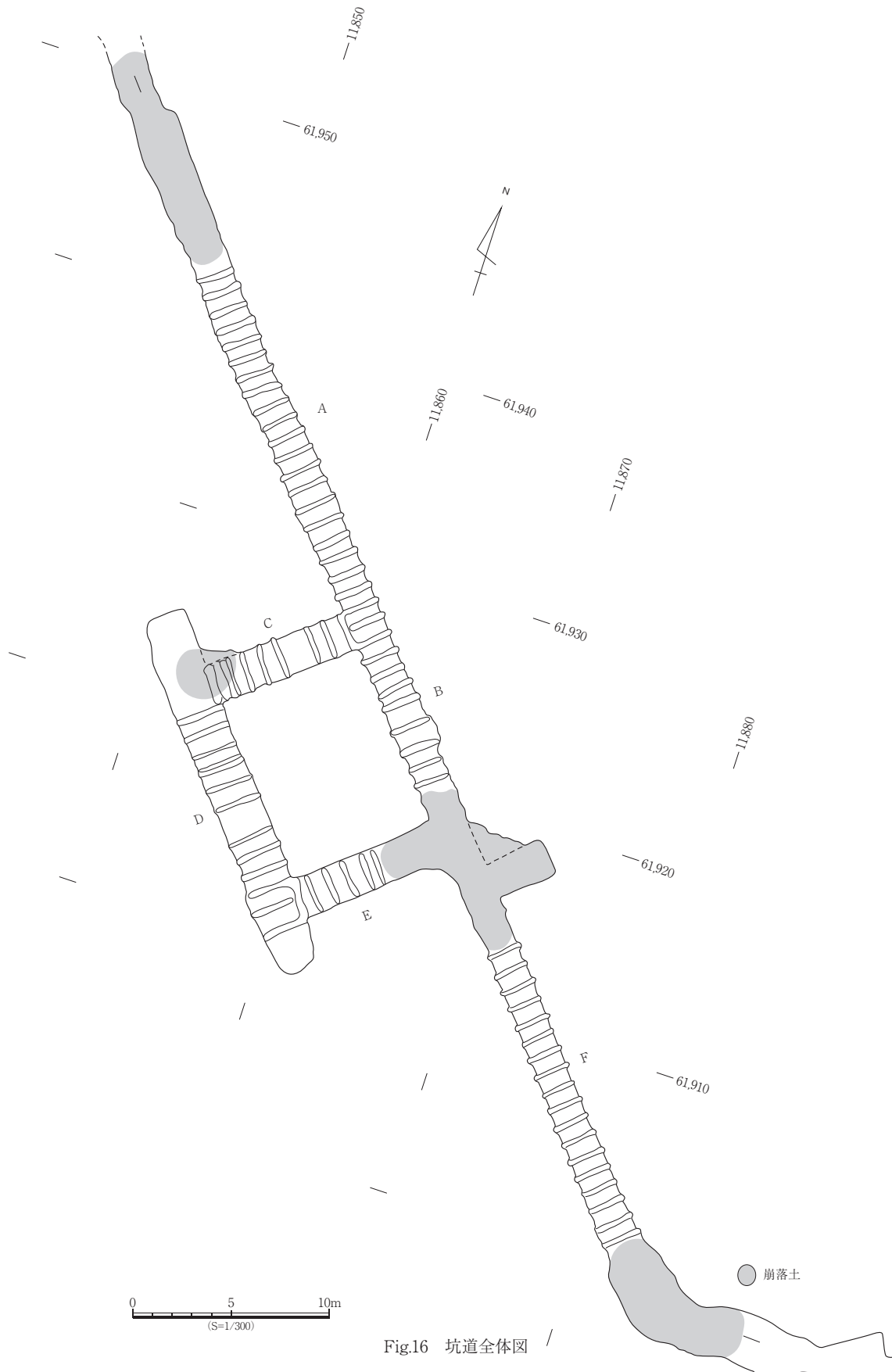
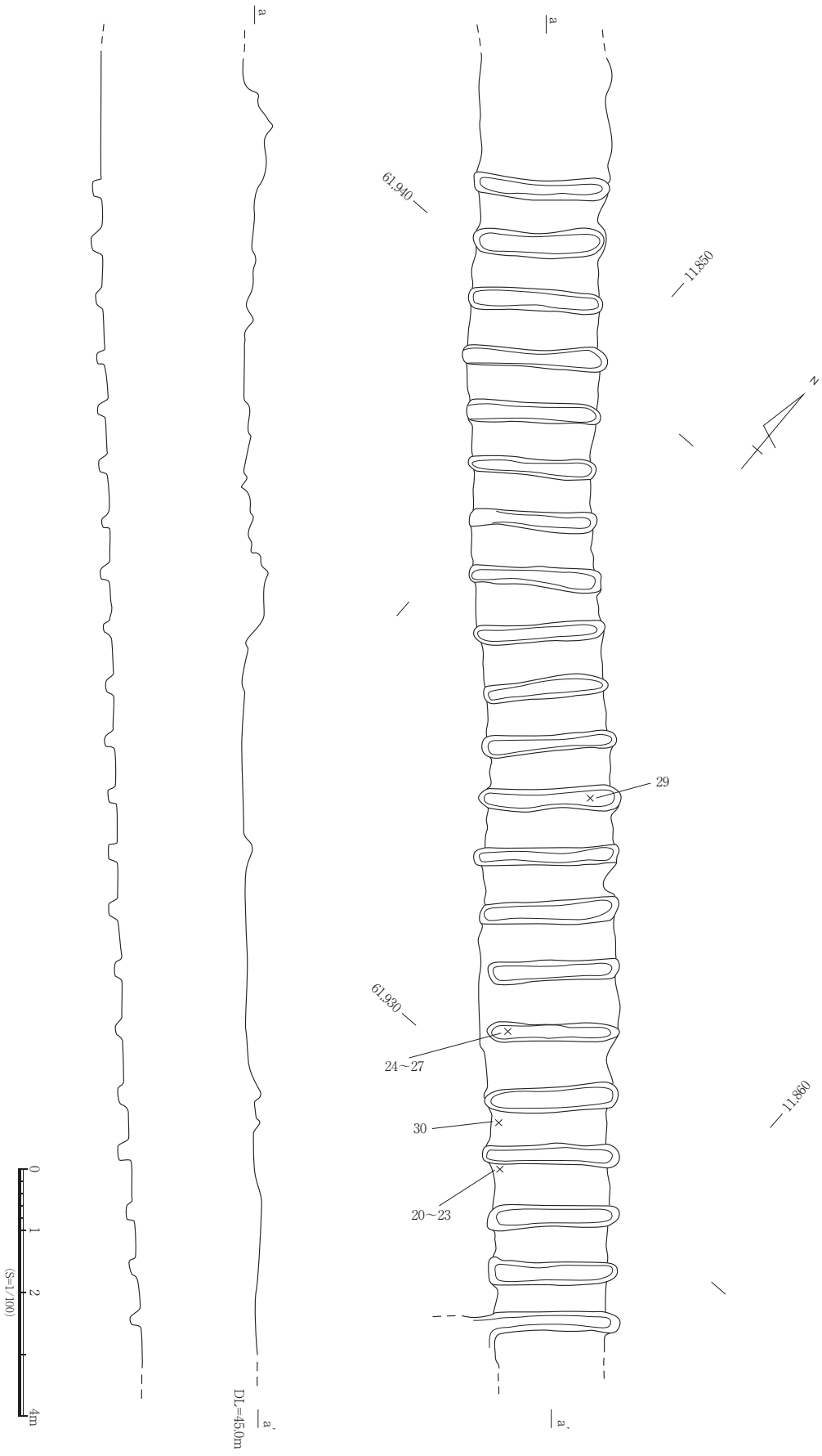


Fig.16 坑道全体図

Fig.17 坑道A区平面・エレベーション



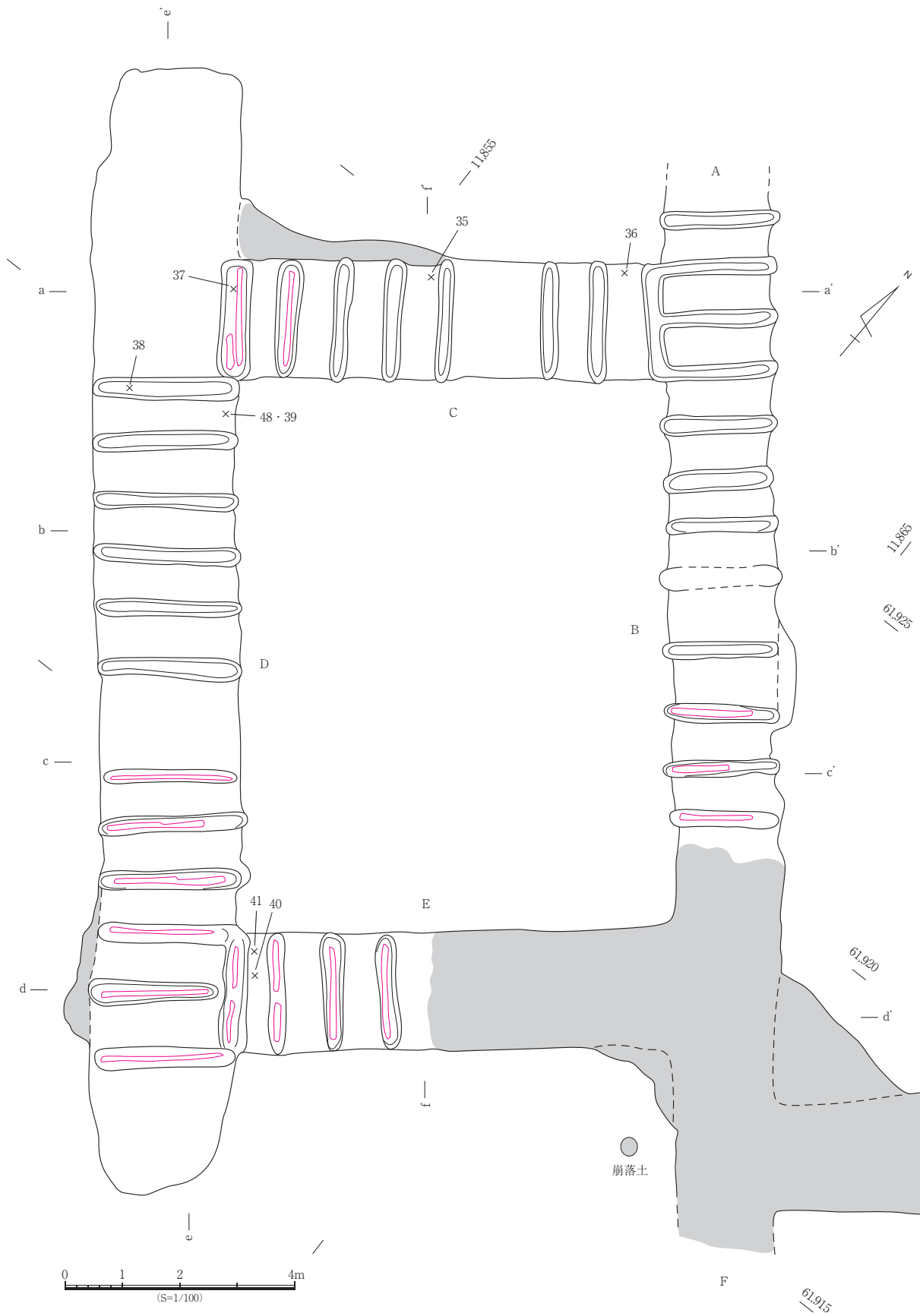


Fig.18 坑道B～D区平面・エレベーション位置及び遺物出土地点

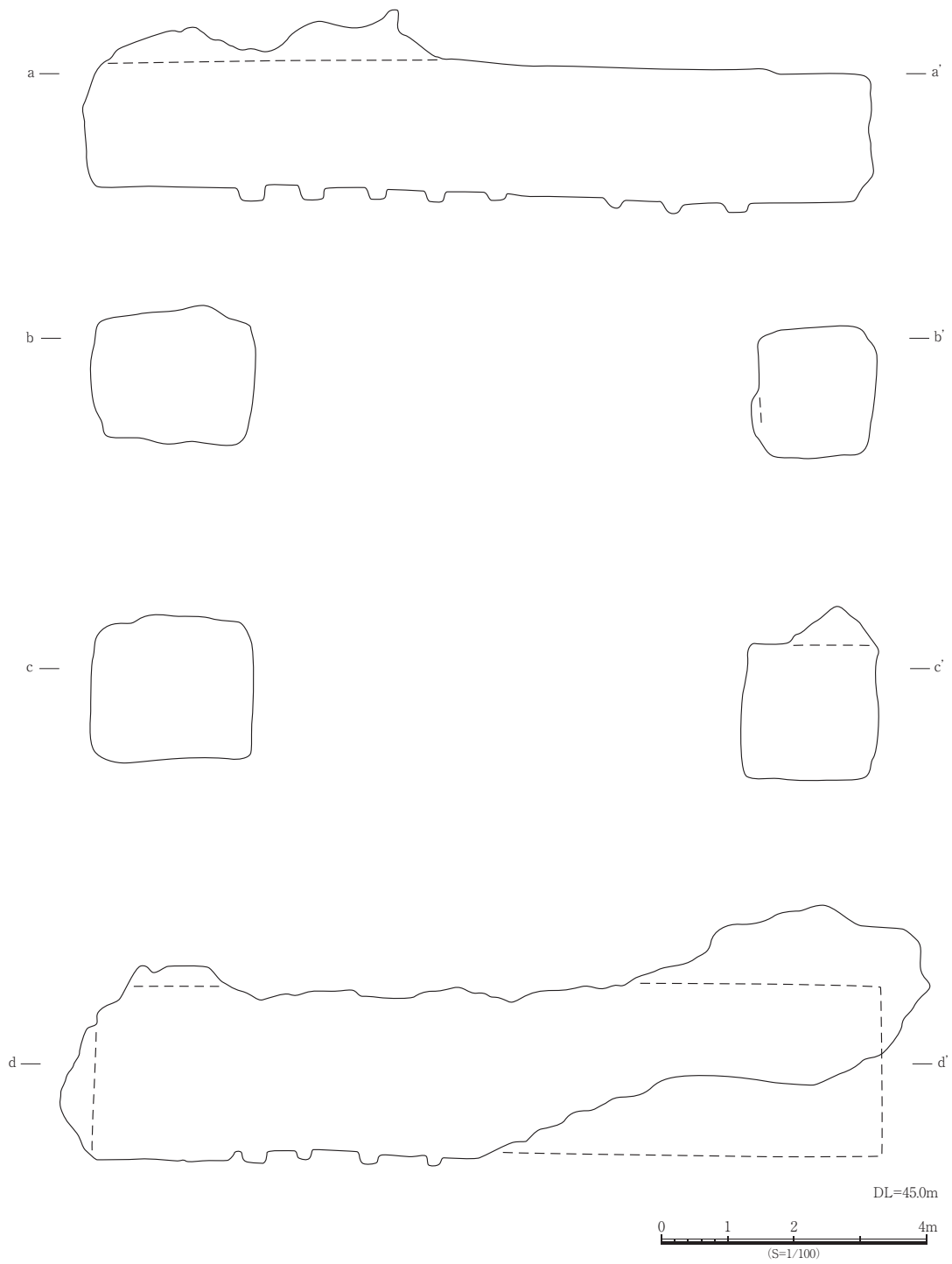


Fig.19 坑道B～E区エレベーション①

以外のところでは、整然と並ぶ18本の坑木痕跡を確認することができた。坑道幅はA・B区に較べて少し狭くなっているが坑木痕跡幅は1.9mを測る。遺物は床面壁際からカスガイ5点(44～48)、釘2点(42・43)が出土している。

F区北端には東に突出した3×2mの長方形の部屋が設けられている。崩落礫のために床面を確認

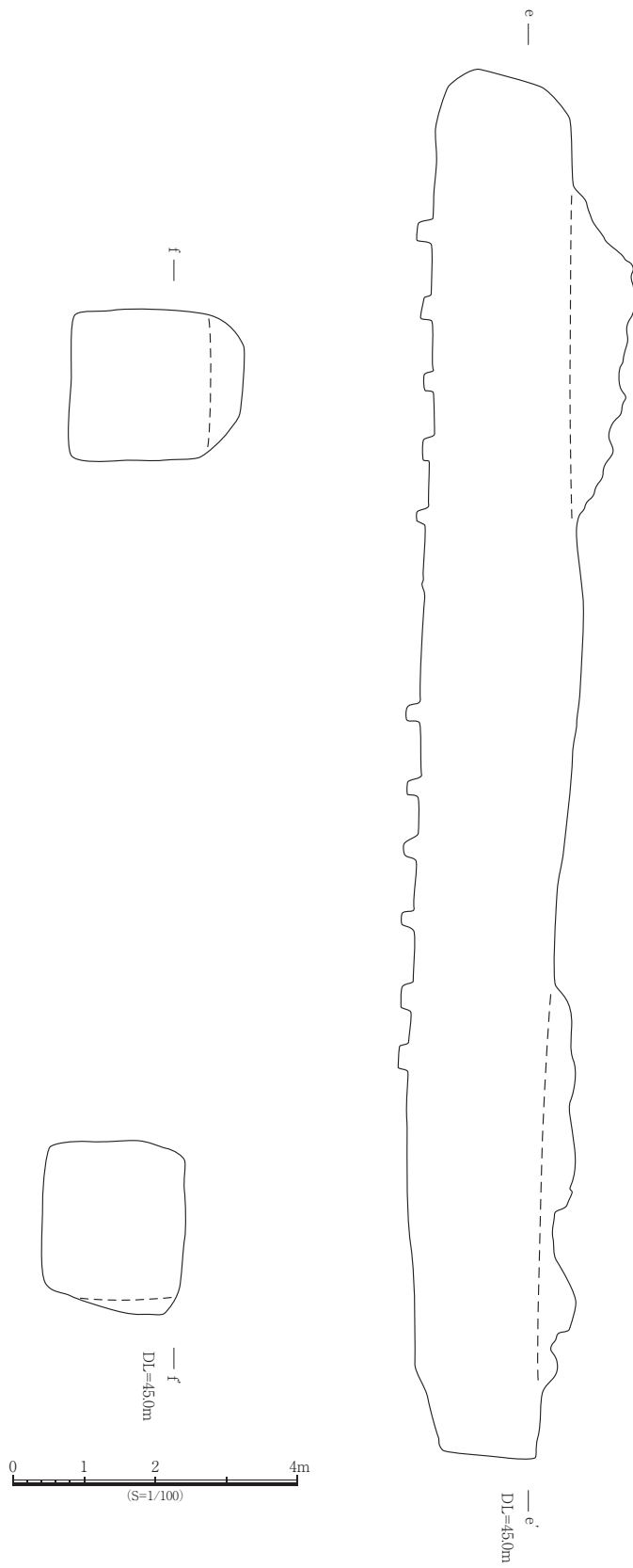


Fig.20 坑道B～E区エレベーション②

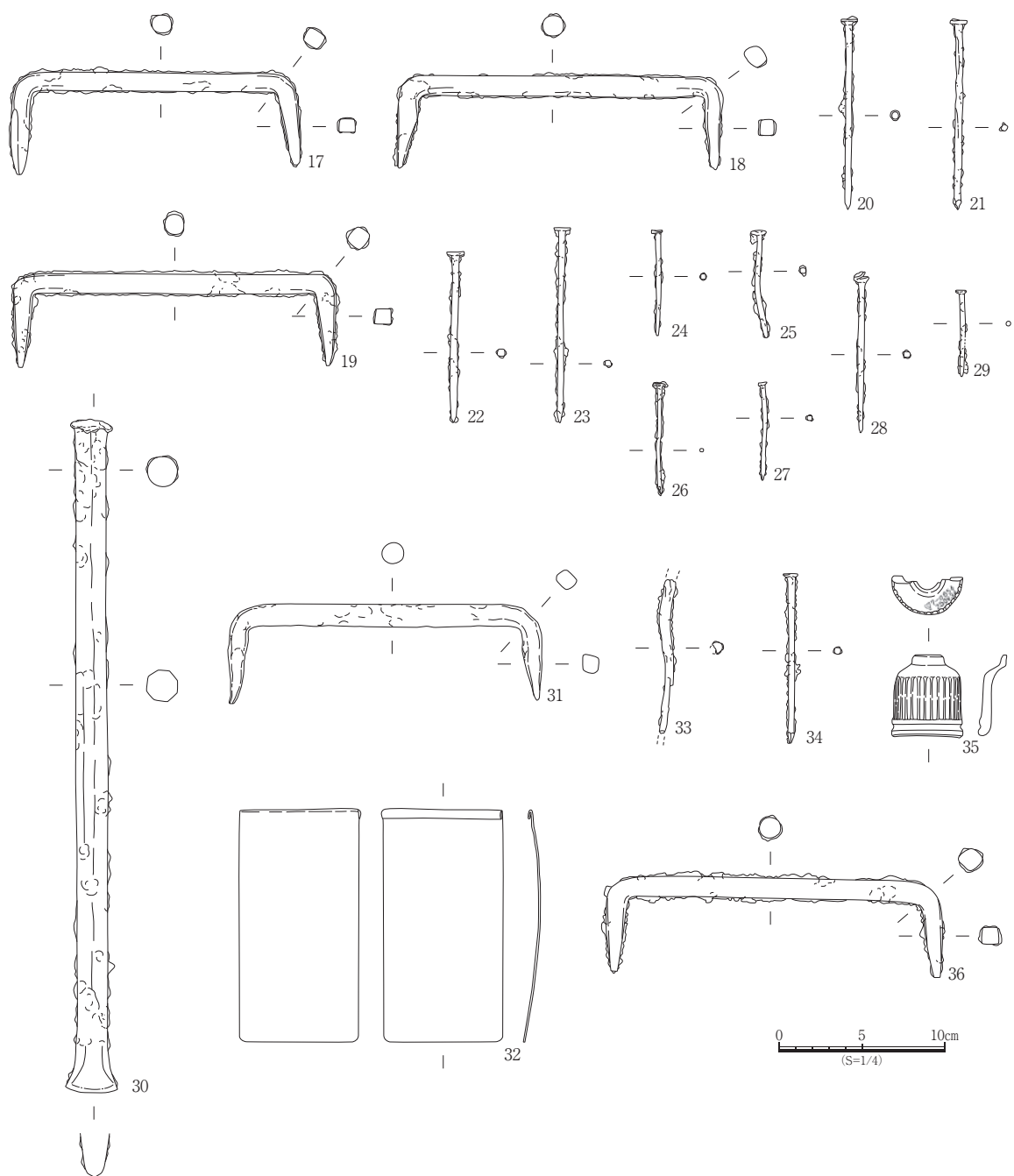


Fig.21 坑道A～C区出土遺物

A区:カスガイ(17～19・31) 釘(20～29) センサン棒(30) B区:ブリキ板(32)

C区:カスガイ(36) 釘(33・34) ガイシ(35)

することができなかった。砲を置く掩砲所と考えられる。

南側開口部は調査区外であるが3.0×2.5mの方形坑が設けられており、東壁に1.5m程の入口が作られている。方形坑は野砲掩体と考えられる。

旧陸軍の『坑道陣地ノ参考』によれば、坑道(地下通路)には幾つかの種類がある。本例はその規模から見て「重要ナル幹線ニ用フ」とされる「大本坑道」に属する⁽¹⁾。後述するように当時、この坑道の

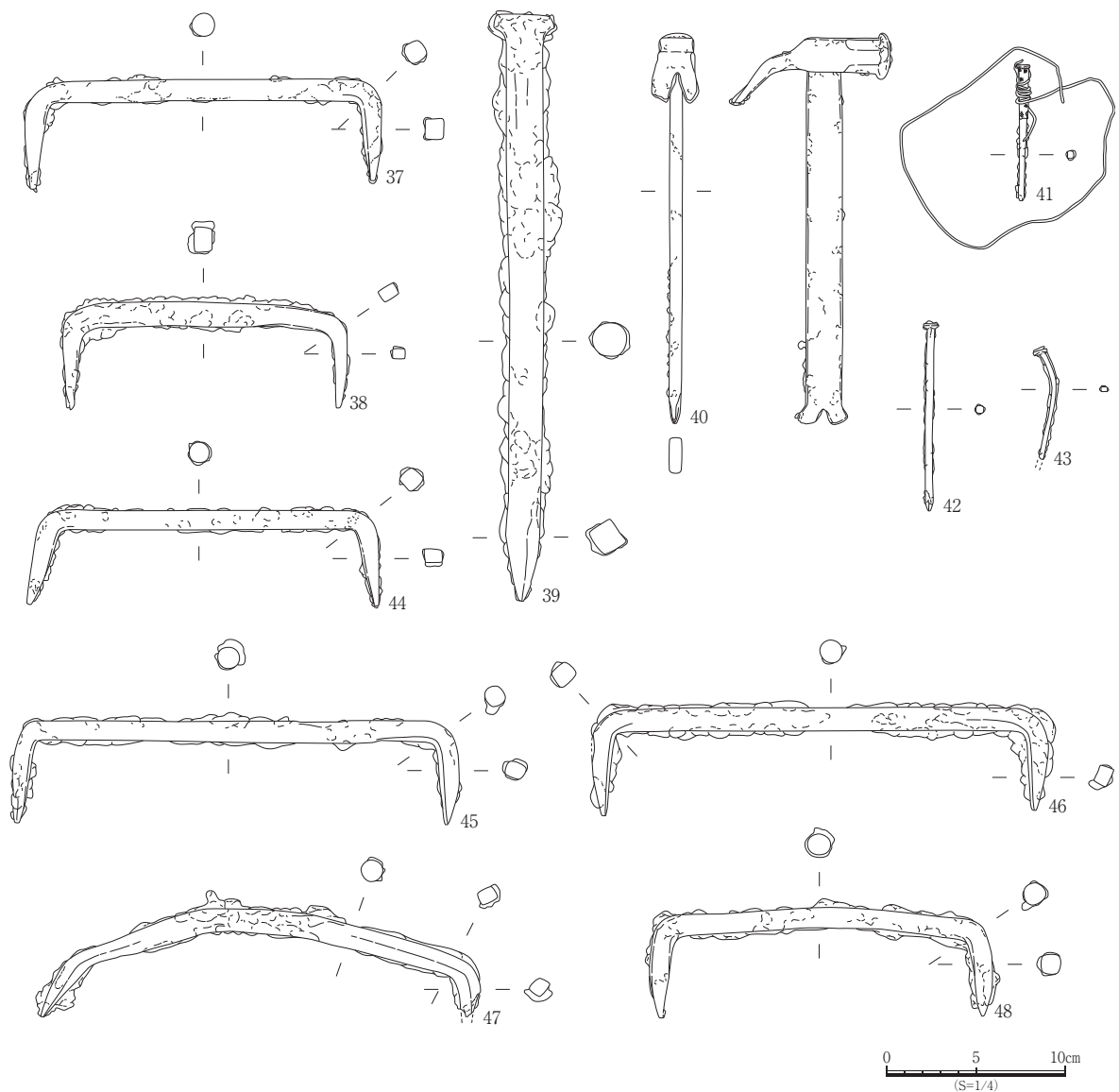


Fig.22 坑道D～F区出土遺物

D区:カスガイ(37・38) チス(39) E区:釘抜槌(40) 釘と銅線(41) F区:釘(42・43) カスガイ(44～48)

構築現場を見たという人の証言によれば、床、壁、天井の四面が板張りであったとのことである。また、坑道内部では付加帯を示す見事なメランジュの地質構造が見られた。

② 部屋 (Fig.18)

D区である。坑道の軸線に平行して作られている。長さ19.5m、幅2～2.4m、高さ2mを測り、2本の通路で坑道と繋がっている。通路C区との連結部付近と南部西壁に崩落が見られる。南北両端部は坑木痕跡が見られず幅も狭くなっている。中央部は坑道よりも40cm程広く作られており、坑木溝も長く掘られている。坑木溝は12本検出したが、中間部分には1.5m程間隔の開いたところがある。中央部の壁にはツルハシによる掘削痕跡も認められる。遺物はカスガイ2点(37・38)、鉄製のチス(39)が出土している。前者は北端の坑木溝から、後者は北部の東壁際から出土している。チスは剣鑿とも呼ばれる一種の穿孔具で、平鑿を使う前段階の作業に用いる。

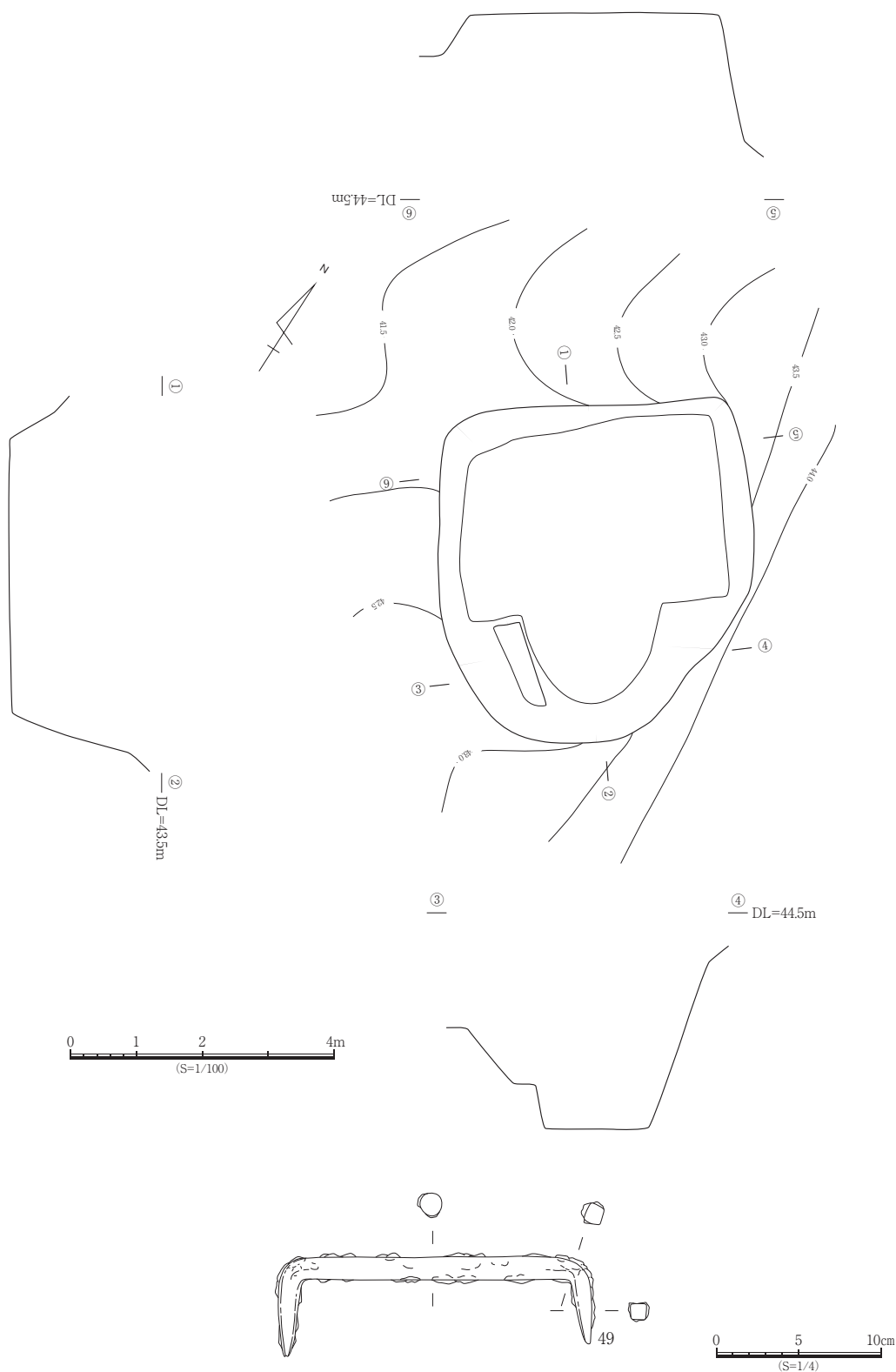


Fig.23 2-2号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)

③ 通路 (Fig.18 ~ 20)

C区、E区ともに長さ7.5m、幅2.0m、高さ2.0mを測り、坑道と部屋とを直角に結んでいる。C区は、

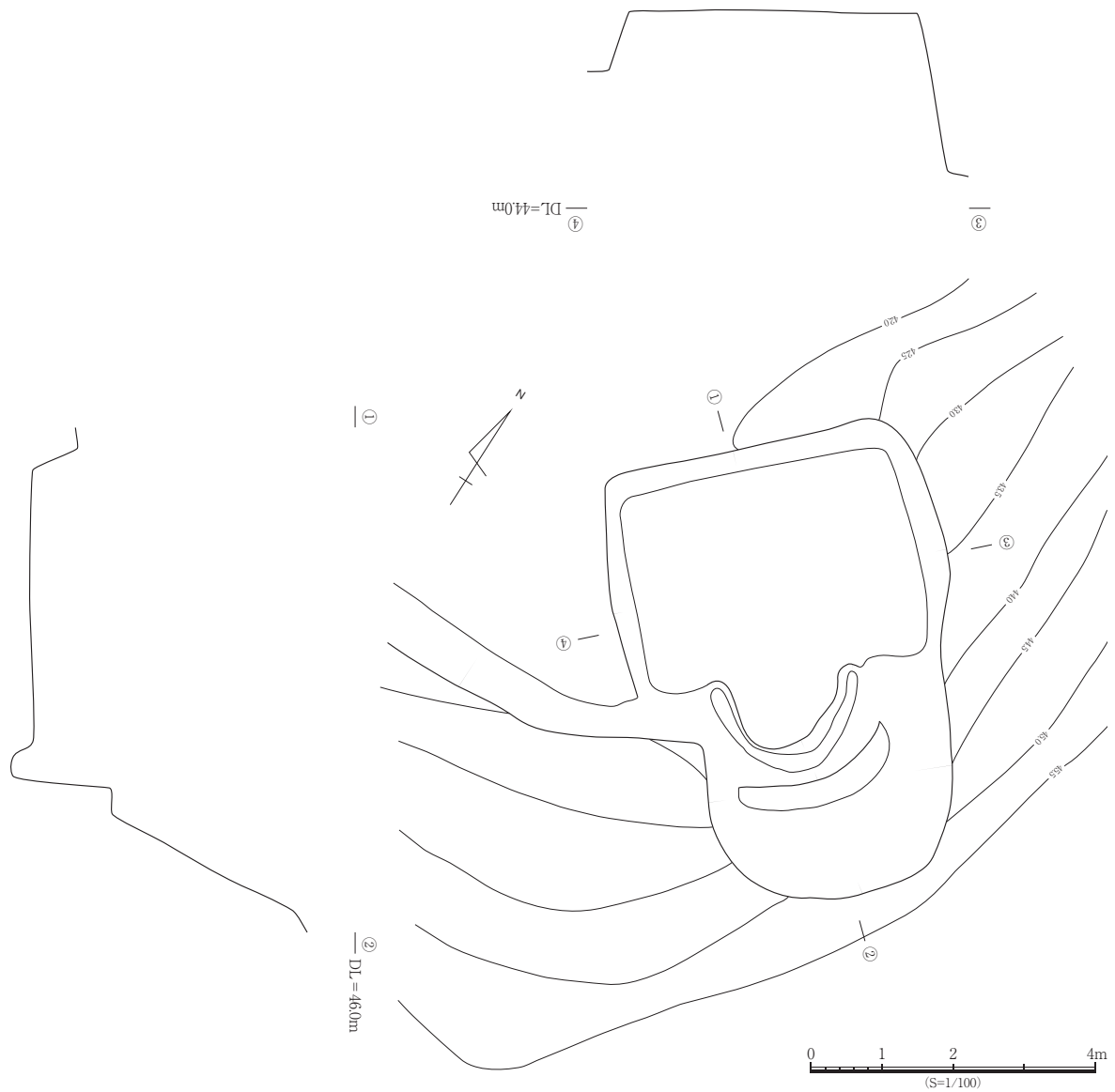


Fig.24 2-3号平面・エレベーション

床面に8本の坑木痕跡が見られ90cm間隔で並んでいるが、坑道側から3本目と4本目の間が1.9mと広く開いている。遺物はカスガイ1点(36)、釘2点(33・34)、ガイシ(35)が出土している。35と36は床面北壁際、37は西端坑木溝から出土している。西部2本の坑木溝には腐食した坑木が残存していた。ガイシは半分近くが欠損しているが全高5.3cm、口径4.3cmを測る。頭部外面に「7-0654」と「250V3A」の標示が見られる。

E区は東側半分が崩落土により厚く覆われている。床面はほぼ全面崩落礫で覆われていたが、西側半分は除去し床面を検出することができた。坑木溝は4本を確認することができたが、これら全てに腐食坑木が認められた。遺物は釘抜槌(40)と銅線を巻き付けた釘(41)が壁際から出土している。前者は全長21.6cm、頭部の長さ9.0cmを測る。柄部も鉄製で断面は方形に作られ幅2cm、厚さ0.7cm、端部は幅が広がりV字の切り込みが入れられている。頭部先端は径1.9cmを測り使用によりめくれて

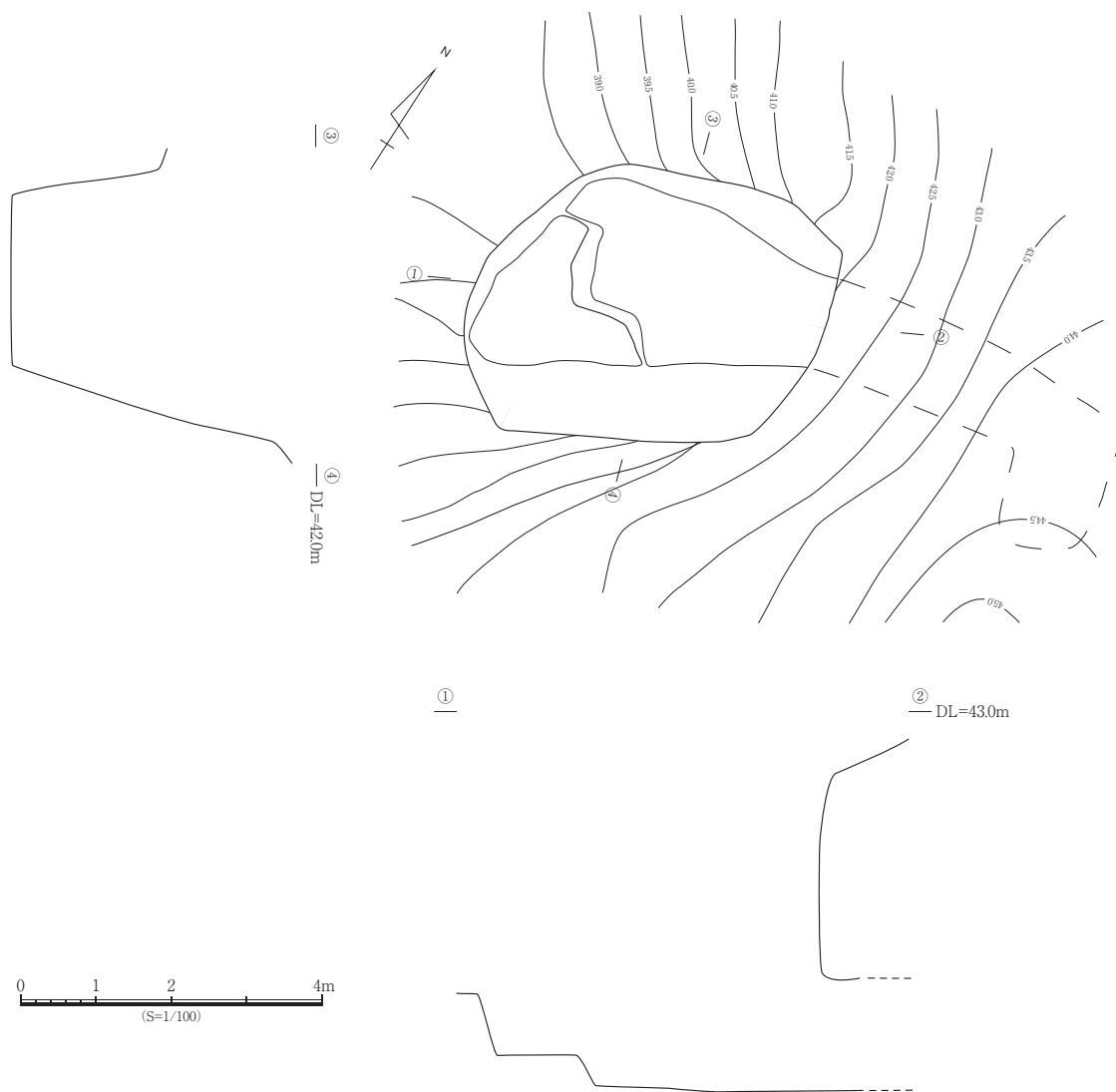


Fig.25 2-4号平面・エレベーション

いる。尾部は釘抜き部位で長さ2cmのV字の切り込みがある。後者は長さ7.6cmの釘に布を巻いて径1mmの銅線を巻付けている。釘抜き槌は『野戦築城教範 総則及第一部』掲載の「かすがいの打入及釘抜き二用フ」に較べると小さい⁽²⁾。

なお、坑道、通路、部屋の掘削による排土は、450 m³程になる。南開口部の前に谷状地形を埋め立てた平坦地が見られる。主として南側に除土している。

(2) 2-2号 (Fig.23)

坑道北入口の東隣に位置する。斜面を4.7×3m前後の長方形の掘込みの南側に長軸2mの半月状の突出部が設けられている。床面は平坦に作られ、深さは南端で2.19m、北壁で0.65mを測る。長軸方向はN31° Wである。遺物は、西隅の床面からカスガイが1点(49)出土している。

(3) 2-3号 (Fig.24)

坑道北入口の西隣にある。2-2号と類似した構造を有する。斜面を4.8×4.6m長方形に掘込み、南壁にU字形の突出部を持ち南壁には幅30cm前後の三日月状のテラスが設けられている。突出部の

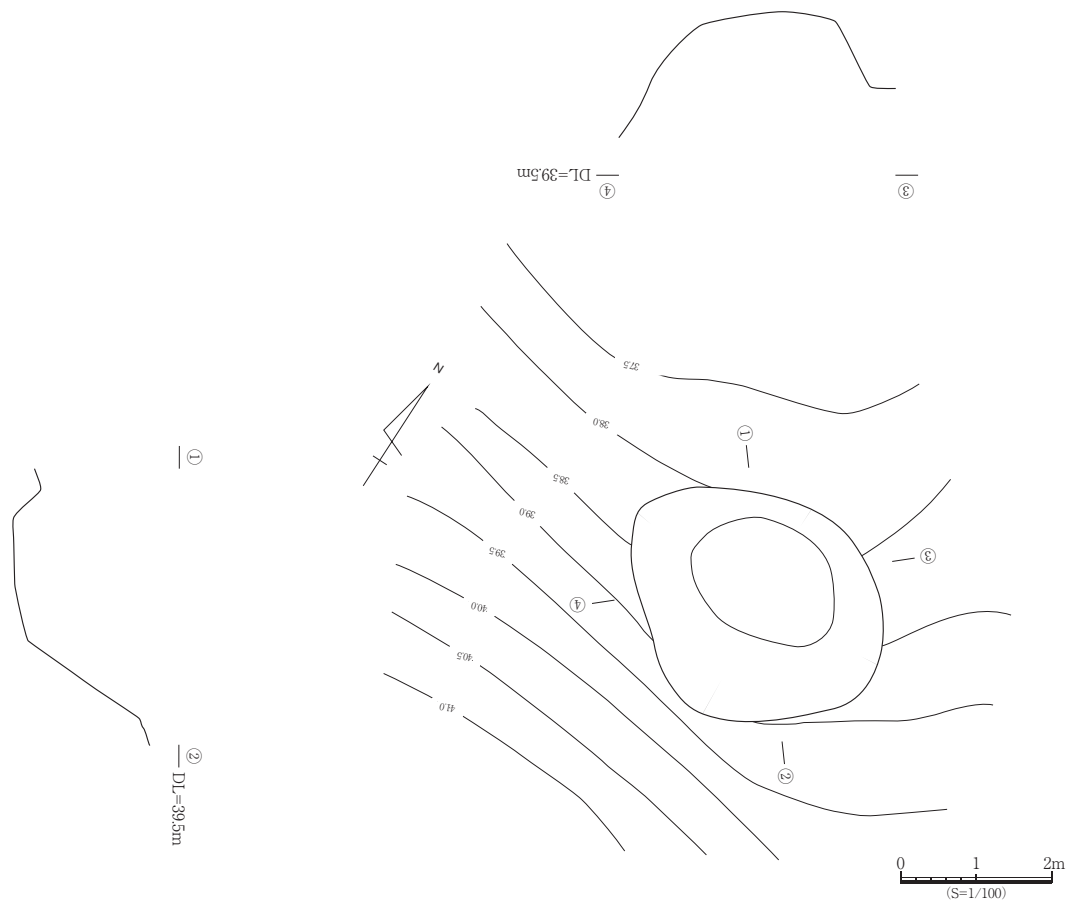


Fig.26 2-5号平面・エレベーション

床面には幅20～30cm、深さ30cm前後の溝が掘られている。床面は平坦で深さは北側で0.6m、南壁では3.68mを測る。

(4) 2-4号 (Fig.25)

軍道脇に掘られた横坑である。幅2.0m、高さ1.5mの開口部から東西方向に8m程横穴が掘られ、直角に南に曲がって1m程で行き止まりとなっている。入口は階段状になっている。横穴部は幅1.3m程、高さ1.5mを測るが奥の詳細は不明である。

(5) 2-5号 (Fig.26)

軍道曲部の内側に設けられた小型の土坑である。3.1×3mの隅丸方形の平面形を呈し深さは最大1.7mを測る。

3. 3群

3群は東西に走る軍道に向かって開口する横穴であるが、天井部は全て崩落している。4号と5号は小型であり構築途中で放棄された可能性もある。

(1) 4号

長軸3.2m、短軸2.5mの楕円形状の平面形を呈し南壁の高さは2.5mである。長軸方向はN36°Wである。床面は道路面からそのまま繋がっている。入口で27.33m、南壁際で27.58mと25cmの比高差がある。

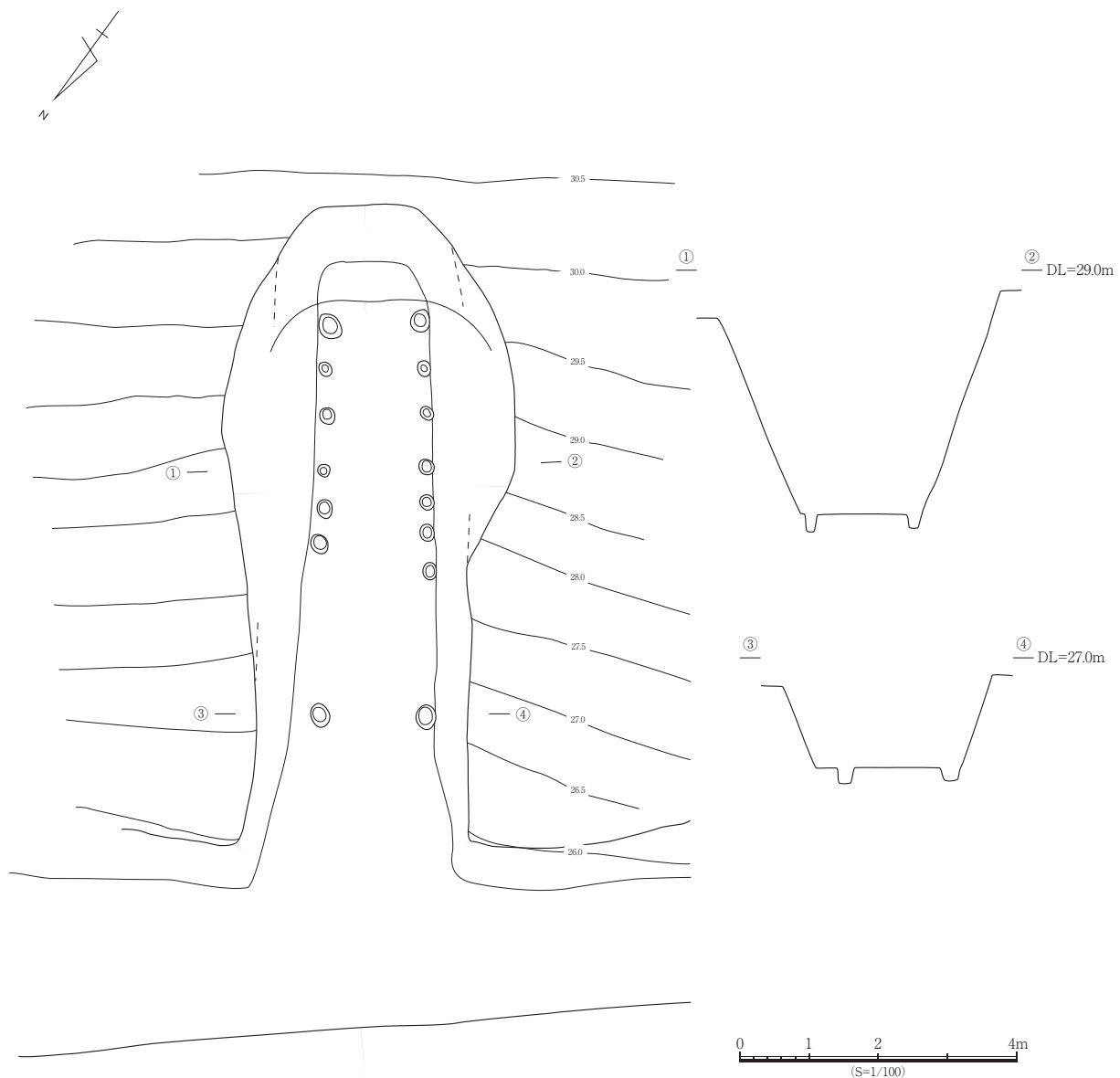


Fig.27 6号平面・エレベーション

(2) 5号

4号から9.5m東に位置する。一辺2m前後の隅丸方形形状を呈する。床面は道路面から20cm程段状に下がっており、南壁に向かって傾斜して上がっている。南壁の高さは1.5mを測る。軸方向はN33°Wである。

(3) 6号 (Fig.27)

5号の10m東に位置する。入口の床面幅2.9m、奥行き9.0mを測る。軸線はN30°Wである。南壁(奥壁)はオーバーハングして立上がり3.0mを測るが、実際は床面から垂直に立ち上がる1.5m前後と考えられる。天井部は完全に崩落し、両側の壁面もかなり崩れている。両壁は斜めに立ち上がっているが本来は垂直に近かったものと考えられる。入口から2.5m入ったところの東西の壁際に径30

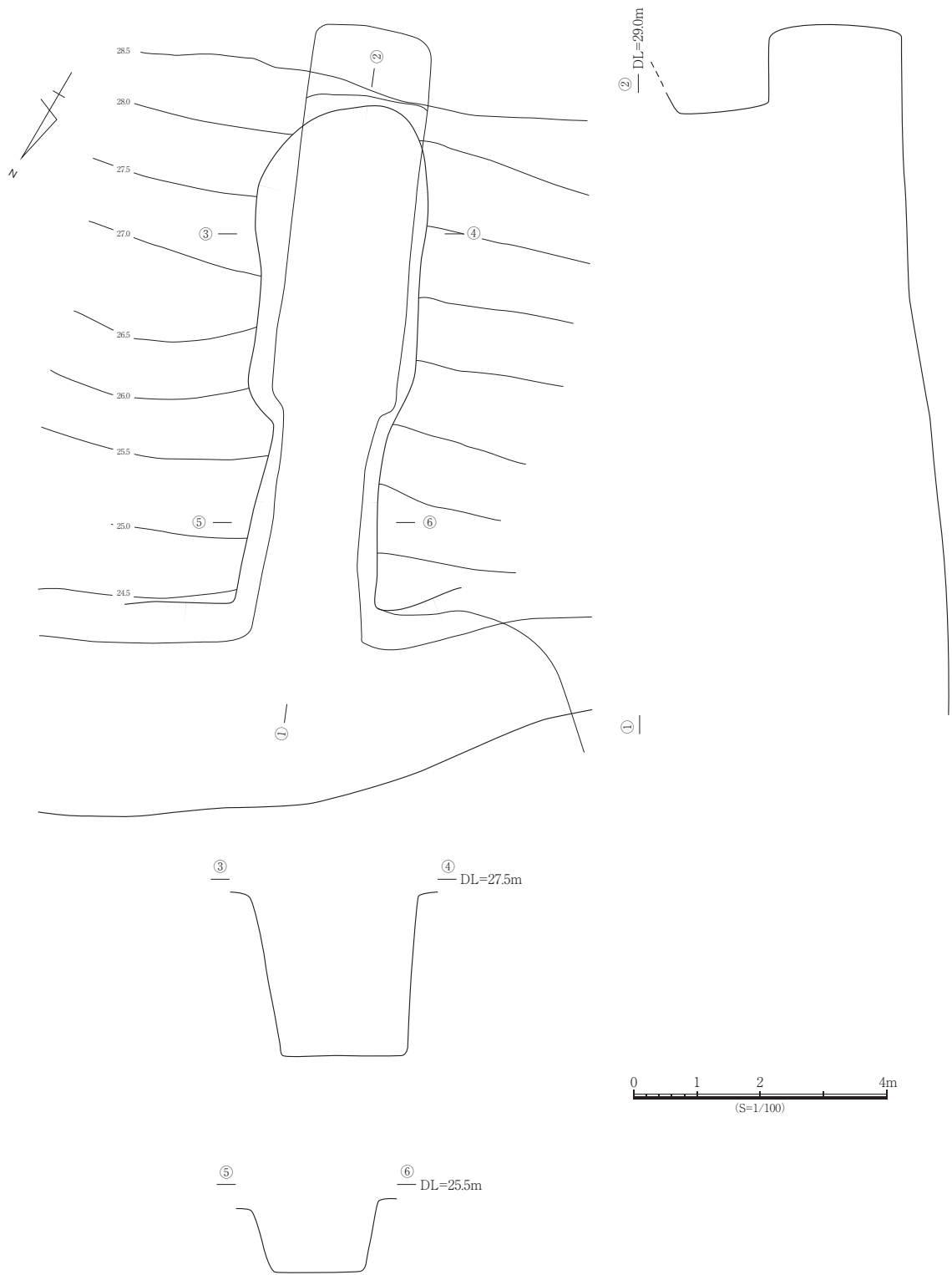


Fig.28 7号平面・エレベーション

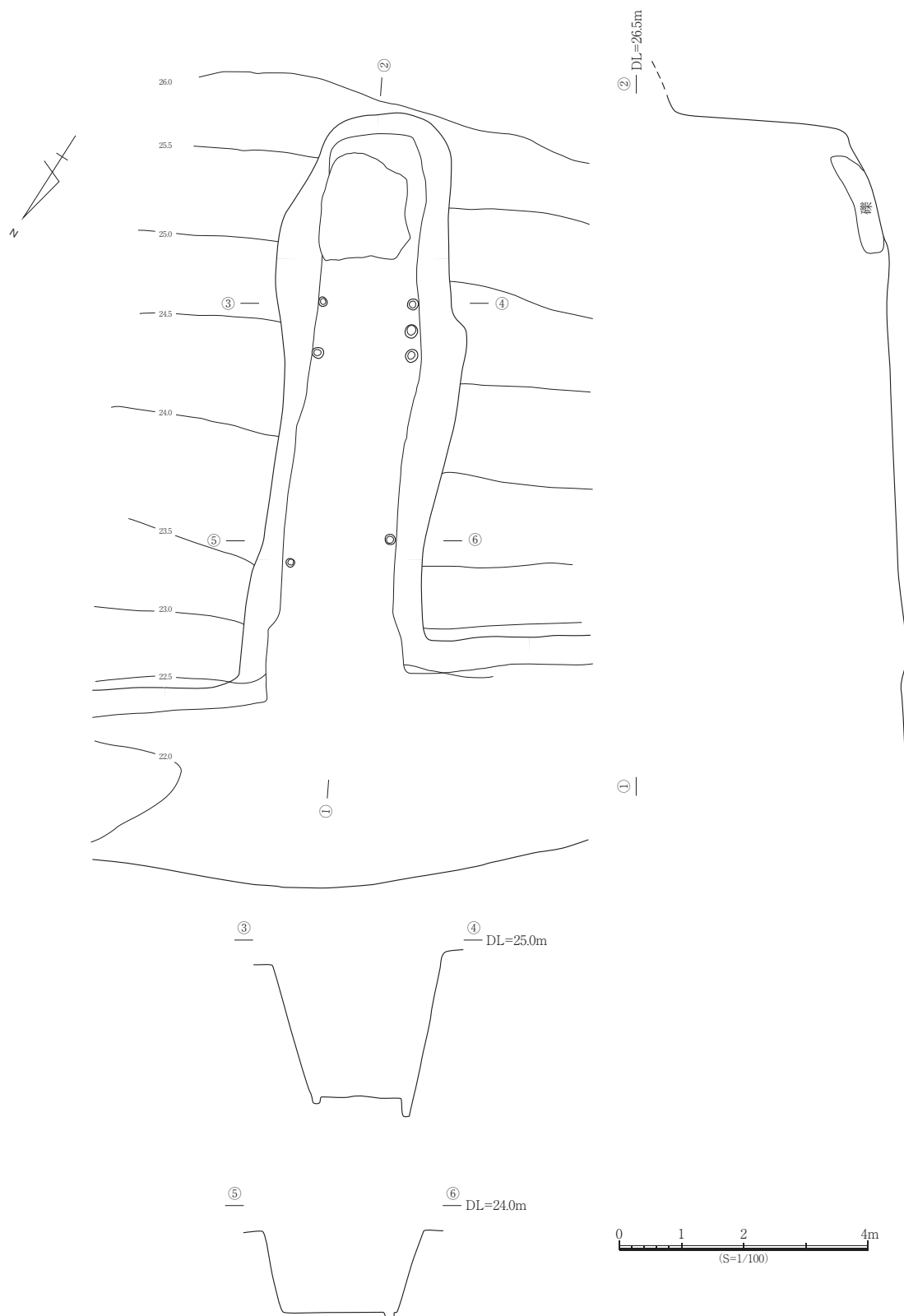


Fig.29 8号平面・エレベーション

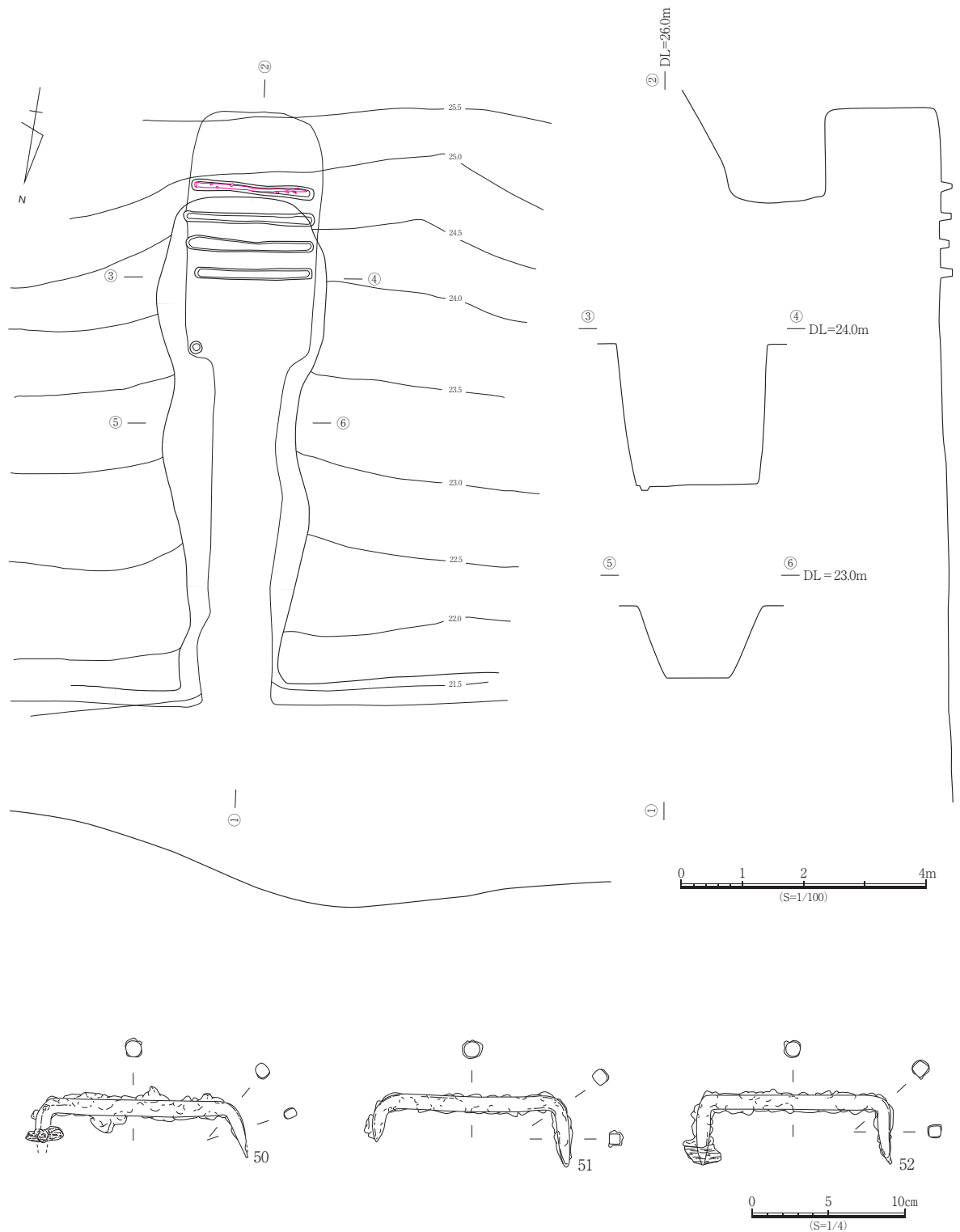


Fig.30 10号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)

cm、深さ20cmの小ピットが見られる。さらに中央部以北には東壁際の床面に6個、西壁際には7個の小ピットが並んでいる。ピット径は20～30cm、深さは20cm前後、ピットの間隔は40～70cmである。

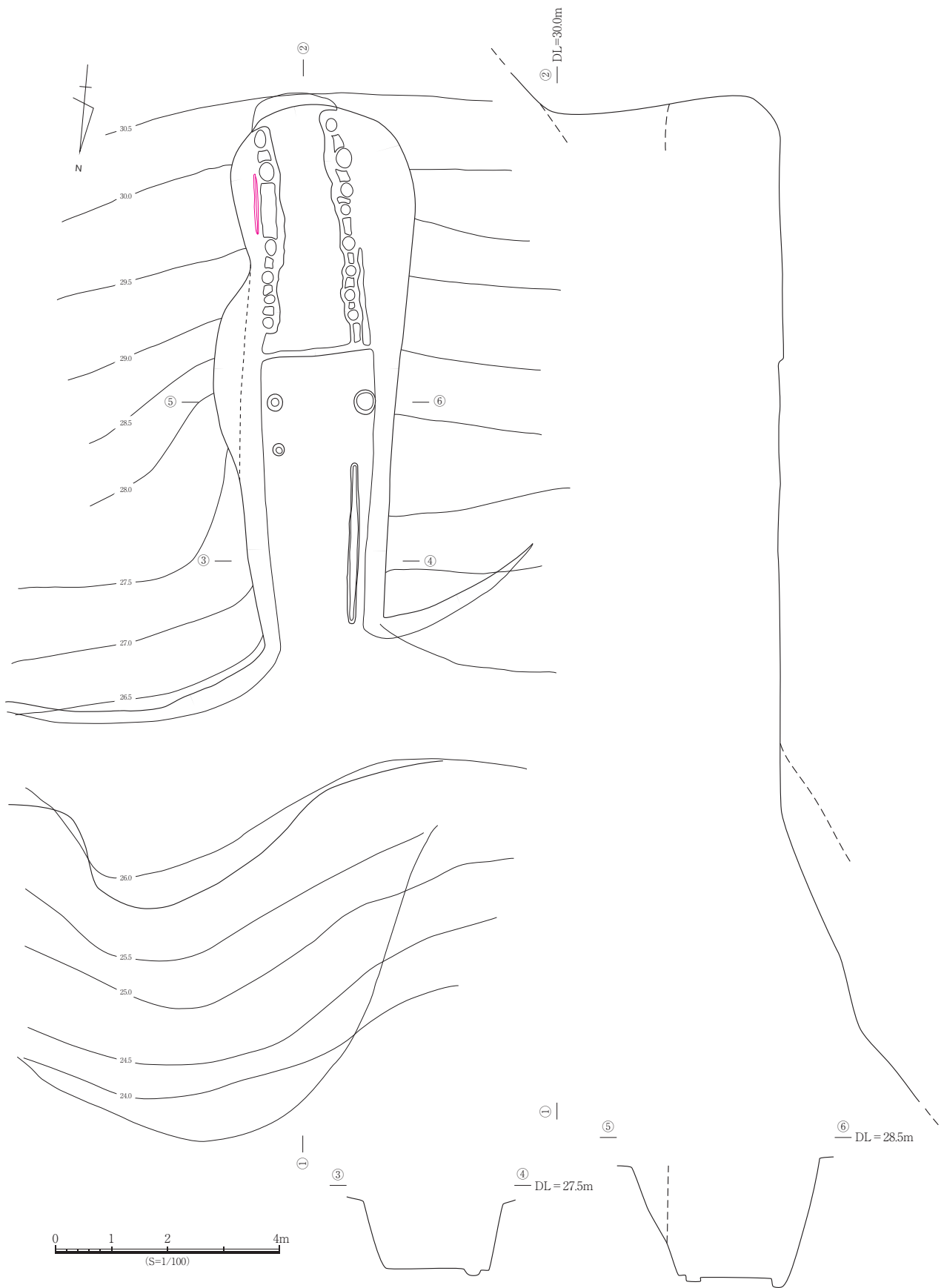


Fig.31 5群19号平面・エレベーション

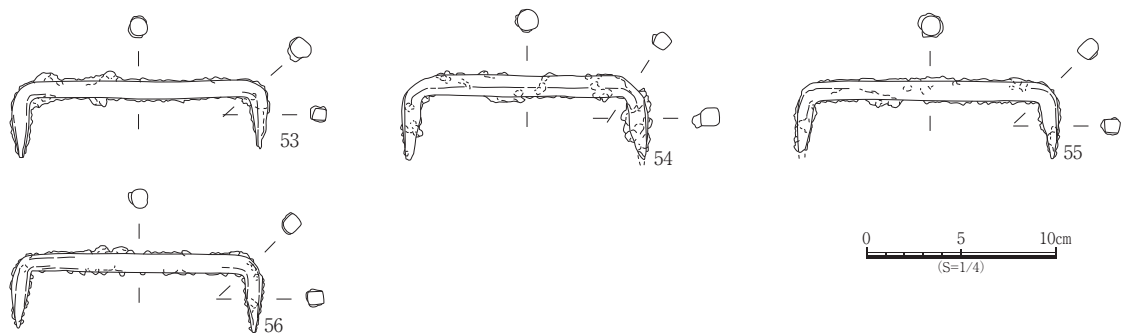


Fig.32 5群19号出土遺物(カスガイ)

坑道内の坑木痕跡に較べると規模が小さく不揃いであるが、天井を支える坑木の痕跡と考えられよう。入口側の一对のピットは出入口の扉用の支柱であろう。実際にはピット列の始まる中央部あたりからトンネル構造になっていたものと考えられる。

(4) 7号 (Fig.28)

6号の東20mに位置する。通路と部屋とからなっている。通路部は幅1.8m、長さ3.5m、部屋は床面幅2.0m、奥行き5.2mを測り長形状を呈する。軸線はN24° Wである。奥壁は2.0mを測りほぼ垂直に立ち上がり、奥壁から1.0m前後天井部が残っている。部屋の部分が横穴構造になっていたものと考えられる。部屋の床面は水平であるが通路部は緩傾斜している。床面に遺構を検出することはできなかったが、遺構を伴わない坑木や壁板が存在したことは十分考えられる。

(5) 8号 (Fig.29)

7号の東20mに位置する。入口の床面幅2.1m、奥行き9mを測る。軸線はN29° Wである。奥壁は2.7mを測るが、天井部が完全に崩落しており実際は1.5m前後であったものと考えられる。両壁は斜めに立ち上がっているが、これも崩落によるためで実際は垂直に立上っていたものと考えられる。入口から2.2m入った東壁際と2.1m入った西壁際の床面に径13cmの小ピットがあり、深さは東側は7cm、西側は17cmである。6号で見たような扉用のピットであろう。奥には東壁際に2個、西壁際に3個の小ピットが見られる。径15～20cm、深さ20cm前後を測る。坑木痕跡である。さらにその奥には長軸1.7m程の礫がある。持ち込まれたものではなく横穴掘削中に露出しそのまま放置されたものであろう。床面はほぼ水平であるが岩から奥壁にかけて少し傾斜している。

4. 4群

3群の東50mに位置する。標高21mのコンターに沿って走る軍道に開口する4基の横穴群である。10号のみ調査を実施し、他の3基(11～13号)は調査区外にあることから現状のまま残っている。

10号 (Fig.30)は通路と部屋とからなっている。通路部は幅1.2m、長さ5.5m、部屋は左右に40cm程広がり床面幅2.0～2.2m、奥行き4.1mを測り長形状を呈する。軸線はN7° Wである。奥壁は1.9mを測りほぼ垂直に立ち上がり、奥壁から1.5m前後天井部が残っている。部屋の部分が横穴構造になっていたものと考えられる。部屋の東袖部分に径20cm、深さ7cmの小ピットが認められる。床面中央には4本の坑木掘方が検出された。掘方の幅は20cm前後、長さ1.9～2.2m、45cm間隔で並んでいる。それぞれに腐食した木材が残存している。奥壁の側のものが最も残りが良く径8cmの丸太材である。

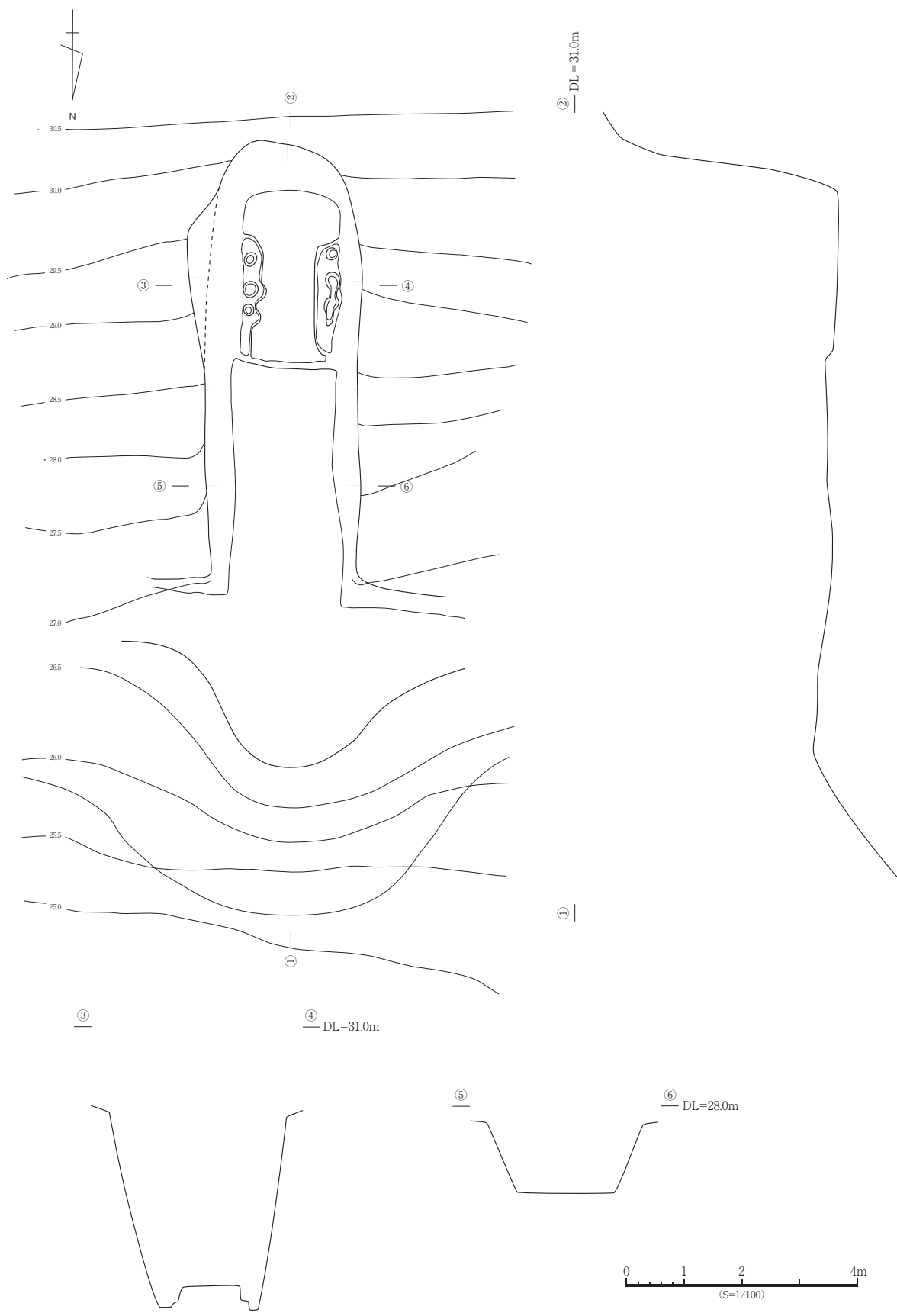


Fig.33 5群20号平面・エレベーション

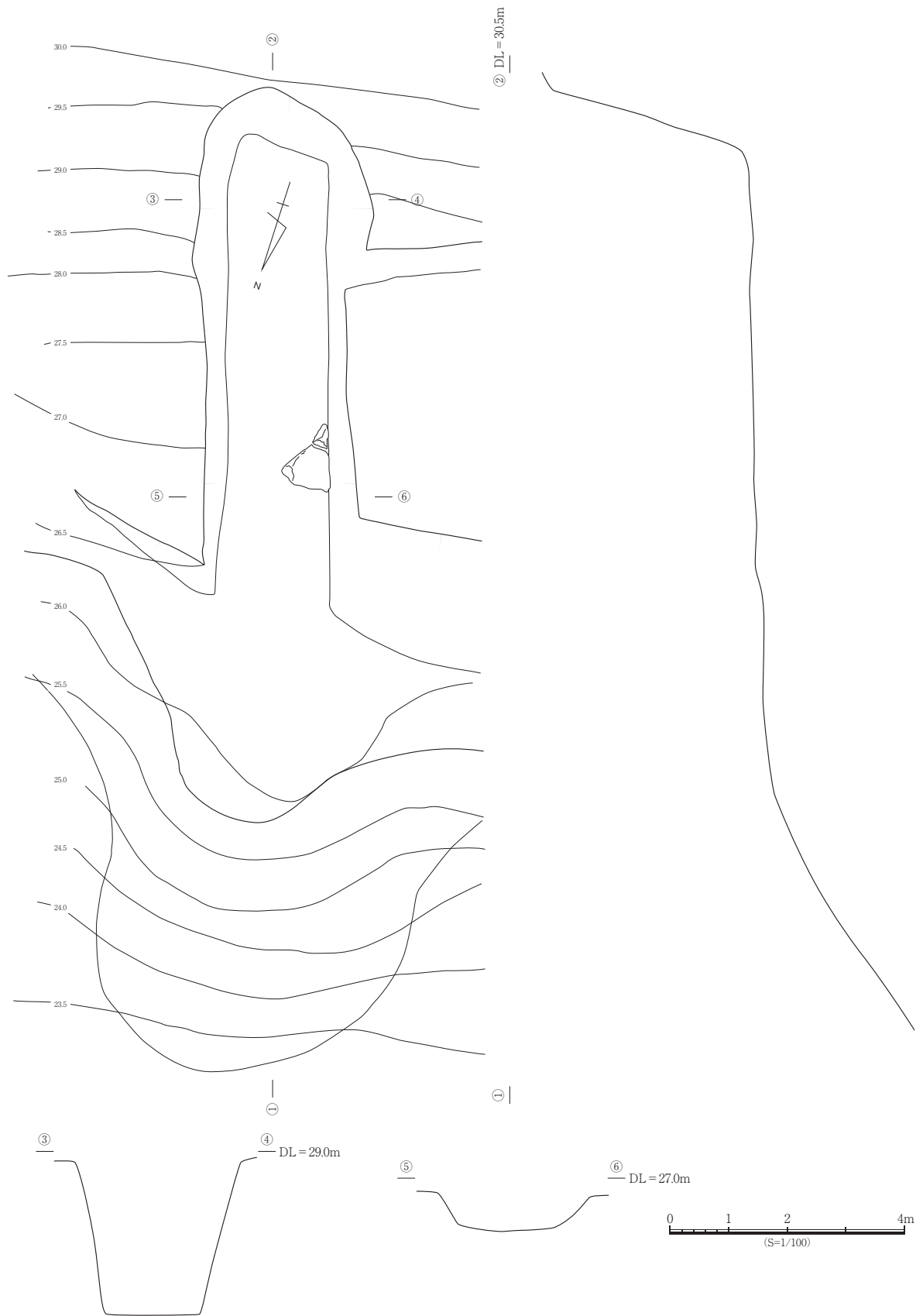


Fig.34 5群21号平面・エレベーション

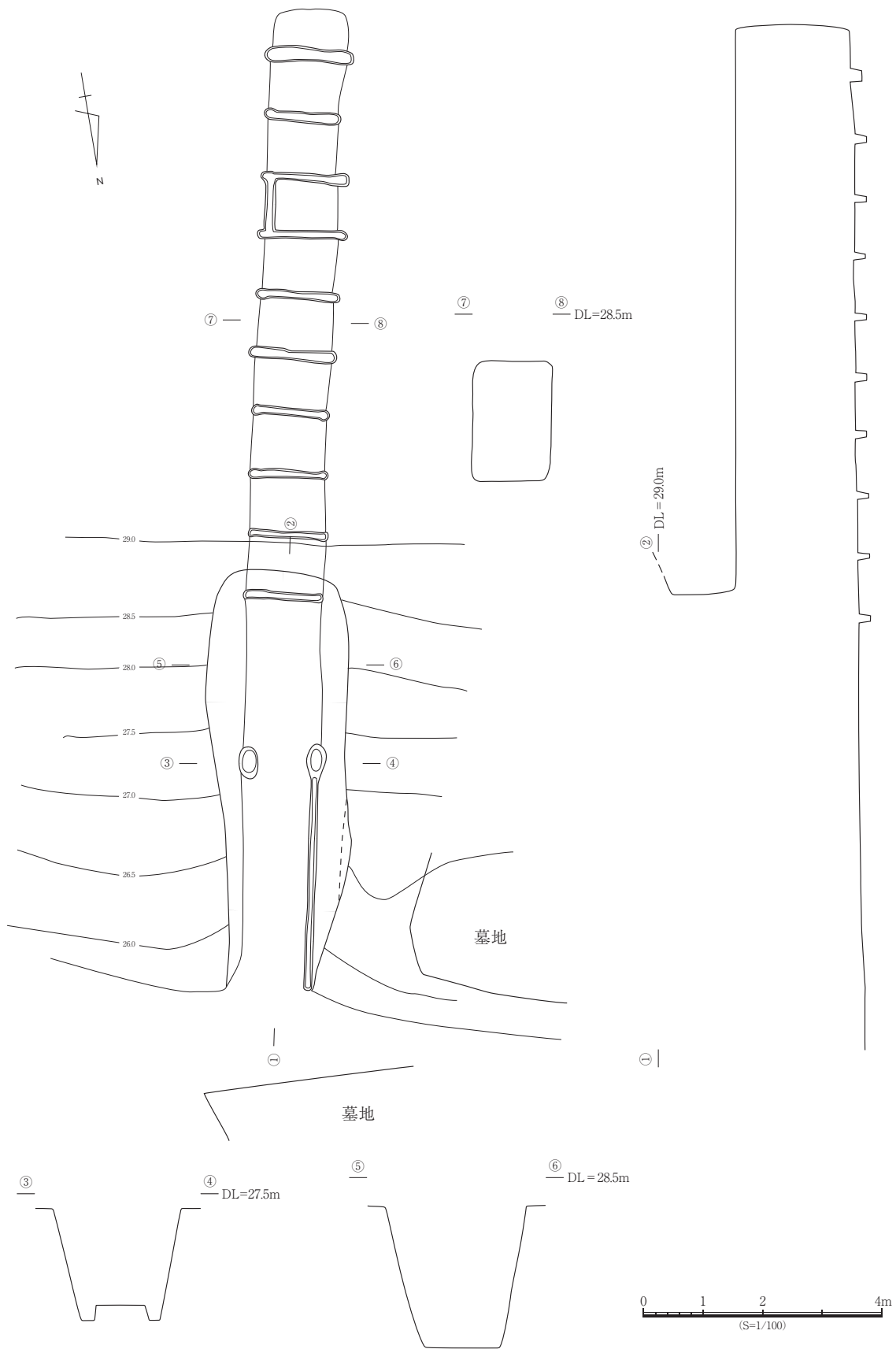


Fig.35 6群14号平面・エレベーション

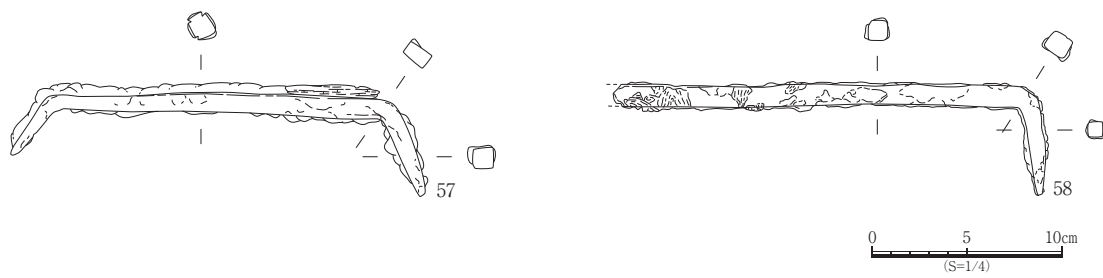


Fig.36 6群14号出土遺物(カスガイ)

遺物はカスガイが3点(50～52)出土している。50は中央部、51は西壁際、52は東壁際からの出土である。

11号は全長10mを測り、通路部と部屋からなる。前者の長さ5m、幅2m、後者の長さ5m、幅4mを測る。12号は全長11m、幅2.5mを測る。通路と部屋に別れている可能性もあるが詳細は不明である。13号も11号や12号と同じ規模であるが戦後作られた山道に切られており詳細は不明である。

5. 5群

遺構群のほぼ中央部に位置し軍道との比高差は約5m、標高26.5m前後に開口部を有する3基の横穴で構成される。

(1) 19号 (Fig.31・32)

長さ10.5mを測り、幅は開口部で1.5m、中央部で2.0m、奥部で1.0m前後を測る。床面は中央部に段があり、10cm程低くなっている。軸線はN5°Wである。床面中央付近には東西の壁際に小ピットが掘られている。扉の支柱と考えられる。低床部の両壁際には坑木痕を示す小ピットが密に並んでいる。奥壁の高さは4mを測るが、本来は低床部には坑木に支えられた高さ2m程の天井があったものと考えられる。壁も崩落により斜めになっているが本来は垂直に立ち上がっていたものと考えられる。遺物は坑木痕跡の近くからカスガイ4点(53～56)が出土し、付近には腐食した板片が見られた。壁板の残欠であろう。また、開口部の前には廃土による凸状の地形が形成されている。

(2) 20号 (Fig.33)

19号の西7mに位置する。長さ7.3m、幅は開口部で2.0m、奥部で1.0m前後を測る。長軸はほぼ磁北を示している。床面は19号と同じように奥側半分が10cm程低い構造で、低床の両壁際には坑木痕の小ピットが並んでいる。奥壁の高さは約4mを測るが本来は2m程で天井があったものと考えられる。開口部北には廃土によって凸状地形が形成され上面は平坦になっており開口部と繋がっている。

(3) 21号 (Fig.34)

20号の西8mに位置する。長さ8m、幅1.8m、軸線はN17°Wを示している。床面には遺構が見られない。奥壁は斜めに立ち上がり3m前後を測るが、本来は他の例のように垂直に立ち上がり天井も有していたものと考えられる。廃土は開口部北に捨てられて凸状の微地形を呈し上面は平坦面をなしている。



Fig.37 6群15号平面・エレベーション

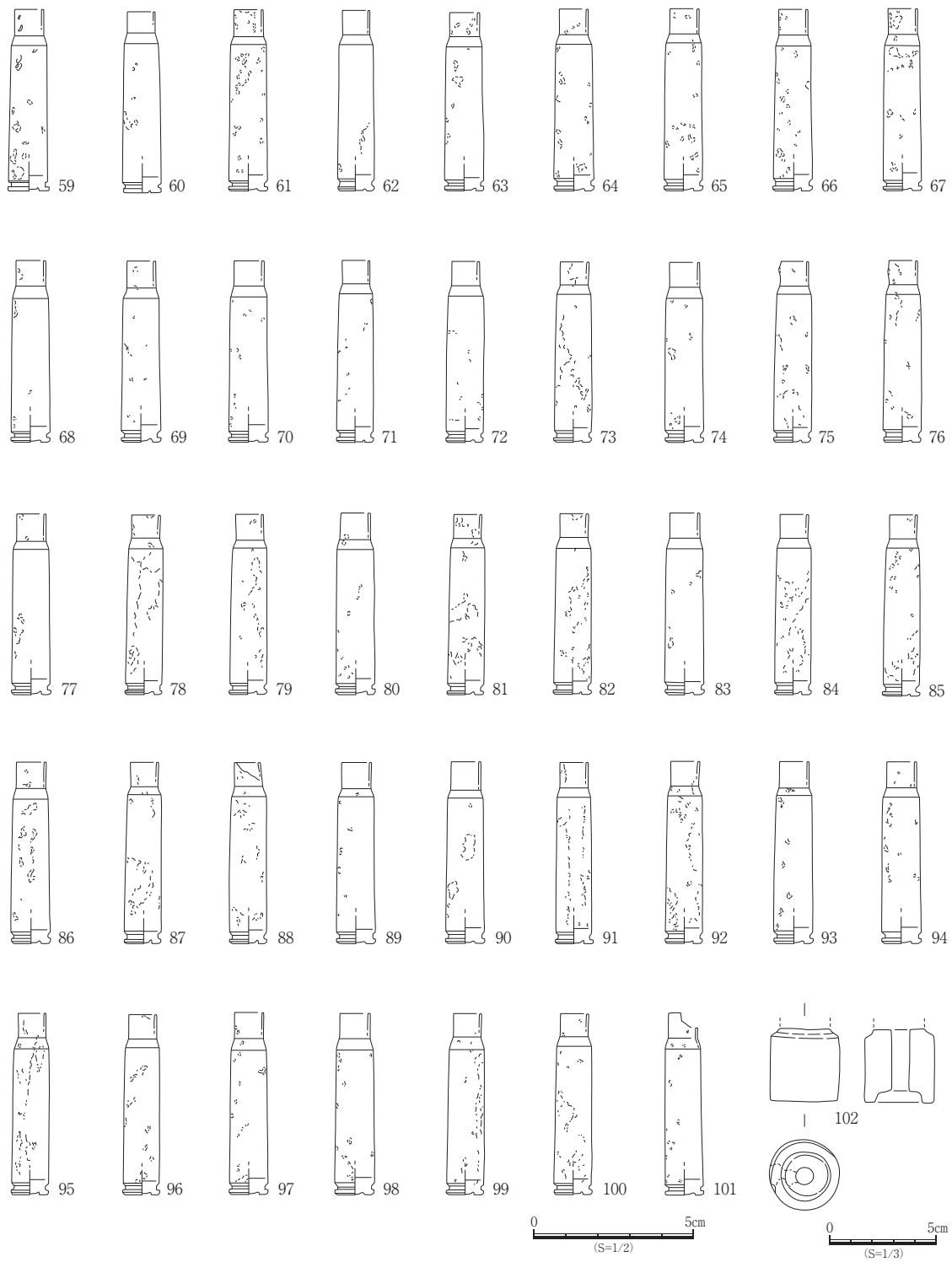


Fig.38 6群15号出土遺物(葉菸 59 ~ 101 ガイシ 102)

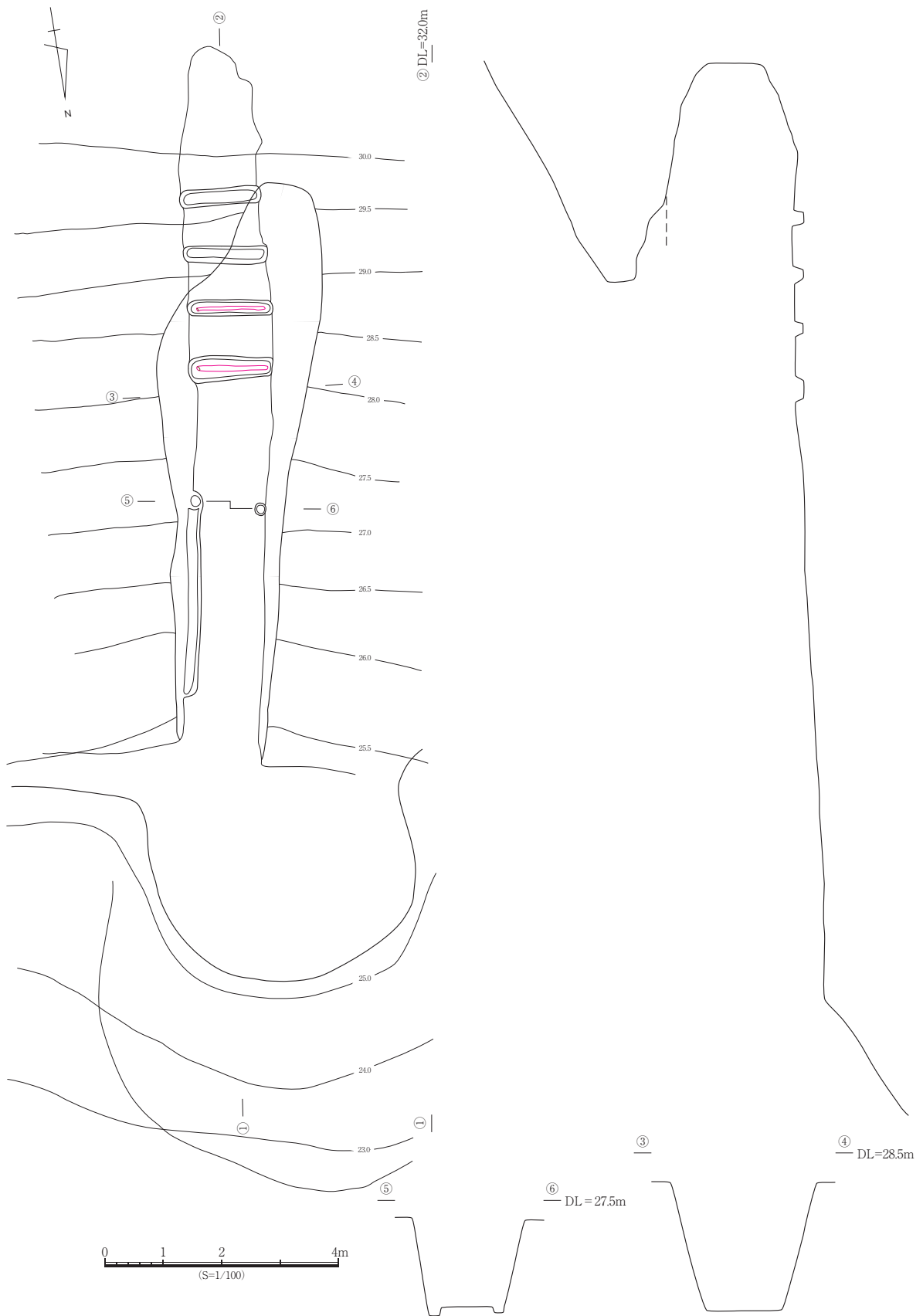


Fig.39 6群16号平面・エレベーション

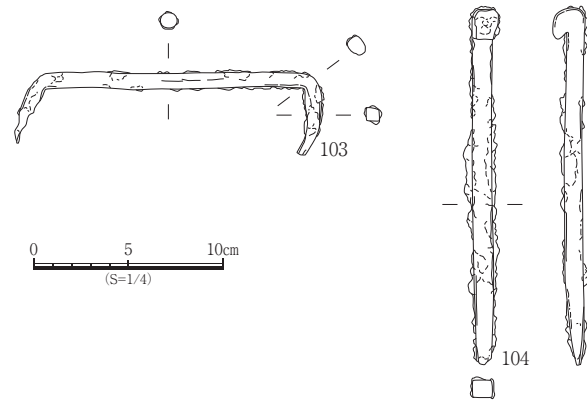


Fig.40 6群16号出土遺物(カスガイ 103 クサビ 104)

6. 6群

遺構群の東部に展開する。軍道との比高差は約6m、標高26m前後に開口する5基の横穴で構成される。

(1) 14号 (Fig.35・36)

全体の横穴の中で最も残りの良い例である。長さ16.5m、幅1.25m前後を測る。軸線はN11°Eである。開口部から4m付近の壁際に40×25cm、深さ30cm程の楕円形小ピットが対になって見られる。扉用支柱穴と考えられる。そこから南に2.8mのところから坑木を支える横木を入れる溝が奥壁に向かって並んでいる。横木溝は幅20cm前後、深さ10～15cm前後、長さ1.25～1.5mを測り壁の中に入っているものが多く、左右の壁に掘り込まれた坑木溝と対応している。横木の溝は10本認められ1.0m間隔を保って並んでいる。奥壁は垂直に立ち上がり、高さは2.0mである。天井は9.45m残っており、ほぼ横木の始まりに対応して天井部が作られている。開口部の前面は墓地によってかなり改変されているが、廃土はそのまま開口部前に捨てたようである。14号は横穴の中で最も長い。

(2) 15号 (Fig.37・38)

14号から東に17mに位置する。天井部も残存し比較的残りの良い遺構である。長さ12.3m、幅は開口部で1.1m、中央部で1.2m、奥は次第に細くなっている。軸線はN17°Eである。床面には開口部から西壁沿い2m、東壁沿いに4.85mの溝が設けられている。溝の幅は20cm、深さは10cm前後を測る。排水用と考えられる。また開口部から4.5mの床面西壁際と4.8mの東壁際には長軸40cm前後、深さ10cmの小ピットが見られる。扉用支柱穴と考えられる。開口部から7m程のところから床面に坑木を受ける横木溝が設けられている。長さ1.2～1.5m、幅20～30cm、深さ10cmを測る。1mの間隔で4本設けられている。何れの横木溝にも腐食した木材が残っており、中には坑木との仕口が僅かに認められるものもある。奥壁は少し内傾して立ち上がり天井部は奥壁から約3m残っている。本来は横木をすべて覆うよう5m程の長さを想定することができる。奥壁立ち上がり際には、40×20cm、深さ15cmの楕円形の土坑が掘られている。開口部前には、廃土による凸状の張り出しが形成されており、張り出し部の長軸は2.5mを測る。

遺物は薬莖43点(59～101)とガイシ1点(102)が出土した。すべて奥壁際の土坑出土である。薬莖はすべて同一規格で全長5.7cm、首径0.9cm、肩径1.1cm、最大径1.2cm、重さは10～11gを測る。底部外面に撃針痕が認められないことから発砲されたものではなく火薬を抜き取ったあと廃棄(隠匿?)さ

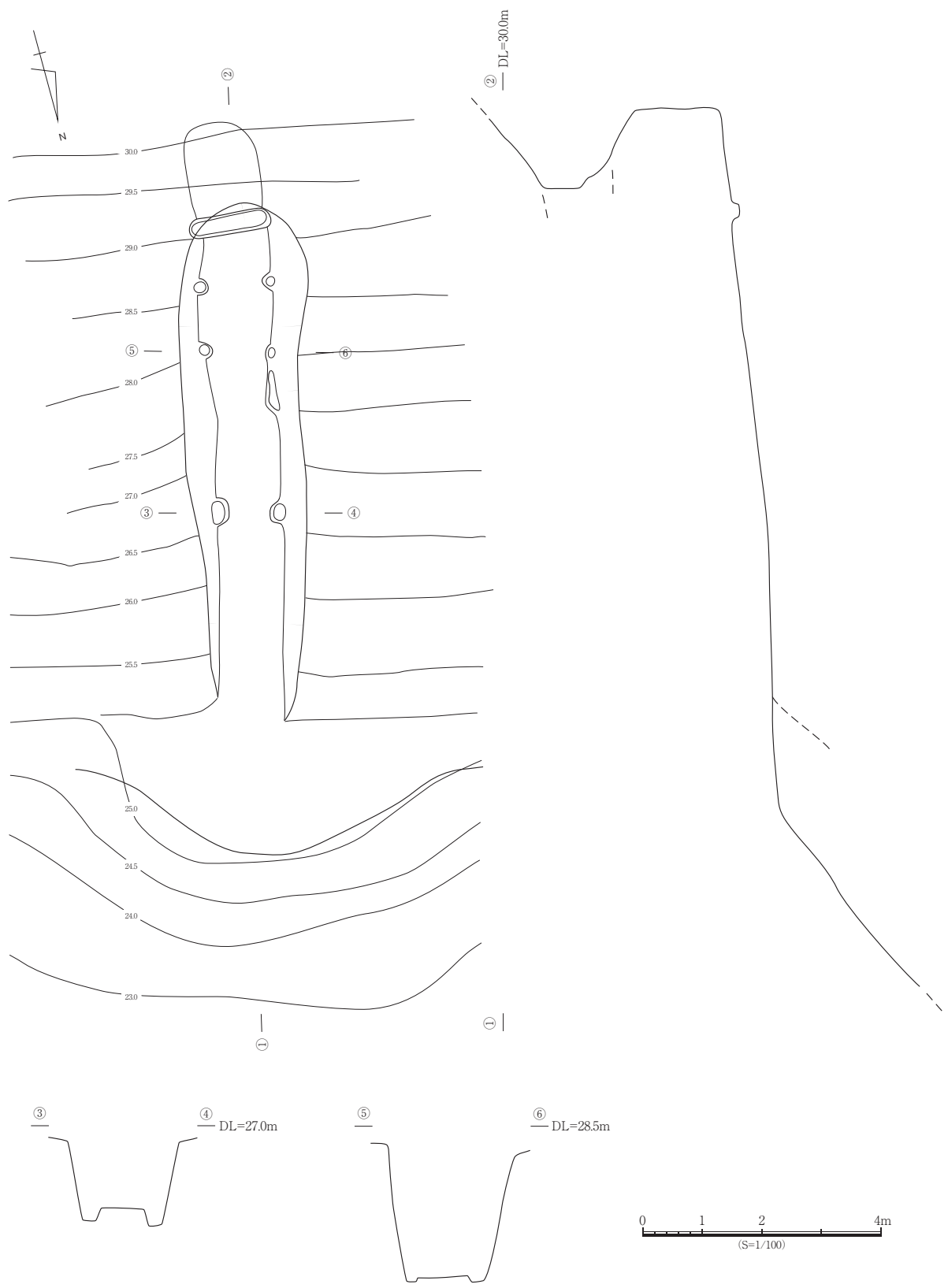


Fig.41 6群17号平面・エレベーション

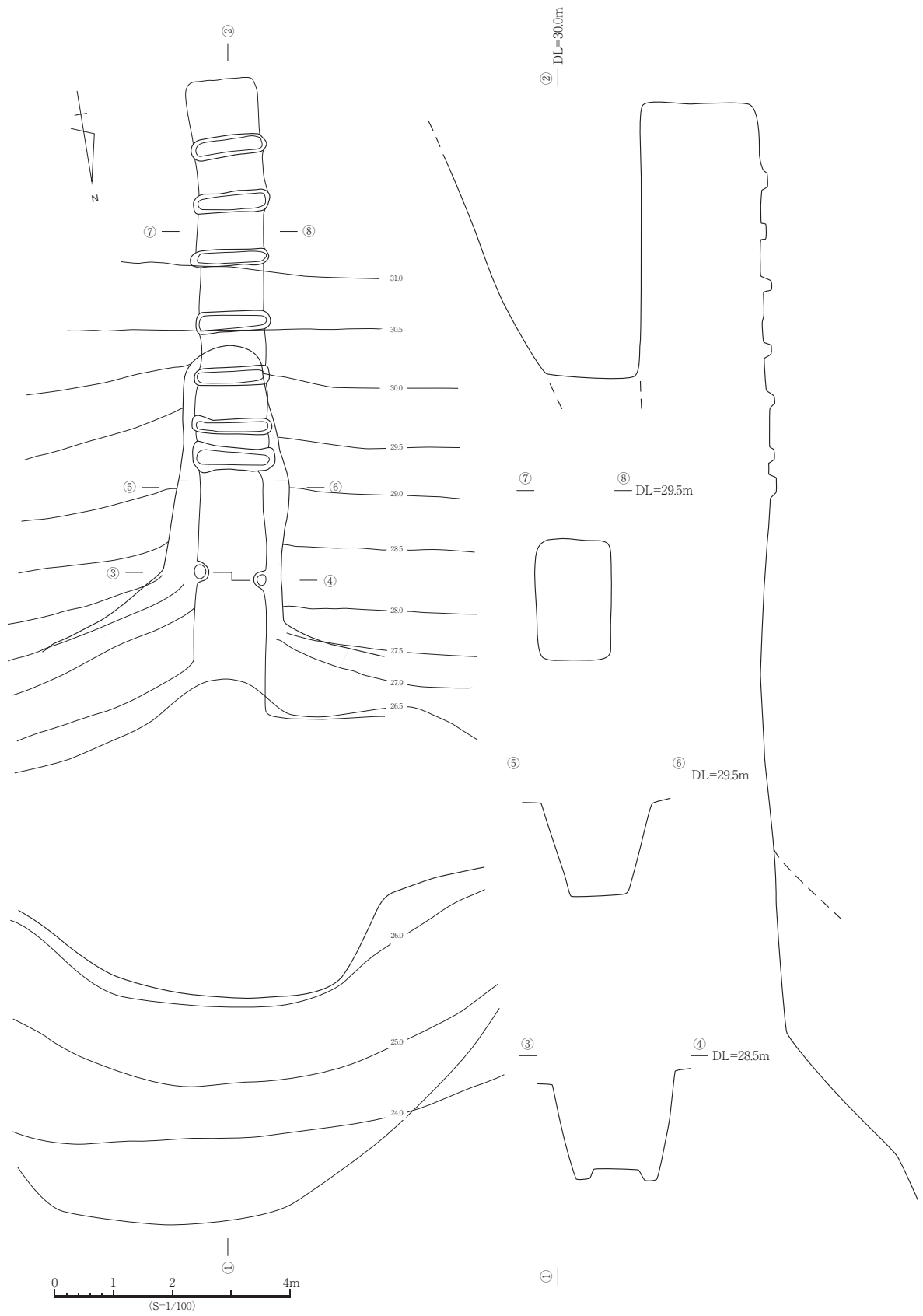


Fig.42 6群18号平面・エレベーション

れたものと考えられる。薬莖の大きさから99式歩兵銃或はそれと互換性のある92式重機関銃のものと考えられる。ガイシは家庭用の低圧ガイシと呼ばれるもので、径3.3cm、高さは3.5cm以上を測り、中に径8mmの止め具孔が抜けている。

(3) 16号 (Fig.39・40)

15号の東12mに位置する。長さ12.3m、幅は開口部で1.3m、中央部付近で1.4m、奥は次第に細くなっている。軸線はN7° Eである。開口部から4mの西壁際床面には径20cm、深さ10cmの小ピットが、同じく東壁際床面には径30cm、深さ13cmの小ピットが見られる。扉用支柱穴と考えられる。東壁際にはピットから開口部に延びる小溝が設けられている。長さ3.2m、幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。小ピットから2m奥に入ったところから坑木用の横木溝が1mの間隔をもって4本並んでいる。横木溝の長さは1.4m、幅30～50cm、深さ10cm前後を含む。手前側の2溝には腐食した横木が残存している。天井部は奥壁から3.3m程残っており、高さ2mを測る。開口部北には廃土による凸状の地形が形成され、長軸3m程の平場が作り出されている。遺物は床面よりカスガイ1点(103)、カスガイを転用したと考えられる大型の釘状の鉄製品(104)が出土している。

(4) 17号 (Fig.41)

16号の東10mに位置する。長さ10.1m、幅は開口部で1.1m、中央より少し入ったところに最大幅があり1.3mを測る。最奥部は東へ僅かに屈曲しているが、長軸方向はN13° Eである。チャートの岩盤を掘削している。開口部から3.5mの西壁際床面には長軸40cm、深さ10cmの小ピットが、同じく東壁際床面には長軸50cm、深さ15cmの小ピットが見られる。扉用支柱穴と考えられる。さらに奥部には東西壁際の床面に2組の小ピットと坑木用と考えられる横木溝が認められる。小ピットは径20～30cm、深さ5cm前後、横木溝は長さ1.4m、幅30cm、深さ15cmを測る。天井部は崩落により1m程しか残っていないが、本来は4.5m程あったものと考えられる。高さは2mを測る。廃土は開口部北に捨てられているが他の例に較べて凸状張り出しは顕著ではない。張り出し部の平場も長軸2.5m前後に過ぎない。

(5) 18号 (Fig.42)

17号の東14mに位置する。長さ14.5m、床面幅は全体的に1.2mと均一である。長軸方向はN8° Eである。開口部から2mの床面壁際に扉用支柱穴と考えられる径30cm、深さ10cmの小ピットがある。開口部から4mのところから奥に向かって坑木受けの横木溝が見られる。7本設けられており長さは1.3～1.4m、幅20～40cm、深さ10cm前後を測る。横木溝に対応して東西の壁には坑木溝が見られる。横木溝の間隔は、一番手前は約50cm、他は1mを測る。壁は垂直に立ち上がり、約4.7m天井部が残存している。天井部の高さは2m、断面形は長方形を呈する。本来は横木溝の始まる位置、奥壁から6.5m程あったものと考えられる。廃土は開口部北の斜面に捨てられ凸状の微地形を形成している。開口部から長軸4mの平場が作り出されている。

7. 7群

陣地西寄りに位置し、標高40m前後の斜面中腹に展開する遺構群である。3～6群で見たような横穴は見られず、斜面を削り出して平場とした比較的小規模なものである。

(1) 23号 (Fig.43)

24号の東3mに位置する。東西に長軸を有する楕円形状の土坑でチャートの岩盤を掘削している。

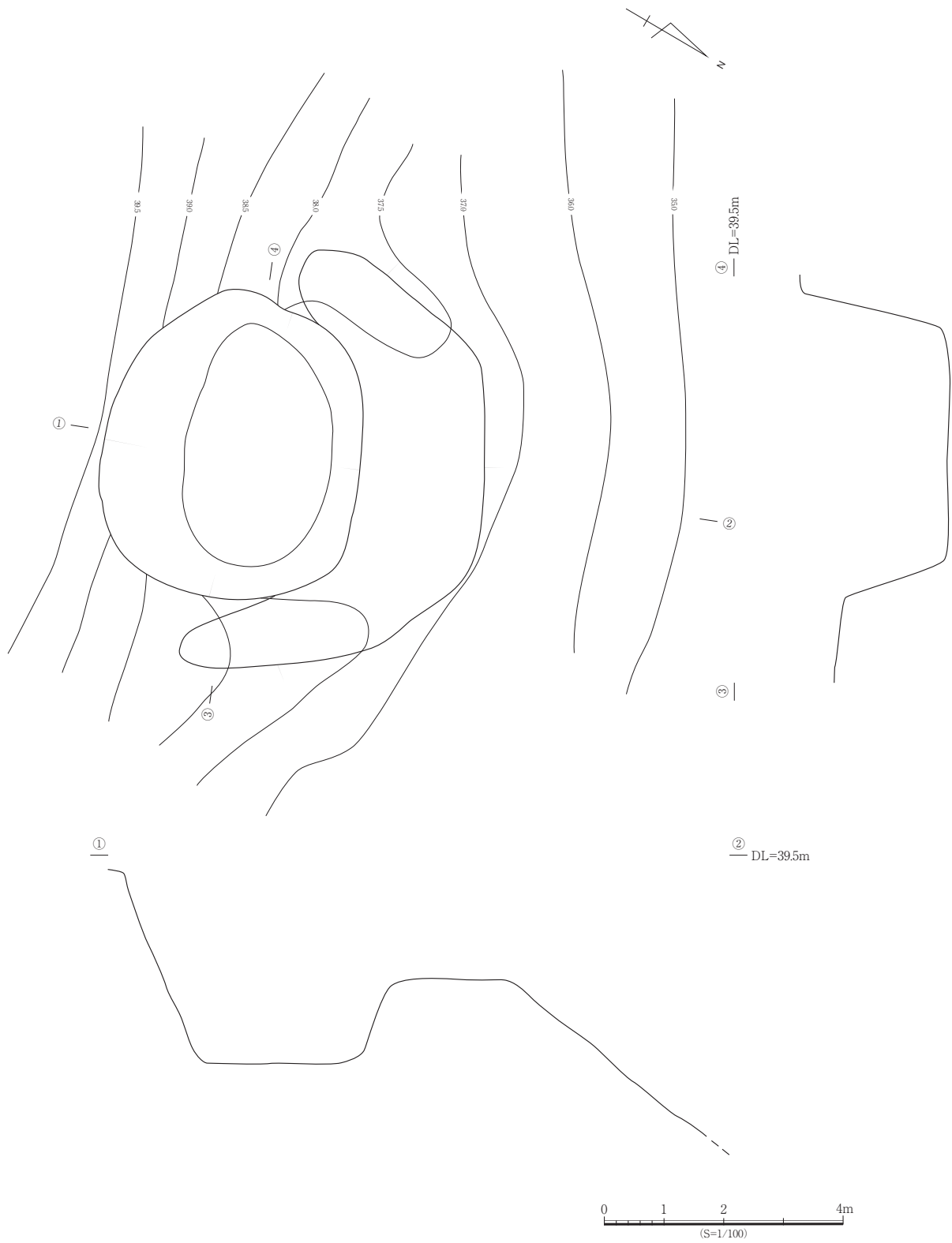


Fig.43 7群23号平面・エレベーション

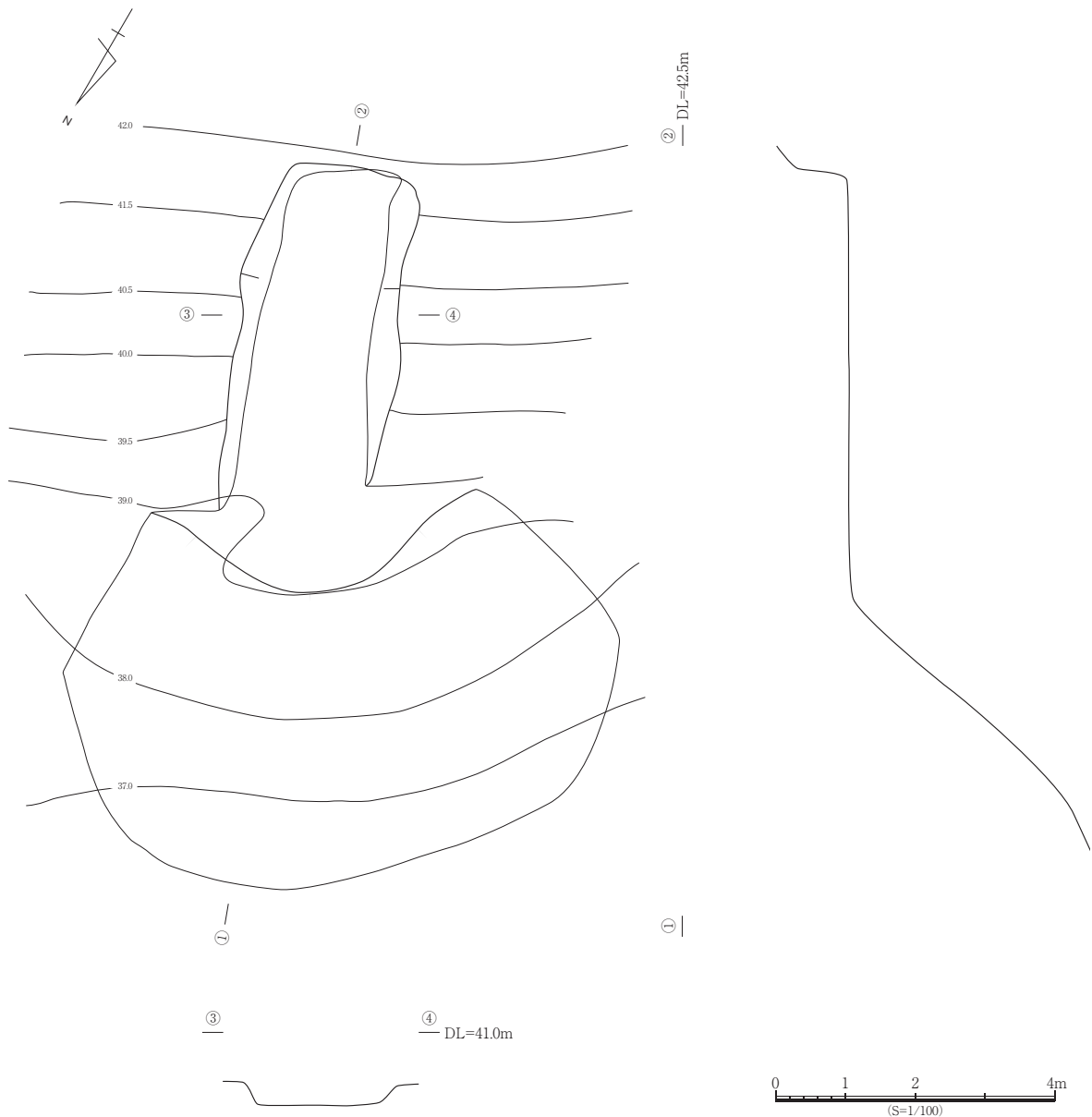


Fig.44 7群24号平面・エレベーション

床面で長軸4m、短軸2.5m、深さは南壁で3.35m、北側で1.4mを測る。北側には掘削礫を用いた平場の張出し部が馬蹄形状に設けられている。平場の最大幅は2.1mである。

(2) 24号 (Fig.44)

25号の東13mに位置する。チャートの岩盤を長方形に削り出した単純な構造である。開口部の床面幅は1.8m、奥壁付近で1.4m、長さは4.5mである。軸線はN23° Wである。奥壁の高さは1.27mを測る。開口部北には、廃土による凸状の微地形が形成され長軸1.2mの平場が作り出されている。

(3) 25号 (Fig.45)

26号の東15mに位置する。斜面を長軸4m、短軸1.8mに細長く削り出している。軸線はN5° Wである。南壁の高さは2.08mを測り、開口部はそのまま斜面に開いている。最も単純な作りである。

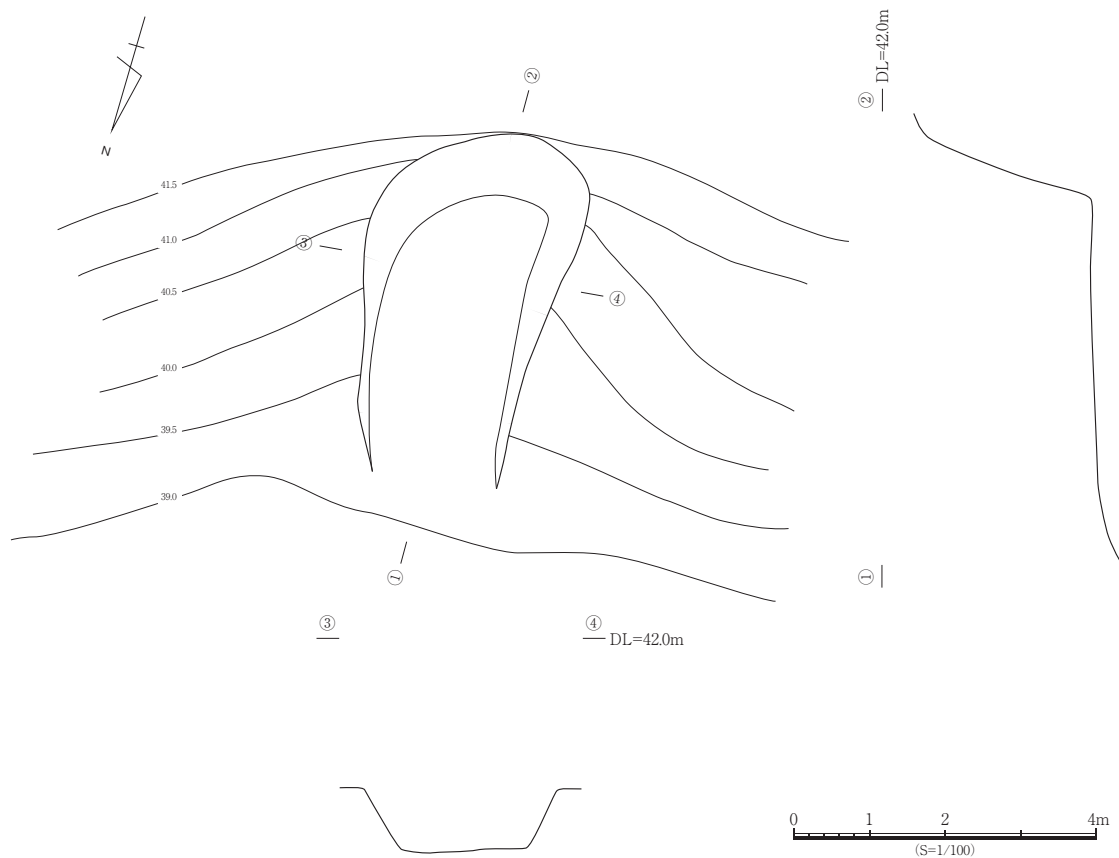


Fig.45 7群25号平面・エレベーション

(4) 26号 (Fig.46)

37号の東10mに位置する。チャートの巨大な岩を方形状に刳り貫いている。床面で東西方向に3.7m、南北に3.4mを測る。長軸方向はN36° Wである。南壁の高さは2.4m、北側は廃土を利用して高さ約0.5mの掩体が設けられている。東側は掘削によって出た礫を積み上げている。

(5) 37号 (Fig.47)

7群の西に位置する。下の軍道との比高差は8mを測る。2-2号や31号と類似の形態を有する。斜面を削って方形の平場を作り、さらに山側に半円形の平場を作っている。方形平場は床面で一辺3.2mの正方形、半円形の張出し部は1.5mを測る。長軸方向はN41° Wである。張出し部の高さは2.08mを測る。張出し部はチャートの岩を掘削している。

8. 8群

4群の南上方に位置し、横穴群の中では最も高いところにある。標高46m前後に開口部を有し4群との比高差は約26mである。横穴4基で構成される。

(1) 27号 (Fig.48 ~ 50)

最も東に位置する。開口部床面の幅は1.2m、奥壁までの長さは10.5m、軸線はN13° Eを示す。構造的に大きく3つに分けることができる。開口部から2.5mは何も設けられていないが、そこから奥

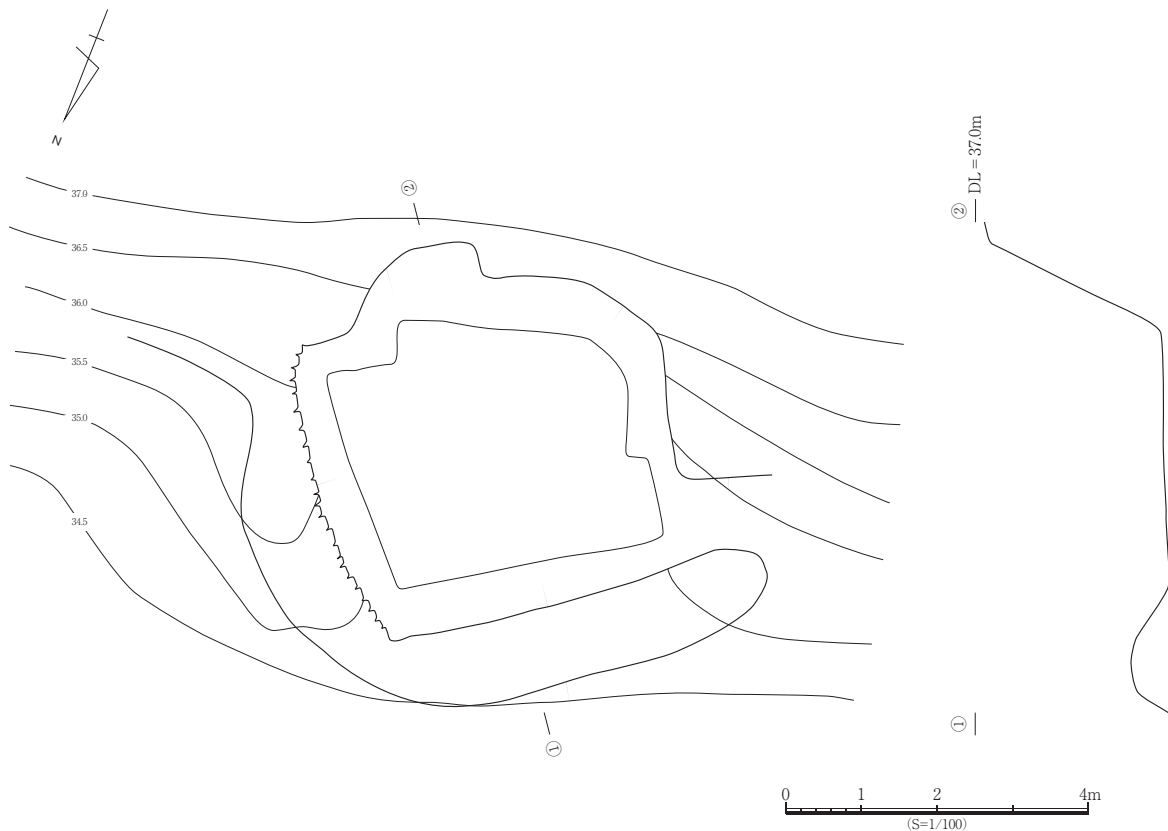


Fig.46 7群26号平面・エレベーション

2.5mは床幅がやや狭くなり東西の壁際には小溝が掘られている。西側の溝は長さ1.5m、幅15cm、深さ4～6cm、東側の溝は長さ2.5m、幅20cm前後、深さ8cm前後を測る。床面には横木溝が4本確認できる。長さ80～90cm、幅10cm前後、深さ8cm前後を測る。また両壁には奥から開口部に向かって傾斜する面をなしている。傾斜面の幅は15～30cm、両側とも南北の比高差は90cmである。この傾斜面はこれまでの横穴にはなかった特徴である。入口付近に扉の支柱穴が見られないことから、遮蔽の為の施設である可能性が高い。

さらにその奥は、長さ5.5m、幅2.0mの長方形を呈し、床面には7本の横木溝が設けられ、そのすべてに横木が残っている。腐食は進行しているが形状を良く留めている。手前側の3本はやや小振りの材が使われているが、他の4本は長さ1.85m、厚さ15cm前後の角材が使われており両小口には長さ15cmの仕口が設けられている。この上に坑木を組んだことが判る。27号の壁には坑木用の溝は掘られていない。遺物はカスガイが13点(105～117)出土している。すべて横木の仕口付近からの出土である。横木と支柱の坑木に打ち付けていたものと考えられる。戦後、坑木は持ち出され、その際捨て置かれたカスガイと横木が今日まで残ったものであろう。天井の高さは2.2mで奥壁から4.8m付近まで残っているが、本来は6m近くあったものと考えられる。開口部の北には、廃土による凸状の微地形が作り出され、長軸4.8mの平場が作られている。

(2) 28号 (Fig.51・52)

27号の西12mにある。開口部の床面幅1.4m、奥壁までの延長7.8m、軸線はN10°Wである。本例も

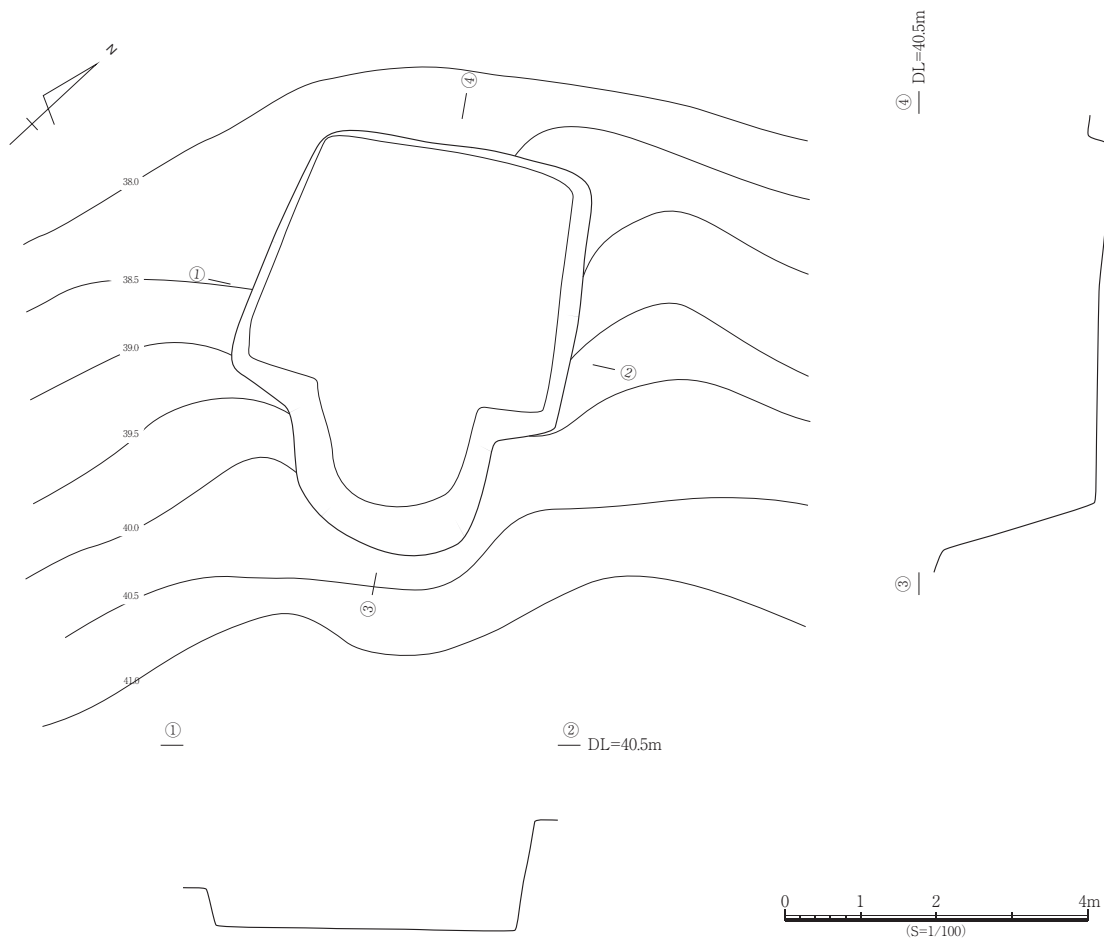


Fig.47 7群37号平面・エレベーション

構造的に3つに分けることができる。まず開口部から2.8mは通路として使われたものと考えられる。27号と異なるところは開口部付近から横木溝が見られることである。長さは1m前後、幅10cm、深さ5cm前後である。2.8mを過ぎたところから左右の壁が大きく広がり、27号で見たような傾斜面が削り出されている。この傾斜面は27号と同様に遮蔽の施設として考えることができる。床面幅は変わらず4本の横木溝が見られる。さらに奥は床面幅が2m、長さ2.5mの隅丸形状の部屋が設けられており、北半分に3本の横木溝が見られる。溝の大きさは、長さ2m、幅10～20cm、深さ10cmを測り通路部のそれに較べて大きい。北端の溝には両端に坑木を受ける仕口を作り出した角材が残存している。奥壁は垂直に立ち上がり3.3mを測る。天井は完全に陥没しているが、本来は部屋を覆う天井部があったものと考えられる。入口の北には廃土によって長軸3.0mの張出し部が作られている。

遺物は部屋と通路奥の床面からカスガイ7点(118～124)、釘1点(125)、ガイシ2点(126・127)が出土している。ガイシは低圧ガイシと呼ばれるもので径3.0cm、高さ4.4cm、上部に溝、中には径0.8cmの止め具孔が貫通している。127には径2.3mmの銅線が巻付けられており円孔には釘が錆び付いている。壁材などに打ち付けられていたものと考えられる。なおガイシ(128)は27号と28号の間で表採したものである。

(3) 29号 (Fig.52)

28号の西20mの谷状地形に作られている。長さ8m前後の横穴であったと考えられるが、天井は完

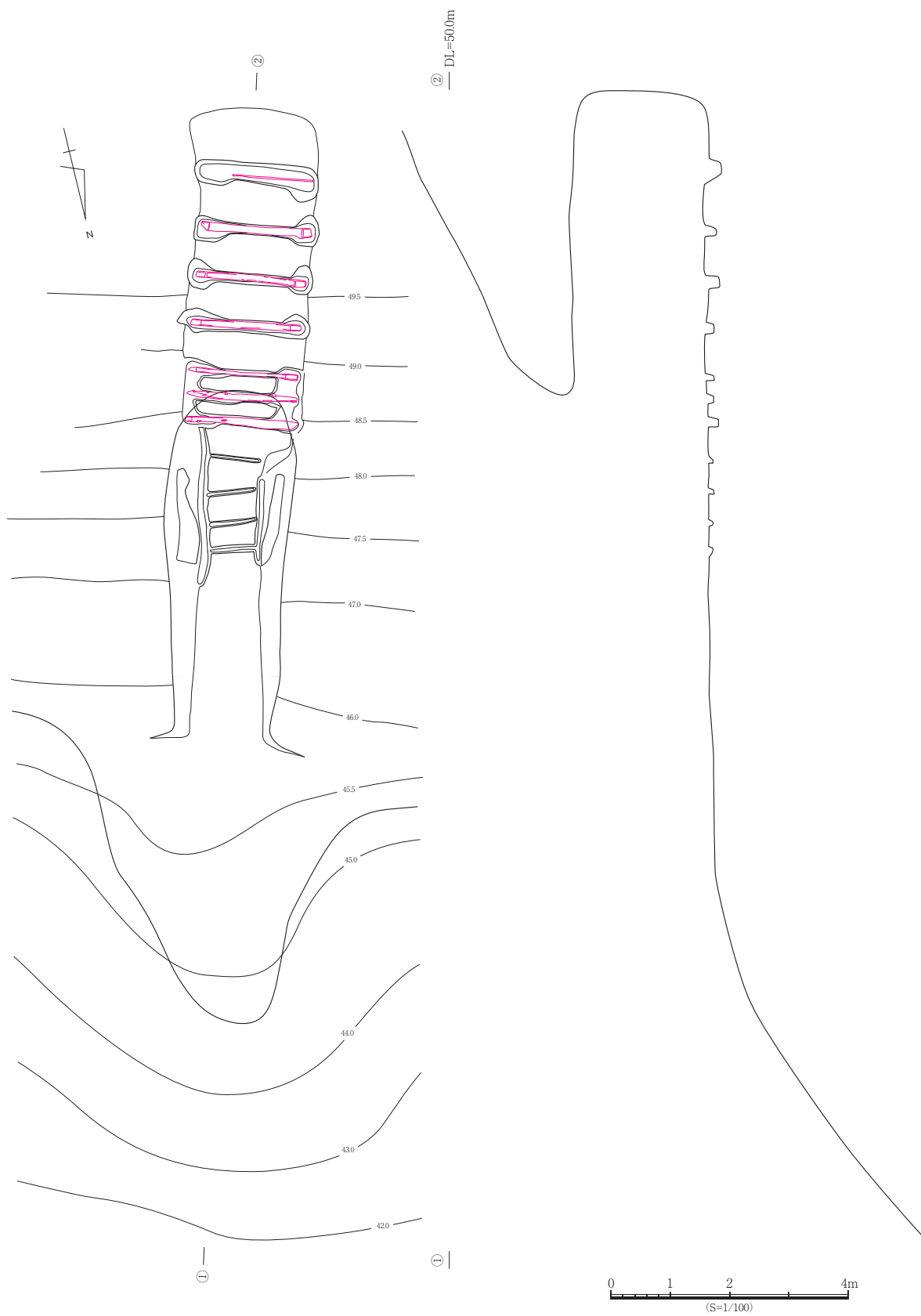


Fig.48 8群27号平面・エレベーション①

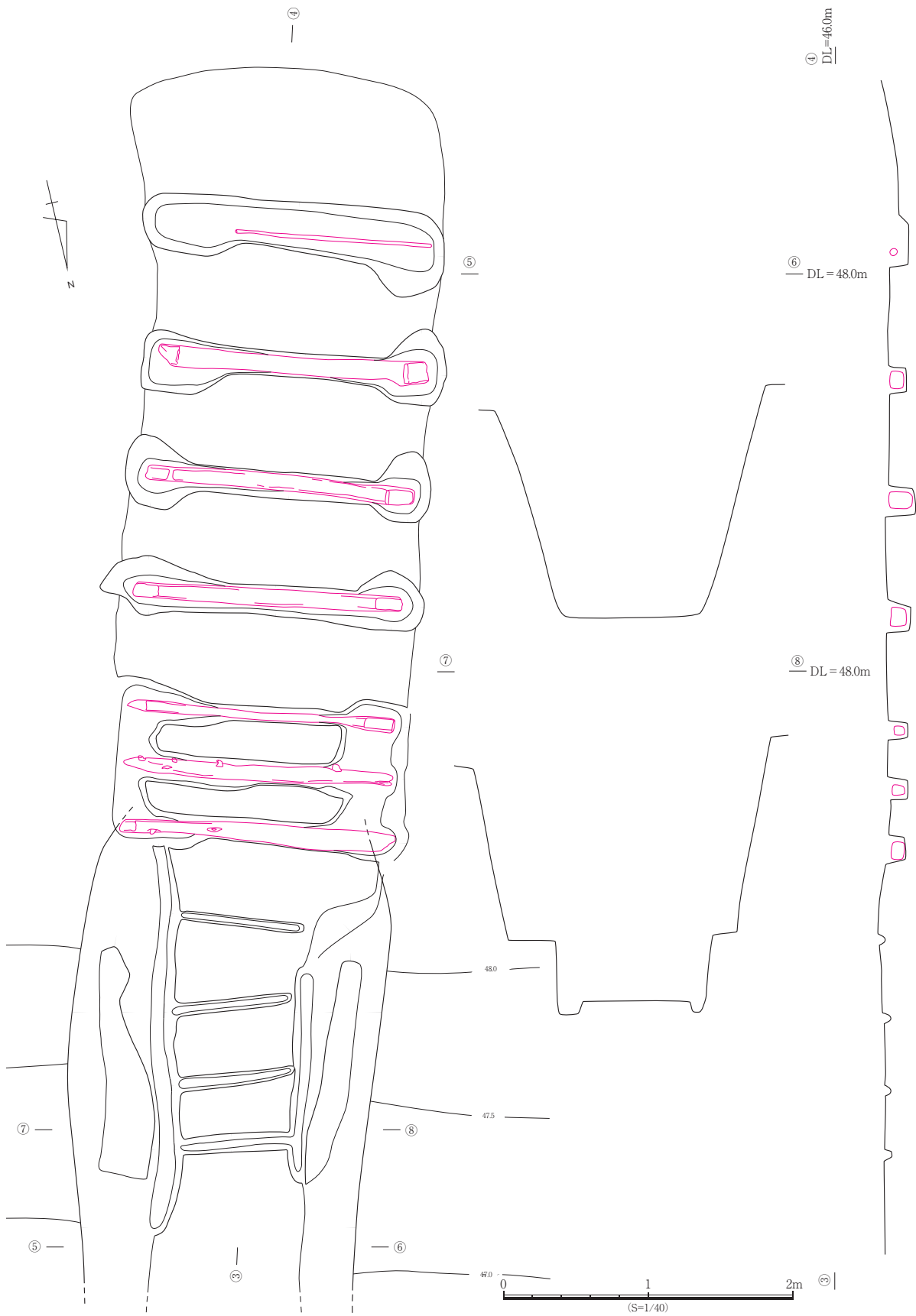


Fig.49 8群27号平面・エレベーション②

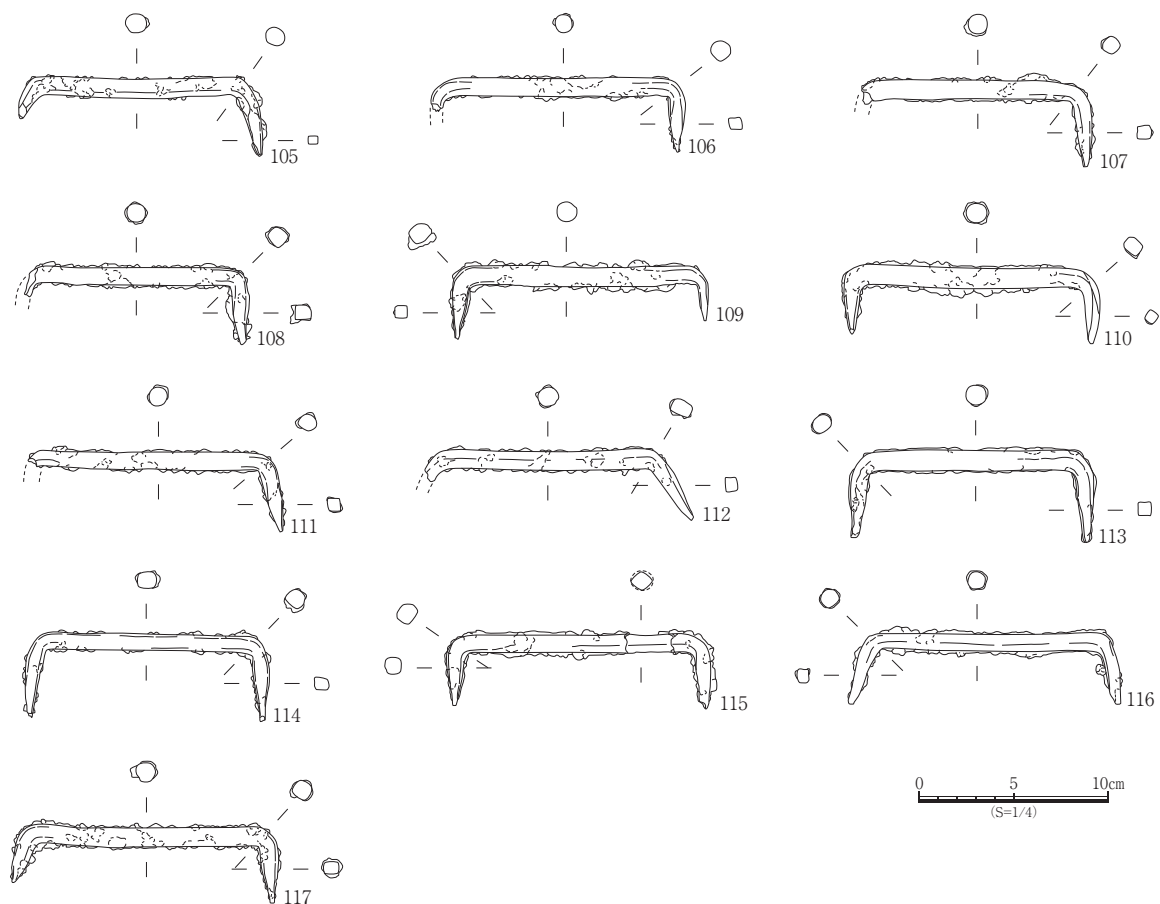


Fig.50 8群27号出土遺物(カスガイ)

全に陥没し、壁の崩落も激しい。軟弱な地盤に掘られており崩落土の除去に際しても壁面崩落があり危険であるため途中で調査を断念せざるを得なかった。ガイシ(129)が、埋土中から出土している。低圧ガイシで頭部の一部が欠けている。径3.2cm、高さ4.5cmを測り、中には釘が錆び付いている。大きく屈曲しているのは、木材に打ち付けられていたのを抜き取った際に曲がったものと考えられる。

(4) 30号(Fig.53)

29号の西15mに位置する。入口部分の床面幅1.6m、奥行き7.0mを測り、軸方向はN5°Eである。入口から5.5mまでは1.6m前後の床面幅を保ち、奥部で床幅2m程の隅丸長形状を呈する。奥壁は僅かに内傾して立ち上がり高さ2.0mを測る。天井はほぼ完全に陥没しているが奥壁にその痕跡を認めることができる。床面、壁共に何ら遺構は見られない。入口北側には廃土による張出し部が作られており、長軸3.5mを測る。床面からカスガイの加工品(130)が出土している。カスガイの一端を再加工している。

9. 3号(Fig.54)

1群の西方70mの尾根上に位置する。長軸12m、短軸9.0m、高さ1.0m程の小墳丘状を呈する。長軸方向はN56°Eである。中央部に一辺2.2m、深さ1.3mの隅丸方形の竪穴を掘り、北西方向から羨道状

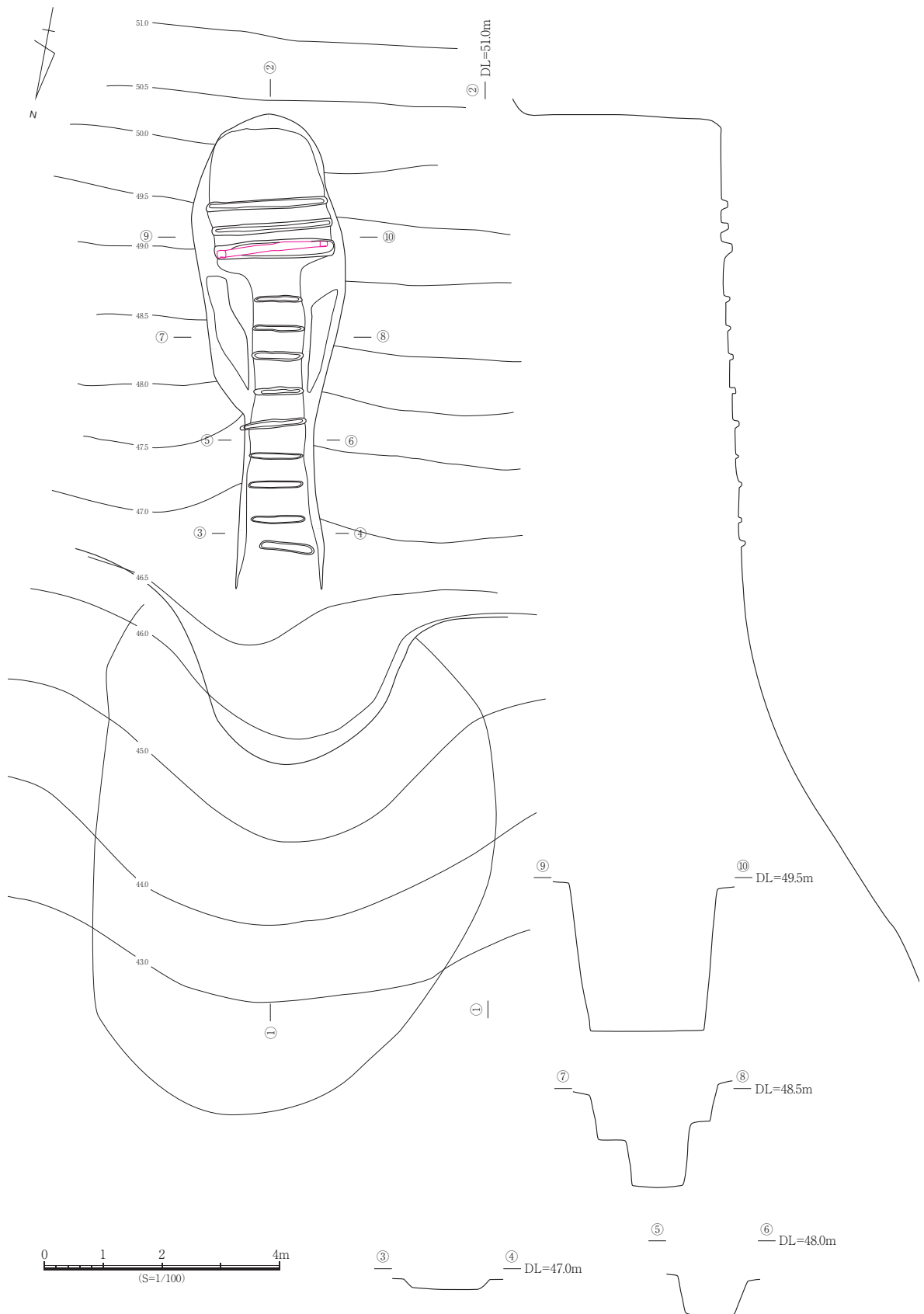


Fig.51 8群28号平面・エレベーション

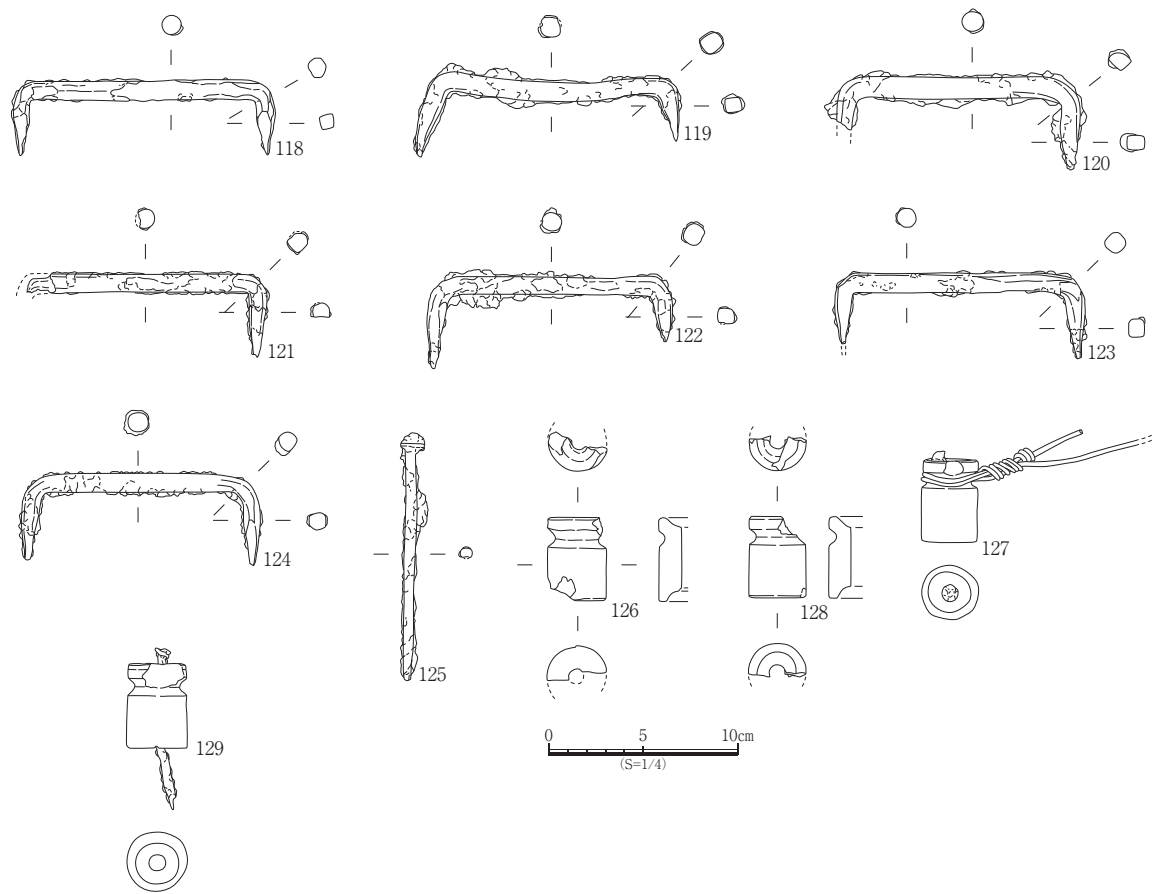


Fig.52 8群28・29号出土遺物

28号(カスガイ 118～124 釘 125 ガイシ 126～128) 29号(ガイシ 129)

の通路が延びている。通路の長さは6.0m、幅0.5～0.8mを測る。竪穴床面の中央部には15cm程の鍵穴状の高まりが見られる。また竪穴の北東側の壁には一辺0.7m、深さ0.8mの方形の掘込みがある。盛土断面観察を行ったところ地山に掘削土を盛って掩体になっていることがわかる。1群と同じ尾根に立地しながら異なった形状を呈する遺構である。後述するように、3号は竪穴の形状から見て重機関銃の銃坐で、方形の掘込みは弾薬置き場と考えられる。

10. 9号 (Fig.55)

5群の下に位置する不整形の土坑状で西方に張出しを持つ。土坑の上端は長軸6.9m、短軸4.3mの不整形を呈し、床面は北西側の一辺が2.3m、南東壁側(山側)は弧状を呈している。深さは南壁の掘削面からは約3m、北側の掘削面からは1.6m前後であるが掘削土を盛り上げた高さ1m程の掩体が作られている。壁は斜めに立ち上がり播鉢状を呈する。張出し部は長さ2mを測り階段状に掘られている。北側には長さ4.5m、床面幅0.6mの通路が設けられ軍道に繋がっている。通路の軸線はN7° Wである。この通路床面と9号本体の床面とは0.9mの段差が見られる。遺物は土坑床面近くの埋土からガラス製品(131)が出土している。先端部が欠落しているがアンプル剤容器である。胴径1.3cm、残存高3.3cmである。



Fig.53 30号平面・エレベーション及び出土遺物(カスガイ)

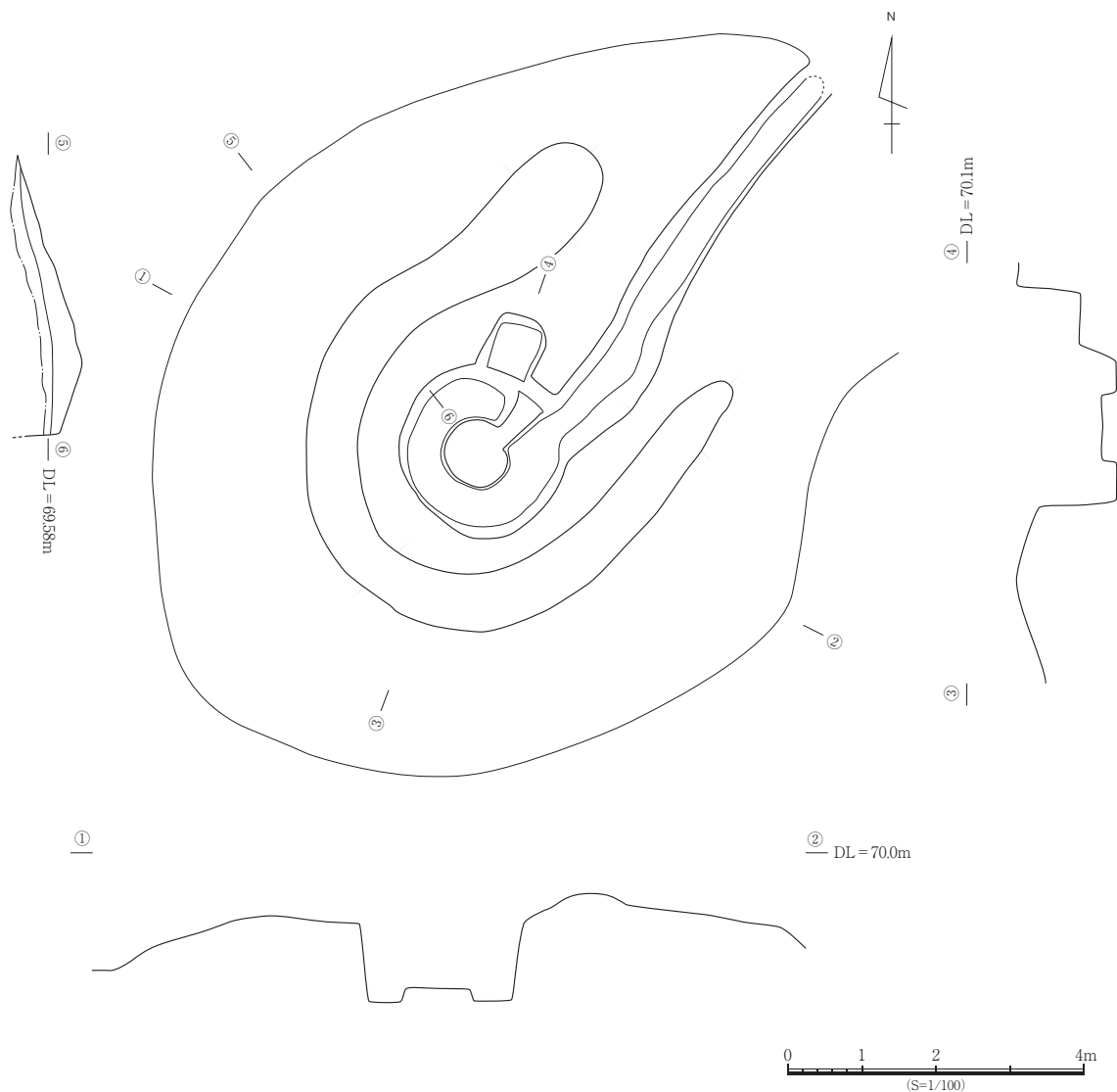


Fig.54 3号平面・エレベーション

11. 22号 (Fig.56)

8号の南で標高30mに位置する。軍道との比高差は8m前後である。円形状の本体部分と西側に突出部、北には通路を持ち構造的には9号と類似している。本体部の径は上端で5m前後、床面は楕円形を呈し長軸3.2m、短軸2.7mを測る。高さは南側で3.3m、北や東側には廃土で掩体が作られている。壁は斜めに立ち上り全体の形状は播鉢状を呈する。突出部は長さ2mで床面は0.8 × 2mの平場が作られており、本体部床面とは35cmの比高差がある。通路は確認延長5m、床面幅で50 ~ 60cmを測り、軸線はN7° Eである。本体床面とは30cmの段差がある。北端は墓地によって切られているが、9号と同じように軍道に繋がっていたものと考えられる。

12. 31号 (Fig.57)

2群に近接している。床面の標高は44mを測り、下の軍道との比高差は5m程である。斜面を削っ

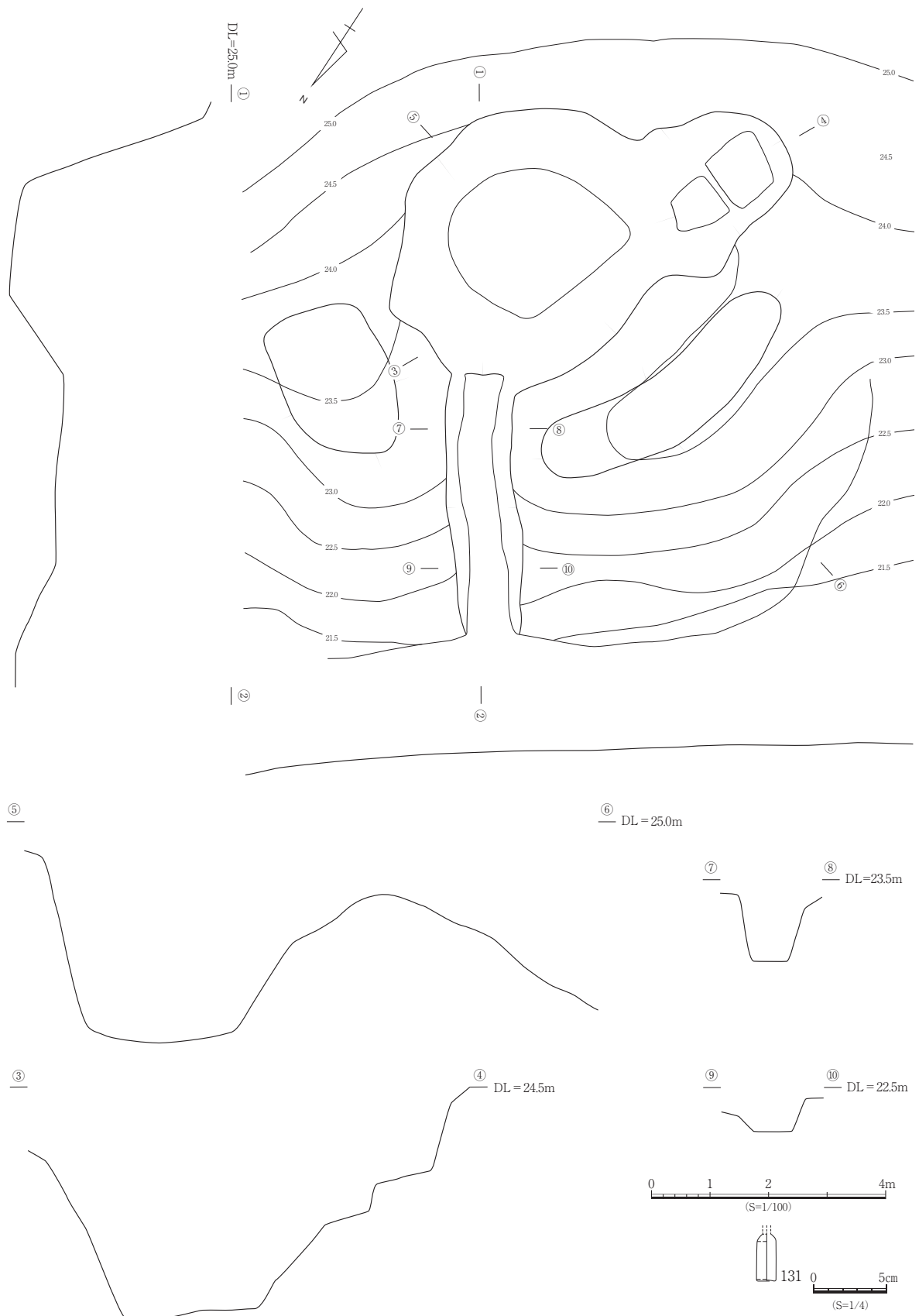


Fig.55 9号平面・エレベーション及び出土遺物(アンプル)



Fig.56 22号平面・エレベーション

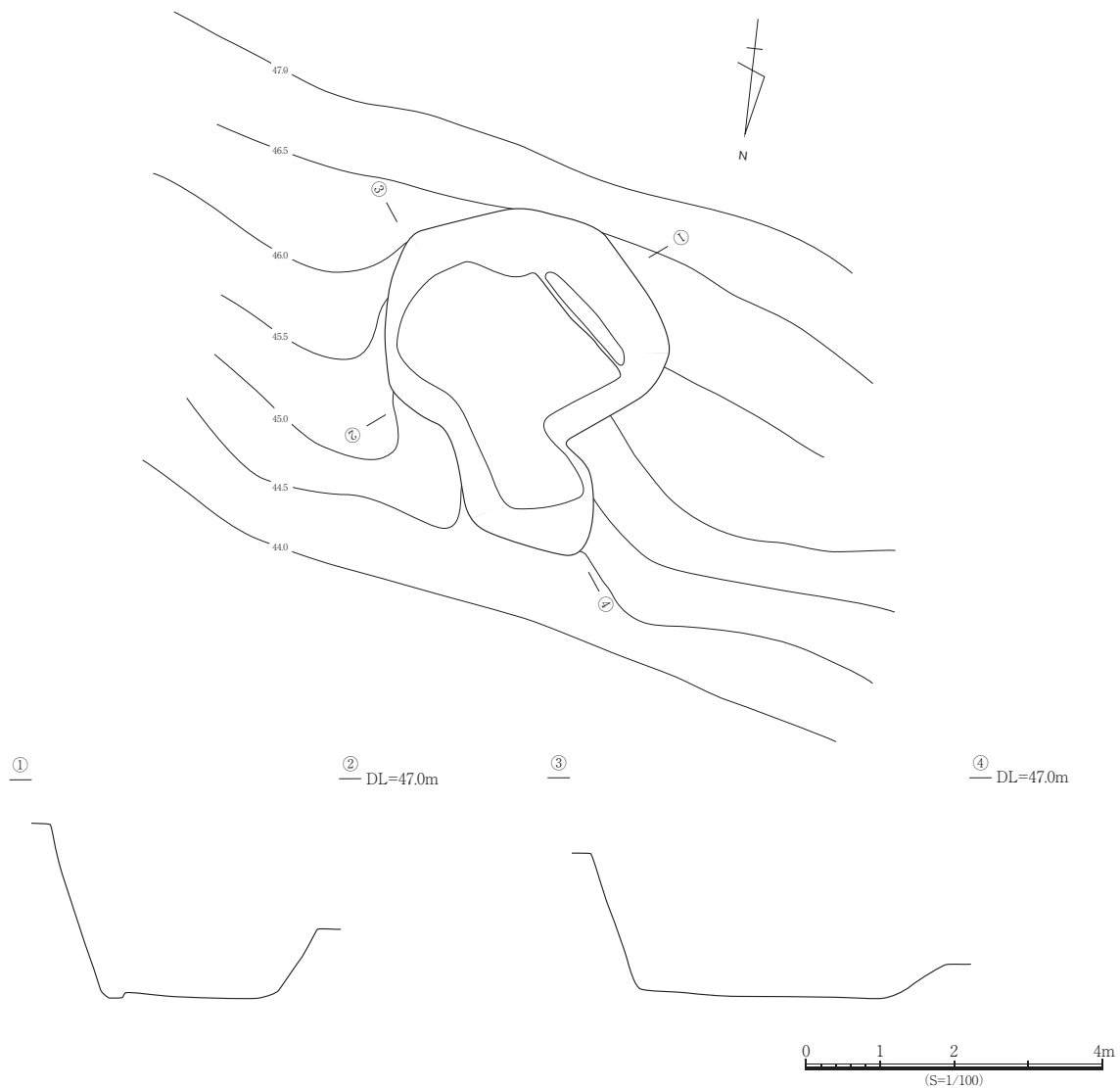


Fig.57 31号平面・エレベーション

て鉤状の平面形を呈する。鉤状の突出部分は入口と考えられる。床面は長軸3.5m、短軸2.3mである。深さは南の山側で2.3m、北側で0.5mである。南壁の下には幅30cm、深さ10cmの溝が掘られている。

13. 32号 (Fig.58)

2群の西方尾根部にあり標高40mを測る。軍道の下に位置し比高差は5mである。床面は長軸3.8m、短軸2.3mの長方形を呈し、長軸線はN54° Eである。南面(山側)に1×1.5mの方形の突出部が作り出され、西北隅には0.6×1.2mの隅丸形状の突出部が見られる。掘込みの深さは山側で2.3m、北側では0.5～0.8mを測る。北側には廃土を盛った掩体が幅1.0～1.5m、高さ0.3～0.5mで巡っている。山側に突出部を作る構造は、2-2号、2-3号、37号と類似している。遺物は床面から十字鍬(132)が出土している。尾部の先端部が摩耗により短くなっている。現存長は41.5cm、島状高まりは6.8cm、頭部の最大幅6.0cm、重さ2,357gである。『野戦築城教範 総則及第一部』⁽²⁾には三種類の「十字くわ」の記載があり本例は、0.43mの「十字くわ」に該当する。

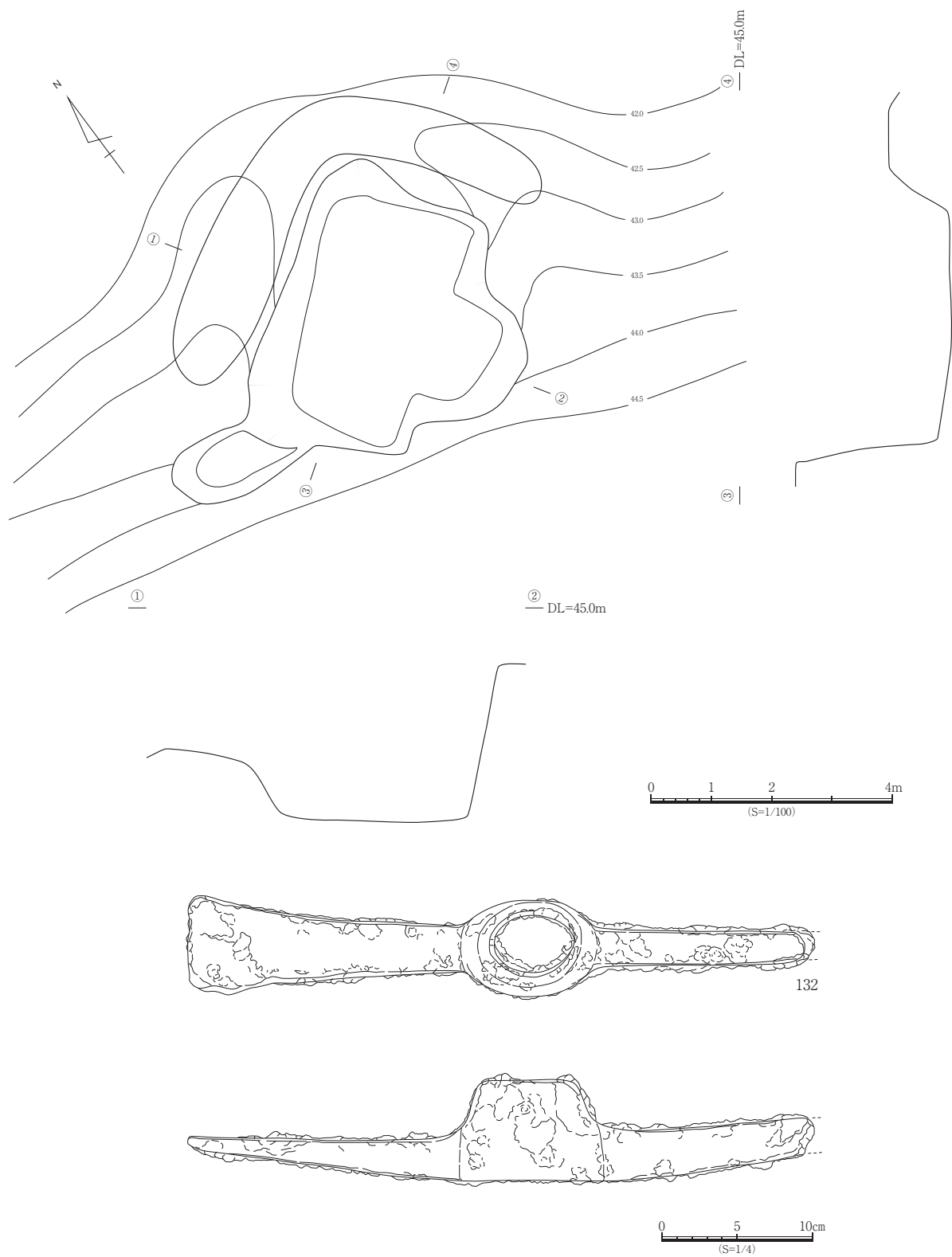


Fig.58 32号平面・エレベーション及び出土遺物(十字鋏)

14. 33号 (Fig.59)

32号の7m西に位置し、5m程高い位置にある。不整形を呈し上端で長軸3.8m、短軸3.7m、床面で

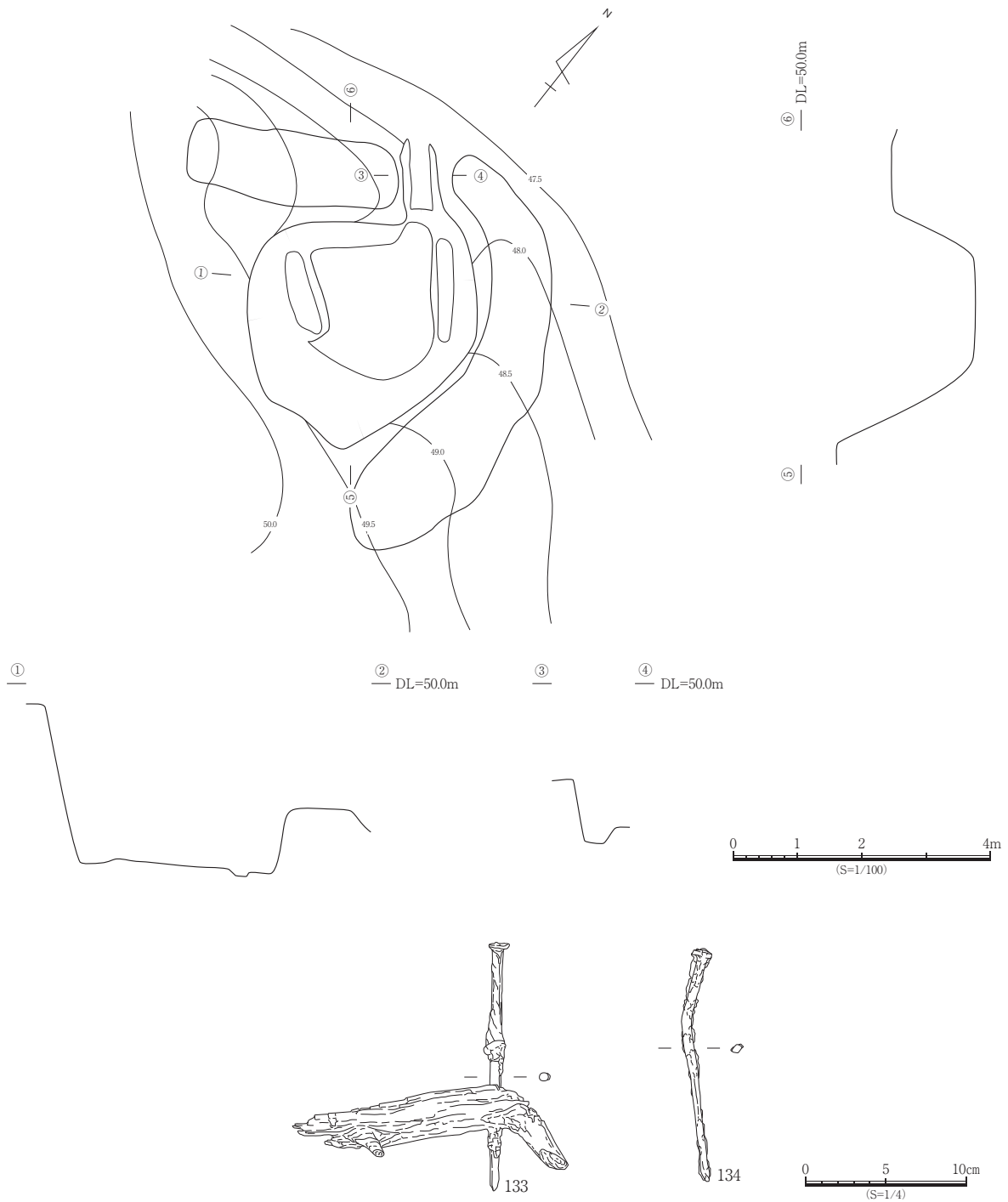


Fig.59 33号平面・エレベーション及び出土遺物(釘)

は長軸1.9m、短軸1.7m、深さは山側で2.2m、反対側では80cm前後を測る。床面には長軸に並行して壁際に溝が設けられている。山側の溝は長さ1.5m、幅50cm、深さ10cm、反対側の溝は長さ1.7m、幅40cm、深さ15cmである。北側には下端幅60cm、長さ1.3mの入口が設けられている。本体部分床面より20cm程高い。東西の壁上には掘削土を盛って掩体が作られている。遺物は埋土中から釘が2点(133・134)出土している。133は長さ14.5cm、頭径1.2cm、身の径4～6mmを測る。木質が付着している。また上半部には木質とは異なる物質が付着している。134は長さ14.4cm、頭径1.2cmを測る。

参考文献

- (1) 教育総監部『坑道陣地ノ参考』1945年
- (2) 陸軍省印刷『野戦築城教範 総則及第一部』1943年

表2 横穴の法量及び特徴

群No.	遺構No.	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	特徴
3群	6号	9.0	2.0	2.0	袖無し
	7号	8.7	通路部1.8 部屋2.0	2.0	両袖、通路と部屋からなる。
	8号	9.0	1.7 ~ 2.2	(2.0)	袖無し
4群	10号	9.6	通路部1.2 部屋2.0	1.9	両袖、通路と部屋からなる。
	11号	(10.0)	不明	不明	両袖、未調査
	12号	(11.0)	(2.5)	不明	未調査
	13号	(10.0)	不明	不明	未調査
5群	19号	10.5	1.0 ~ 2.0	(2.0)	袖無し、通路と部屋からなり、部屋床は一段低い
	20号	7.3	1.0 ~ 2.0	不明	〃
	21号	8.0	1.8	不明	袖無し
6群	14号	16.5	1.25	2.0	〃
	15号	12.3	1.1 ~ 1.2	1.8	〃
	16号	12.3	1.3 ~ 1.4	2.0	〃
	17号	10.1	1.1 ~ 1.3	2.0	〃
	18号	14.5	1.2	2.0	〃
8群	27号	10.5	通路部1.2 部屋2.0	2.2	両袖、通路と部屋からなる。通路中程の両壁に斜面部あり
	28号	7.8	通路部1.2 部屋2.0	(2.0)	〃
	29号	(8.0)	不明	不明	
	30号	7.0	1.6	2.0	袖無し

()は推定

表3 カスガイ観察表

図版番号	出土地点	長さ(cm)	高さ(cm)	背部径(cm)	重さ(g)	背部断面形	分類	備考
1	1-6号脇から集中	13.6	4.1	0.9	81.6	円形	小	
2	〃	13	4.5	1	79.4	〃	〃	
3	〃	13	4.8	0.9	79.3	〃	〃	
4	〃	12.4	5	1	72.5	〃	〃	
5	〃	13.6	4	1	86.1	〃	〃	
6	〃	13.3	4.5	0.9	74.4	〃	〃	
7	〃	12.7	4.4	1	84.7	〃	〃	
8	〃	12.6	4.6	1	80.1	〃	〃	
9	〃	12.9	4.9	1	82.4	〃	〃	
15	交通壕K1	20.1	6.5	1.1	217.2	方形	大	
17	坑道A区	17.4	6.1	1.1	182.9	〃	中	
18	〃	19.6	5.7	1.2	216	円形	大	
19	〃	19.5	5.7	1.3	225.5	〃	〃	
31	坑道北入口採集品	18.9	6	1.3	205.9	〃	中	
36	坑道C区	20.3	6	1.2	245.1	〃	大	
37	坑道D区	19.9	6.2	1.3	224.4	〃	〃	
38	〃	15.9	6	1.4	155.7	方形	中	
44	坑道F区	19.7	5.4	1.1	187.4	円形	大	
45	〃	25	5.5	1.2	244.6	〃	〃	
46	〃	25.6	6.1	1.3	270.4	〃	〃	
47	〃	不明	不明	1.1	197.1	〃		
48	〃	19.2	6.6	1.2	191.6	〃	大	
49	2-2号	19.4	6.1	1.4	199.4	〃	〃	左右非対称
50	10号	(13.5)	(4)	1	79.6	〃	小	
51	〃	12.8	4.7	1	80	〃	〃	左右非対称
52	〃	12.7	4.5	0.9	90.2	〃	〃	
53	19号	13.5	4.0	0.9	86.4	〃	〃	
54	〃	13.1	4.5	1.1	87.2	〃	〃	
55	〃	13.8	4.1	1	88.9	〃	〃	
56	〃	13.2	4.1	1	74.6	〃	〃	
57	14号	(21.9)	(5.5)	1.3	182.3	方形	大	
58	〃	22.9	5	1	182	〃	〃	
103	16号	16.2	4.4	0.8	66.6	円形	中	
105	27号	(12.9)	4.2	1	(78.6)	〃	小	左右非対称
106	〃	13.4	3.9	1	(80)	〃	〃	
107	〃	12.1	4.6	1	68	〃	〃	
108	〃	11.8	4.2	1	70.1	〃	〃	
109	〃	13.5	3.9	1	80.5	〃	〃	左右非対称
110	〃	13.5	4.2	1	83	〃	〃	
111	〃	(13.4)	4.3	1	70.9	〃	〃	
112	〃	(13)	(4.2)	1	(85)	〃	〃	
113	〃	12.9	4.9	1.1	92.9	〃	〃	
114	〃	12.9	4.8	0.9	80.5	方形	〃	
115	〃	12.2	4.1	0.8	90.2	〃	〃	
116	〃	14.4	3.8	0.9	72.9	円形	中	
117	〃	14.1	4.1	1	87.2	〃	〃	
118	28号	13.9	4	1	89.5	〃	小	
119	〃	13.9	4.5	1	88.3	方形	〃	左右非対称
120	〃	12.8	5	1.2	82	円形	〃	
121	〃	(13.5)	4.4	1	(70)	〃	〃	
122	〃	13	4.9	1	74.3	〃	〃	左右非対称
123	〃	13.3	4.6	1	83.9	〃	〃	
124	〃	12.6	4.6	1	82	〃	〃	
130	30号	不明	(5.3)	1.1	不明	〃		釘に転用

()は推定

第Ⅳ章 総括

向山戦争遺跡で確認された遺構・遺物について具体的に見てきた。各遺構の立地や形態の差異は、「本土決戦」陣地としての機能や性格の違いによるものと考えられる。これらの遺構の機能や性格が判れば、ここでどのような戦闘が行われようとしていたのか、高知平野で数多く作られた陣地の中でどのような役割を担っていたのかということをはっきりとすることができよう。このことは同時に、正史としてこれまでほとんど顧みられることのなかった「本土決戦」の実相に迫り、その空白を埋めるといふ点からも重要な意義を持つものである。

ここでは尾根部分、坑道、北斜面部の三地点に展開する遺構と遺物について、形態や構造上の特徴を抽出し、その機能や性格、遺構の組み合わせなどから各地点が担っていた役割を明らかにしたい。僅かに残されている戦時中の資料や証言等を援用し、他地域の調査成果も参考にしながら向山戦争遺跡から見えてくる「本土決戦」陣地の具体像に少しでも迫ってみたい。その上で、「本土決戦」準備下の高知平野について言及したい。

1. 向山戦争遺跡の具体像

(1) 遺構

① 尾根部分の遺構

竪坑状遺構や交通壕などが密集する1群と3号が展開する。

(a) 1群

竪坑4基(1-1・2・6・7号)とそれらを繋ぐ交通壕8本(K1～8号)、退避坑5基(1-3～5・8・9号)、その他(1-10・11号)の計19個の遺構から構成されている。すでに述べたように尾根の稜線上に位置する竪坑4基が主要遺構であり、その形状から判断して観測所とすることができる。1-10号と1-11号の小土坑は、観測所を守るための小銃掩体と考えられる。尾根上からは南東方向3kmに海軍の飛行場、南は海岸に続く平野部を見通すことができる。

1945年7月以降に作成されたと見られる「高知方面配備要圖」(Fig.60 以下配備要図)⁽¹⁾によれば、この付近は「決戦師団」とされる第205師団に属する各部隊が前方展開する位置にある。第205師団は野砲兵連隊、迫撃砲連隊を有していることから、これら砲兵部隊の観測所であったことが考えられる。「敵」が上陸し、沿岸部で戦闘が始まれば、北斜面部から交通壕を通過して観測所に入り、眼下の「敵」の動きや着弾観測をして背後に陣取る砲兵隊の「目」となる部署である。

(b) 3号

1群の西70mの地点に単独で存在する。すでに述べたように重機関銃の銃座であり、立地からして対空機関銃の銃座であろう。類似例は、陸軍前橋飛行場跡に隣接する引間松葉遺跡(312号)や調布飛行場に近い富士見町遺跡などに求めることができる。前者は径1.7m前後、後者は3.0mを測る。菊池実氏は、前者を92式重機関銃座に後者を高射機関砲座に比定している⁽²⁾。本例は、径2m前後であることから92式重機関銃用の可能性が高い。引間松葉遺跡や富士見町遺跡例は、床面に掘り残した銃座が円形であるのに対して、本例は鍵穴状を呈している。この違いが何に起因するものか類例の増加を待って検討しなければならない。

② 坑道

坑道は当遺跡の中で最も大きな遺構であり、陣地の中枢を占めていたものと考えられる。延長77mの貫通坑と作戦室と考えられる部屋、それらを繋ぐ通路、掩砲所、南側入口には野砲掩体と考えられる方形坑が設けられている。谷部から谷部へ抜けているのは死角を利用するためであり、一直線に掘らずに南口近くで50度屈曲しているのも南側の「敵」を意識した配慮であると考えられる。既に見たように貫通坑や通路の床面、壁には90cm間隔に壕を支える坑木と坑木を載せるための横木を敷く掘込みが規則正しく認められた。旧陸軍の「坑道(地下通路)」にはいくつかの種類があるが、高さ1.9m、幅2mの本例は「重要ナル幹線ニ用ウ」とされる「大本坑道」に属する⁽³⁾。また、坑道については当時の目撃証言も得ることができた⁽⁴⁾。それによると天井・壁など四面に板が張られていたとのことである。カスガイや釘は坑木と横梁、板張りを巡らすのに用いられたのである。木材や資材の多くは、敗戦後に持ち出されたため出土遺物が少ない。これによって坑内の崩落が促進されたのである。

貫通坑の調査には沖縄県の南風原陸軍病院壕群(以下南風原壕)の調査報告書が参考になった。調査を担当した池田榮史は、「壕の構築段階、使用段階、使用停止段階、その後現在までの段階の時間的推移に沿った情報が得られた。」と指摘し、調査方法や観察視点についても大変示唆に富む指摘が数多くなされている⁽⁵⁾。向山戦争遺跡の場合は、南風原壕と違い実際には使用されていないので「使用段階」は欠如する。ここでは、構築段階と廃棄段階、その後現在までの段階の3段階の「面」の確認が可能となろう。そしてこの廃棄段階というのは、敗戦によって機能停止の状態に陥った段階ではなく、その後一定の時間が経過し人々が復興と再生のために壕内の資材を取り出した後の状況を示しているのである。調査に入って崩落土を除去した状況は、木材など資材を取り出した後の坑道が廃棄された段階である。しかし坑道の構築方法を復元することは可能である。カスガイや釘は木柱や横梁・壁板などに打ち付けられていたものであり、センサー棒は、発破をかける時に岩盤に火薬を詰める穴を開ける道具である。部屋の壁に残る鋏の跡は壁面を整えた痕跡である。

坑道はほとんど水平に掘られている。南風原壕は、壕の中央部がやや高くなって排水への考慮がなされていると報告されているが、向山の場合は天井部崩落のため肝心の中央部床面と北入口付近床面の本来の高さを知ることができなかった。また南風原壕は、出入口に掘り出した土砂を利用した掩体状の土手が作られているが、向山の場合はそのような施設は認められなかった。しかしながら共通点も指摘できる。坑木の間隔や幅、高さなどは南風原壕と一致している。坑道南入口は、野砲掩体の可能性を指摘したが、それには元野砲兵第205連隊射手榑崎彰一の証言を参考にした⁽⁶⁾。この壕が実際に榑崎らによって野砲を据えられた壕であるかどうかを判断することはできないが、類似例として捉えることはできよう。

坑道は、すでに指摘したように規模から見て「大本坑道」に比定される。この地点は、歩兵第507連隊等の展開予定地域であり、北部に配備されている部隊がこの坑道を通れば、東に迂回せずに稲生方面の平野部に進出できるのである。

③ 北斜面部の遺構

2～8群が展開し、横穴や竪穴状遺構、土坑などから構成される。必要によって形態分類も行いながら特徴の抽出に務めたい。

(a) 横穴

未完成と考えられる4・5号を除いて19基の横穴を確認した。この内、調査区外にある4群の11～13号、8群の29号以外の15基について調査を実施した。多くの場合、入口付近に扉用と考えられる柱穴を有し内部は天井を支える坑木や横木を埋め込む溝が掘られているが、坑道のそれに較べると小さい。北に開口し細長い形状を基本形とするが部屋の有無などによって以下のように分類できる。

A類：入口から奥壁までほとんど同一幅を有する単純なタイプである。幅/長さが1/10以上のA I類と1/10以下のA II類に細分される。A I類は6基(6・8・19～21・30号)、A II類は5基(14～18号)認められる。

B類：奥部が通路部より広がっているもの。単純な両袖構造のB I類と部屋の手前の両壁に傾斜した面を有するB II類に細分される。B I類は2基(7・10号)、B II類も2基(27・28号)見られた。

各群と各類との関係を見れば、3群はA I類とB I類で構成され、4群はB I類の10号のみの調査で他は未調査であるが、現況からはA I類とB I類が存在するものと考えられる。5群はA I類のみ、6群はA II類のみで構成されている。8群はA I類とB II類から構成されているが、B II類は8群以外では認められない。これらの横穴が実際にどのように運用されていたのか現段階では明らかになし得ないが、各横穴の形態や構造の違いは、横穴の機能や性格の差異に基づいて計画的な配置がなされていたことを示している。

(b) 竪穴状遺構

2-2・3、9、22、23、26、31～33、37号の10基が該当し、以下に分類できる。

C類：規模が大きく断面擂鉢状を呈し、小さな通路が付属する(9・22号)。

D類：長軸は3～4m前後を測り山側に半月状の突出部を持つという構造上の特徴を有する。

(2-2・3号、37号)

E類：長軸あるいは一辺が3m前後以下の小規模な遺構である(23・26・31～33号)。

C類は戦時中の写真を参考にすれば迫撃砲陣地を想定することができるが、今後詳細な検討が必要である。D・E類の使用目的については現状では不明と言わざるを得ない。D類は特徴的な構造を有していることから一致した機能を持っているものと容易に推定されるが、実態を捉えられないのは残念である。

(c) 平場遺構

掘込みの浅い遺構や斜面を水平に削ったもので断面L字状を呈する。24・25号が該当する。

(d) 土坑状遺構

小規模な掘込みである。2-5号が該当する。軍道が大きく屈曲するところに位置し、2群や坑道に近いところから歩哨関連の遺構である可能性がある。

これらの諸遺の個々の機能について明らかにすることは現時点では難しいが、居住用、保管庫、掩砲所、砲座などが考えられよう。先に触れた迫撃205連隊は12cm迫撃砲36門を擁しており⁽⁷⁾、配備要図記載のI MM(中迫撃砲第一大隊)の展開位置にある。したがって北斜面部には一個大隊18門の迫撃砲が置かれる予定であったことから、かなりの遺構が迫撃砲陣地と見ることができよう。観測所からの観測値によって山越えに迫撃砲で「敵」を迎え撃つ布陣である。

今次調査区は4,000㎡であったが陣地は、さらに西に向かって広がっている。しかし遺構の分布密

度はかなり低い。さらに西方の第11師団司令部付近では鉢伏山を中心に多くの陣地遺構が認められるようになる。

(2) 遺物

遺物の出土は総じて少ない。それは当陣地が使用されなかったことに起因するところが大きいと考えられる。遺物は、陣地構築のための資材(カスガイ、釘、木材)、陣地構築のための道具(釘抜き槌、センサン棒、十字鋏)、電気や電話関連機材(ガイシ、銅線)、戦争を彷彿させるものとしては薬莖、1点ではあるがアンプル剤が出土している。これらの他に用途不明のブリキ板や金具が出土している。

遺構からの遺物はその出土状況から見て、先に述べた廃棄段階の状況を示しており、本来の陣地の姿をこれら遺物の出土状況から直ちに復元することは難しい。しかしながらこれらの遺物から陣地の構造や構築方法を復元することは可能である。カスガイや釘は坑道や横穴で坑木や壁材などに供せられたものであり、センサン棒の出土は発破も用いて掘削が進められたことを示している。ガイシや銅線、ソケットの出土は電気や電話線の引き込みが行われていたことを裏付けるものである。

ここでは出土量の最も多かったカスガイについて少し触れておきたい。54点を数えるが、本来は数百倍、あるいはそれ以上のものが使われていたことは間違いない。54点中、52点については大きさから大型・中型・小型の3つに分けることができる。大型は長さ19cm以上、中型は14～18cm、小型は14cm未満のものである。表3に示したように大型12本、中型6本、小型34本である。1群からは交通壕K1出土以外はすべて小型、坑道からは小型が見られず中型(3本)と大型(8本)で占められている。横穴からは小型が中心に出土している。これは、カスガイの大きさと遺構とに関連があったことが認められ、対象物によって使い分けられていたことを示している。

今一つカスガイの特徴として、左右非対称のものが一割程度みられることや転用品の存在を挙げることができる。今次調査時に、元兵士から当陣地構築に際して現地でカスガイを製作していたという証言が得られている⁽⁸⁾が、そのことと無関係ではないと考えられる。

(3) 向山戦争遺跡の具体像

今次調査によって向山戦争遺跡は、尾根上の観測所と防空陣地、北斜面の密集した遺構群、山の中腹を貫く坑道によって構成された陣地であることが明らかとなった。遺構や残された遺物から陣地の構造や構築方法を一定復元することはできたが、発掘調査そのものから各遺構(陣地)の性格や機能について明らかにすることは難しい。これにはこの種の資料の蓄積が余りにも僅少であることに大きな原因があるものと考えられる。しかしながら戦時中の資料や証言などを参照にすればかなり実態を復元することが可能となった。北斜面の遺構群は、迫撃砲陣地であり尾根の遺構群はそれらと一体となった観測所として捉えることができる。貫通坑道は、内陸部から平野南部に部隊を移動させる地下通路としての機能が想定される。

後述するように当時大本営陸軍部は、「本土決戦」に際して沿岸決戦思想を強固にしており、高知平野においてもそのような指導が強力になされていた。すなわち沿岸部に「拘束兵団」を配備して、「敵」を沿岸部で迎え撃ち、内陸部に置かれた「決戦兵団」(打撃兵団)が駆けつけて「敵」を殲滅するという作戦である⁽⁹⁾。高知平野の場合、配備要図のように「拘束兵団」は11師団、「決戦兵団」は205師団や155師団がそれに該当する。向山戦争遺跡は、205師団隷下部隊が使う予定であった陣地跡であり、海岸部に残る遺跡と相まって高知平野で行われようとしていた「本土決戦」の具体像に迫ることのできる遺跡である。

2. 「本土決戦」準備下における高知平野

大戦末期、「本土決戦」準備が進められる中で高知平野は作戦上どのような位置を占めていたのかということに触れてまとめとしたい。高知平野で本土決戦準備が始まるのは1944年末からであるが、1945年1月以降に本格化して行く。高知平野は南九州や関東方面などともに米軍の上陸の可能性が考えられていたことから多くの兵力が投入されることになる。1945年2月には最初の本土決戦部隊である第155師団(護土部隊)が配備される。4月15日に第二総軍司令部(以下総軍)が広島に置かれると四国はその隷下に入り第55軍(偕部隊)が編成され、その司令部が土佐山田町新改に置かれた。5月初頭における総軍の情勢判断は以下のようなものであった。「敵米軍は・・・沖縄作戦後直路帝国本土に迫りくるならん。・・・九州及び四国に対する作戦の目的は、航空及び海上の作戦大基地を獲得するにありて、これを根拠として関東地方に対し最後の決戦を求むるの策に出づべし。・・・四国はわが兵力を迅速に集中すること困難にして用兵もまた極めて窮屈、換言せば孤島性格を多分に有しあるをもって、敵は比較的容易に來攻し得。また土佐平野付近の飛行場を入手せば、戦闘機等の小型機も容易に関東地方迄飛行し得るものと思ふ。攻撃開始の時期はにわかに判断し得ざるも、沖縄戦の終末には引き続き実行可能なるべく、従って六月末以降においては随時生起する公算大ナルと判断される」¹⁰⁰、これに基づいて、総軍は南九州と共に南四国への米軍上陸を想定して、高知平野への兵力の増強と強力な指導を行うのである。4月から5月にかけて第11師団(錦部隊)が「満州」から高知入りし、6月後半には九州に配備予定であった第205師団(安芸部隊)が投入される。第55軍は最終的に4個師団を基幹とするが、3個師団が高知平野に配置されていた。8月15日現在、四国には120,345人の陸軍部隊がおり、その内約7万人が高知平野に、分けても東部の香長平野に集中していたのである¹⁰¹。これに海軍部隊を合わせると8万人は下らない兵力であった。大本營が6月に作成した「各要域ニ於ケル一軒当り戦力密度概見表」¹⁰²によれば、歩兵大隊0.9/1km(平均0.5)と高知正面が最大の密度を有しており、重機関銃の比率も南九州や相模湾正面が6～9であるのに対して高知正面は11.5と群を抜いて高い数字を示している。しかしながら兵隊たちが十分な装備を持っていたわけではなかった。部隊によって差はあるが、草鞋履き、竹の水筒をつり下げ、小銃はおろか帯剣すらない兵士が多くいたのである¹⁰³。

第55軍は浦戸湾から物部川の間を決戦地域として配備要図に見られるような布陣を行っていたのである。向山戦争遺跡はその一部を構成していた。これらの陣地は実際に使われることはなかった。しかし「本土決戦」を想定した時、このようないわば土作りの陣地が、果たしてどれほどの効果があったのであろうか。地形を変える程の強力な艦砲射撃や爆撃に対してはほとんど耐えることはできないと考えざるを得ない。多くの制約はありながらも、発掘調査を通して高知平野で行われようとしていた「本土決戦」の実相に触れることができたのではなかろうか。

陣地構築が本格化した4月以降、沖縄では県民を巻き込んだ阿鼻叫喚の死闘が繰り広げられていた。各都市は焦土と化し、質量ともに勝る連合軍に対して敗戦が必定であるころは軍指導部にもわかっていた。それでもこのような陣地を構築し続けなければならなかったところに「本土決戦」の本質が横たわってよう。「本土決戦」陣地は、日本が世界を相手に始めた戦争の最後の姿を今日に伝える遺構であり、さらには日本が明治維新以来、近代化を進めるにあたって採用した「富国強兵」路線の終着点の姿として捉えることができよう。敗戦の混乱と復興、いわゆる高度経済成長の中では

とんど顧みられることがなかった陣地遺構は、雑草に覆われゴミ捨て場となっているものも少なくない。しかしこれらの記録を抜きにして日本近代史を理解することはできない⁽¹⁴⁾。戦争遺跡の本格的な調査はまだ緒に着いたばかりであるが、戦争遺跡への取り組みは今後日本考古学が歴史科学としての主体性を維持、発展させる要件でもあろう。

註及び参考文献

- (1) 防衛省防衛研究所図書館蔵「高知方面配備要圖」 1945年7月以降に作成されたものと考えられる。
- (2) 菊池実『戦争遺跡の発掘 陸軍前橋飛行場』新泉社2008年
- (3) 『坑道陣地ノ参考』教育總監部1945年
- (4) 溝渕進一郎氏の証言 当時国民学校6年であった溝渕氏は、母親と一緒に兵隊の慰問のために坑道陣地の前まで来たことがあった。その時、偶然に壕内の様子が目に入り、内部に板を張っていたことを記憶されている(2008年11月6日)。
- (5) 池田榮史『南風原陸軍病院壕群 I』沖縄県南風原町教育委員会2000年
- (6) 榑崎彰一氏の証言 榑崎氏は野砲兵205連隊(安芸15050部隊)に属し1945年6月末頃に高知入りし、現在の南国市植田付近で毎日陣地構築用の木材切り出し作業を行っていたが、8月13日深夜に出撃命令があり完全武装で南に移動し、稲生に廻り南側から山を登り、すでに別の部隊が作ってあった壕に38年式野砲を据えたと証言している(2003年2月9日)。向山の南は稲生であり遺跡付近に据えた可能性もある。
- (7) 防衛庁戦史室「決号作戦準備の発動と基礎体制の整備」『戦史叢書 本土決戦準備(2)』朝雲新聞社
- (8) 西村太郎氏の証言 西村氏は、向山戦争遺跡の発掘成果を報じた2008年12月6日付けの新聞記事に接し、当時を回想してご子息の西村時宗氏に「当時、ここで元鍛冶職であった兵士とともにカスガイを打った」と話している。
- (9) (7)に同じ
- (10) (7)に同じ
- (11) 防衛省防衛研究所図書館蔵「四国軍管区復員関係資料綴」
- (12) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部(10)』朝雲新聞社1975年
- (13) 茶園義男『本土決戦 四国防衛軍 下巻』徳島県出版文化協会1971年
- (14) 出原恵三「向山遺跡『本土決戦』陣地跡の調査」『季刊考古学』第116号 雄山閣2011年

写真図版



向山戦争遺跡の遠景(北西方向から)



同上(西方向から)

PL.2



1-1号完掘状況



交通壕 K1 から1-1号を臨む



1-2号調査前(北西から)



同上完掘状況

PL.4



1 - 6号完掘状況



1 - 7号完掘状況



交通壕完掘状況(尾根側から)



同上(斜面下から)



2-1号と坑道北側入口調査前風景



坑道南側入口の調査前風景



2-2号完掘状況(北西から)



2-3号完掘状況(北西から)



坑道 C 区調査前の状況



坑道 A 区調査前の状況(北側入口から)



坑道 A・B 区完掘状況(北側入口から)



坑道 C 区完掘状況(東から)



坑道 D 区完掘状況(南から)



坑道 E 区完掘状況(D 区から)



6号完掘状況(北から)



同上(南から)



8号調査前(南から)



同上完掘状況(南から)



9号調査前(南東から)



同上完掘状況(南東から)



10号完掘状況(北から)



14号完掘状況(北から)



15号調査前(北から)



同上完掘状況(北から)



16号完掘状況(北から)



同上(南から)



18号調査前(北から)



同上完掘状況(北から)



19号調査前(北から)



同上完掘状況(北から)



19号低床部



20号完掘状況(南から)



22号調査前(南東から)



同上完掘状況(南東から)



27号調査前(北から)



同上完掘状況(北から)



27号のカスガイと横木出土状況



同上入口付近の傾斜面と横木出土状況



28号完掘状況(北から)



同上入口付近の傾斜面と横木溝



32号完掘状況(東から)



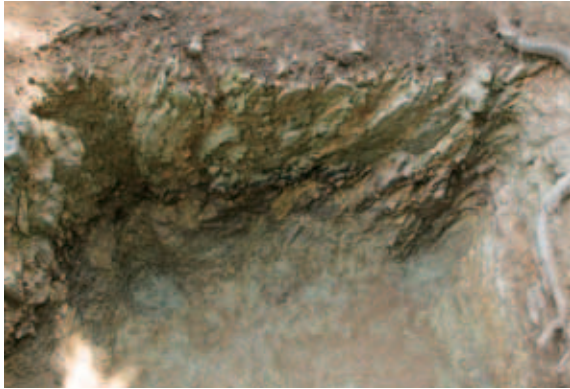
33号完掘状況(南東から)



37号調査前(南から)



同上完掘状況(北から)



1-1号柱穴



交通壕 K1 セクション(北から)



坑道 D 区西壁の掘鑿痕



22号テラス



14号完掘状況(北から)



10号床面の横木



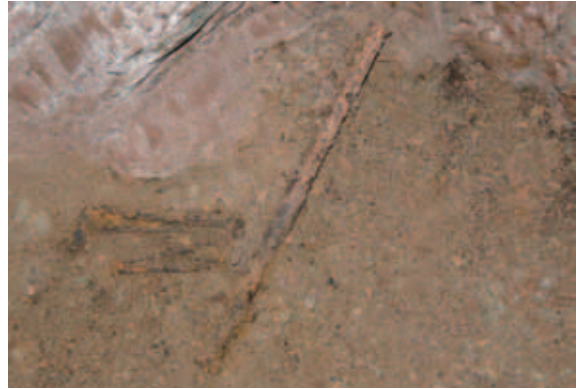
16号床面の横木



16号張出し部分(西から)



1-6号脇カスガイ出土状況



坑道 A 区カスガイ・センサン棒出土状況



坑道 C 区カスガイ出土状況



10号カスガイ出土状況



交通壕 K1 カスガイ出土状況



15号薬莖出土状況



19号カスガイ出土状況



32号十字鍬出土状況



作業風景1(枝の伐採)



作業風景2(交通壕 K1の掘削)



作業風景3(坑道天井の補強)



作業風景4(坑道 A 区の掘削)



作業風景5(坑道 C 区の掘削)



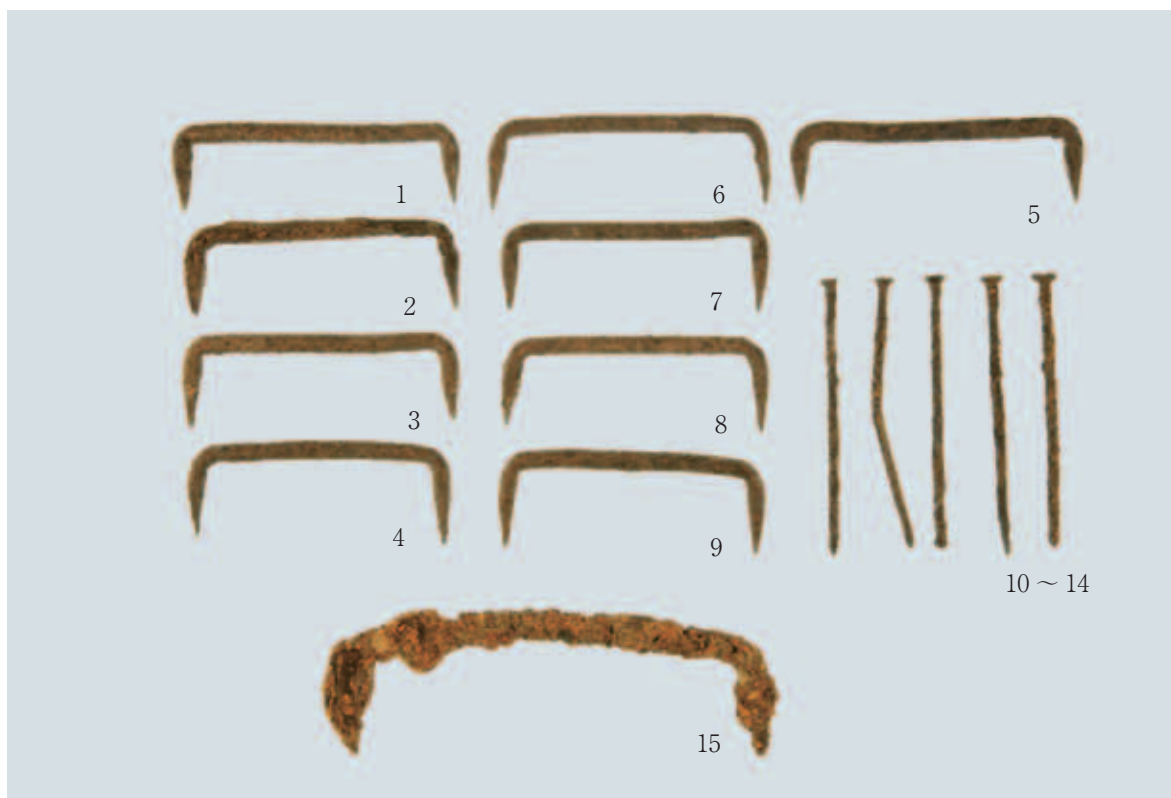
作業風景6(坑道北入口の掘削)



現地説明会1(坑道入口付近)



現地説明会2(交通壕 K1 付近)



1群出土のカスガイ (1 ~ 9・15)と釘(10 ~ 14)



坑道出土のカスガイ (17 ~ 19・31)とセンサン棒(30)



坑道出土のカスガイ



坑道出土の釘抜き槌(40)とチス(39)



坑道出土の銅線付釘と釘



横穴出土のカスガイ①(2-2号：49 10号：50～52 14号：57・58 16号：103)



横穴出土のカスガイ②(19号：53～56 27号：105～110)



同上出土のカスガイ(28号：121～124 30号：130)とクサビ(16号：104)



15・28号出土及び採集のガイシ(15号：102 28号：126～128 29号：129)



15号出土の薬莖(59～101)



16

1群出土の金具



132

32号出土の十字鋏

報告書抄録

ふりがな	むこうやませんそういせき								
書名	向山戦争遺跡								
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第126集								
編著者名	出原恵三								
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター								
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671 FAX 088-864-1423								
発行年月日	2012年3月1日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
むこうやませんそういせき 向山戦争遺跡	こうちけんなんこくしいたちの 高知県南国市伊達野	39204	040286	33° 33′ 31″	133° 37′ 38″	2008.9 ～ 2009.2	4,000	道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
向山戦争遺跡	戦争遺跡	近代		交通壕 観測用竪坑 横穴 坑道 砲床		カスガイ 釘 ガイシ 銅線 薬莖		「本土決戦」陣地跡	
要約	<p>第二次世界大戦末期に構築された「本土決戦」陣地跡である。香長平野の南部を東西に延びる通称向山と呼ばれている丘陵の尾根や北側斜面部、そして地下に設けられている。</p> <p>尾根には稜線沿いに方形や楕円形状の平面プランを持つ竪坑状遺構が4基掘られており、8本の交通壕で繋がっており、交通壕には退避坑と考えられる土坑が随所に見られる。この尾根は、南部の平野やその南に広がる海岸線、飛行場が見渡せるところにあり、砲兵隊の観測所と考えられる。北斜面には横穴19基、竪穴状遺構10基、土坑状遺構、平場状遺構、軍道が設けられている。横穴は4つのタイプから構成されているが、それぞれ異なった機能を持っていたものと考えられる。横穴の多くは陥没していたが、入口付近には扉の柱穴と考えられる小ピットがあり、奥部の壁や床面には坑木やそれを支える横木を埋める溝が掘られ、一部ではあるが木材と共にカスガイや釘、銅線の巻かれたガイシなどが出土した。これらの横穴は5つの群をなし、他の遺構も一定のまとまりを持って展開している。地下施設は、山腹を貫く延長77mの坑道と作戦室と考えられる部屋が設けられ2本の連絡坑によって結ばれている。坑道の床と壁には坑木を埋める溝が90cm間隔で整然と並んでおり、床面には部材の一部が見られた。カスガイや釘などの構築材も出土している。この坑道は、幅2m、高さ1.9mを測り坑道の中では最も大きな「大本坑道」に属する。</p> <p>大戦末期、高知平野は連合国軍の上陸地点の一つに目されており、多くの部隊が投入されて「本土決戦」準備が行われていた。海岸部には「拘束兵団」が置かれ、内陸部には「決戦兵団」が展開していた。当時の記録を参照にすれば、向山戦争遺跡は後者部隊の南部展開に際して、主として砲兵部隊が使用する陣地であった可能性が高い。斜面部の各遺構に迫撃砲を置き、尾根部はその観測所である。坑道は、部隊が迂回することなく南の平野に移動する通路としての機能を有していた。今次調査を通して、これまでほとんど顧みられることのなかった「本土決戦」の具体像を知る上で貴重な成果を得ることができた。</p>								

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集

向山戦争遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ)

2012年3月

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 株式会社 飛鳥